

---

# キメラの巣

ヒロユキ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

キメラの巣

### 【Nコード】

N2680H

### 【作者名】

ヒロユキ

### 【あらすじ】

怪物キメラは実在する？生徒の失踪事件と謎の噂。ジャーナリストの父を持つ少女、成実は後輩の清人と共に事件の真相の調査に乗り出す。発見された行方不明の生徒たちは事件の記憶を失うという奇妙な共通点を持っていた。そして、事件の背後に蠢く黒い影の正体とは？これは、ただの探偵小説ではありません。真実を追い求めるジャーナリストの物語です。

## プロローグ（前書き）

今回は以前から考えていたミステリーを書いてみることにしました。なるべく今回は話を短く切って、毎日更新することを目標とさせていただきます。

## プロローグ

### キメラ

ギリシャ神話に登場する伝説上の怪物である。

複数の動物が組み合わせられた面妖なその姿には様々な説があるが、その一説によると、頭がライオンで、胴体がヤギ、尻尾が蛇だという。

その怪物は口からは火を吹き、人里に来ては、人を襲っていた。

大暴れするキメラに人々は成すすべもない。

しかし、困った人々の前に現れたのが、英雄ベレロフォンである。

彼はリュキアの王、イオバステの命を受け、キメラ退治へと向かったのだ。

キメラとはまともに戦っても勝ち目はないと考えた彼は、ペガサスに乗って、鉛を塗った槍をキメラの口に突き刺した。

それにより、キメラは窒息し、彼は怪物を倒すことに成功した。

英雄の果敢な戦いによって、人々には平和が戻ったのだ。

それが、神話に登場するキメラの話である。

時は流れて、現代。

そんな伝説上の怪物の話をする人間など、道行く人々の中に、まず、いないと言っていていいだろう。

テレビゲームや、ファンタジー小説の中で登場することはあるぐらいで、人々の生活の中でそうお目見えするものではないのだ。

紀元前に作られ、語られた物語など、科学技術の発達したこの時代の前では見る影もない。

しかし、ここに例外が一つ。

この世界にまだその怪物が確かに呼吸をしている証拠がある。

最近、とある高校で、囁かれている噂である。

「ねえねえ、知ってる？」

「何が？」

「怪物が学校の中に入り込んだ話よ」

「怪物って？」

「キメラよ、キメラ。確か、頭がライオンで、体がヤギ、尻尾が蛇

っという……」

「馬鹿じゃないの？ そんなものが学校に、そもそもこの世にいるはずがないじゃない」

「本当なんだってば。どうにもその怪物、人を襲うらしいよ」

「そりゃ、怪物だから、そういうものなんですよ？」

「ああ、信じてない顔だ」

「信じると思っただ話をしてるんだとしたら、おめでたいことね」

「むっ、そんなこと言ってる……」

「言ってるって？」

「カメラに襲われちゃうんだから！」

## 第一章 新聞部の日常 <1>

小さな部室の北側の壁には窓がある。

普段、降り注ぐ暖かな陽光に縁のないその窓はその光を取り込むことなく、専ら換気用として使用されていた。

広国高校<sup>ひろくに</sup>一年の妻沢清人<sup>つまさわきよひと</sup>は今日も勉強がてらに部室を訪れ、その窓のクレッセント錠に手をかけた。

鍵をはずし、スライドさせ、風の通り道を作る。

そうでもしないと、この部屋の積もり積もったほこりっぽい古めかしい匂いが籠もったままとなるのである。

「はあ……」

窓の向こうには校舎の外、通りに沿って植えられた街路樹が見えた。

太陽の光をいっぱい吸収しているのか、生命力に満ちた、濃い色の厚みのある青葉が風に揺れている。

そこから漂う透明で清潔な空気が彼の元にも届いていた。

そんな時、わけもなく背伸びしたくなる。

彼が今、窓際に立ち、うっとりとした表情で深呼吸しているのはこういうわけであった。

新緑の季節、五月。

清人がこの高校に入学してから約一ヶ月が経った。

話ばかりでうんざりするようなオリエンテーションが終わり、クラスメイトたちとも次第に打ち解け、高校での生活が本格的なスタートを迎えた今日この頃。

これから始まる三年間の高校生活を思って、静かに熱意をたぎらせるのもいい。

だが、しかし。

「うがー、ひーまーだー」

背後から聞こえるのは、世間で流行の兆しのある五月病を発症しそうな退屈の声だ。

古びた机の両端をばんばんと叩き、両足をじたばたさせている少女がいる。

清人の一つ上の先輩、いなばなるみ稲葉成実だ。

まるでレストランで注文した料理が来ないのに腹を立てた子供のような拳動だが、彼女、列記としたこのクラブの部長である。

机の上でふて寝するように腕の中にその髪をうずめている。

「稲葉先輩、いい加減毎日毎日そんな愚痴をこねるのは止めにしてもらえませんか？」

そんな彼女に対し、苦情を申し立てるのはもうすっかり清人の役目となっていた（その様も板についてきたように見られていたら心外だ）。まだここに来てからはまだ一ヶ月も経っていないというのに、だ。



清人は腰に片方の手を当て、眼鏡の位置を調整する。

「そんなに暇ならどこかに取材にでも行ってくればいいじゃないですか。ここは新聞部なんですから」

清人が指摘した通り、ここは広国高校の新聞部の部室だった。

つまり、稲葉成実はその部長で、唯一彼女以外で新聞部員である清人は、自動的に副部長の役割を当てられていた。

「しゅざいー？ 何よそれ。そんな面倒くさいこと、やるわけないじゃない」

まるで当然のことのように彼女は言い放つ。

新聞部部长にあるまじき言動に、清人はうんざりした。

全く、この人ときたら。

「何を言ってるんですか。ここは新聞部なんです。取材を怠って、いい記事なんて書けませんよ」

しかし、成実はぶいっとそっぽを向く。

「いいわよ、どうせそんなもの書かないんだから」

「また、そんなこと言って！」

清人は成実が向いた方向に回り込んだ。憤然たる面持ちで説教を始める。

「いいですか！ この部の存続がかかっていることなので、はつきり言わせてもらいますけどね。年に最低二回の学校新聞を制作する

ことは、このクラブの活動内容としてきちんと明記されていること  
なんですから、そこを自覚してもらわないと」

「だって、面倒だし……」

目を細めて、ぼそつと言う成実。

その態度にむっとした清人はますますヒートアップする。拳で成  
実の机を叩いた。

「そんなことだからいけないんです。国民のことを考えず、ほつた  
らかして好き放題やっている王がいたら、国民はどう思いますか？

当然、嫌気がさしますよねえ、国を出て行きますよね。稲葉部長、  
あなたがこの半年やってきたことは全てそれと同じことです」

「だあ、もう……また始まった」

彼女はマシンガントークの防備のためか、長い髪で耳元を覆う。

「長である先輩がしつかりしないから、部員が集まらず、僕と二人  
だけの部活になっているんですよ。ただでさえ、文化部は人気がな  
いんですから、これは由々しき事態です」

清人は腕組みをして、続きを話す。

「今でこそ、こうして放課後に部室に来てリラックスしていらつし  
やいますがね、このままグータラ生活して、なんら実績のないクラ  
ブは、部費も削られ、拳句の果てに廃部になるんですからね。分か  
ってますか？ この場所も使えなくなりませう」

彼の説教は留まるどころを知らない。

「そもそも、先輩には上級生としての自覚がありません。これは新

聞部部長を務める以前の問題です。いつまでも子供じゃないんですから……」

などなど、云々。

後は何を話したのか、本人も確かに記憶していないし、成実もこっそりイヤホンで音楽を聴いていたので、省略する次第である。

「ねえ、妻沢君」

執拗なほどの終わりなき説教がようやく終わり、十分ほど経ったころ、成実が清人を呼んだ。

先ほどまでの殺伐とした空気はとうに失せ、爽やかな五月の涼風が部屋を吹きぬけていた。

成実は先ほどの机の上でなにやらレジャー雑誌を取り出し、ページを捲っている。

一方、清人はというと、窓際に自分用の椅子と机を用意し、授業の復習をしていた。

「何ですか？」

「最近さあ、抜け毛、気になったりしてない？」

英単語を綴っていたペンを止めた。

「は、はああ？ いきなり何を言い始めるんですか」

清人には唐突な彼女の質問の意図が分からない。  
そんな彼の髪の毛の生え際を成実の目が探る。

「怒ってばかりいるとき、なんていうか、単刀直入に言って……  
禿げるよ」

しれつと彼女は恐ろしいことを言う。はっとして、彼は自分の額  
に手を当てた。

「そんな、馬鹿な。禿げません。禿げるわけないでしょうが、こ  
んに若くして」

「わかんないよ。あれって遺伝とかも関係してるって言うし、お父  
さんとか、おじいさん、禿げてたりしてなかった？ 両方とも禿げ  
てたら相乗効果できつと普通より早く禿げるかも」

清人は自身の記憶を探って首を振った。父の髪には異変はなかつ  
たし、祖父は白髪であるがきちんと残るべき場所は髪が残っている。

「予想に反して残念ですね、二人とも禿げてません」

「本当に？」

「本当ですって」

「……」

「……」

「……かつら、ってこともあるよね」

再び単語を綴ろうとしてペンが止まった。

今日の先輩はしつこい。いやに付きまどってくる。

「ねえ、かつらだったとしたら？」

「そうだとしても、家族にそれを隠し通せるとは思えません。ぜつ  
たいばれてるはずですよ」

冷静に判断を下してそう返した。ペンをまた握る。

しかし、彼女はまだあきらめていないのか、ぼそりと続けた。

「それは分かんないよ。もしかすると、他の家族は知っていて、妻沢君が将来を悲観しないように、ずっと黙ってるのかも」

ふざけるな、それが本当だとしたらこっちは人間不信になるって。どれだけかわいそうな気の遣われ方してるんだよ。

と、これは清人の心の声。

「……いつたいさつきから何のつもりですか？ 嫌がらせならやめてください」

「違っちゃば、私はね、今現在残っているその希望の髪の毛たちを、大切にすべきだってことを言いたい。いつなくなるか分からないから、日々、気をつけないとね。普段、怒らないようにするとか……」

「それは、僕を牽制してるんですか？」

「はあ、違っちゃたら……」

彼女はわざとっばい溜息をつく。

「もう結構です。こんなの高校生がする会話じゃありません。なんですか、禿げとか、かつらとか。もうお終いです、僕は勉強します」

## 第一章 新聞部の日常 <2>

それから時計の針がまた傾いた。

清人の勉強は、英単語から翌日に控えた数学の小テストの練習問題  
を解くことに変わっていた。

入念に解き方をチェックしながら、その方法を頭に入れていく。  
一つ、また一つ。ノートに赤い丸が増えていった。それが彼の自  
信につながる。

彼は高校に入ってからは数学にだけは置いてけぼりにされたくな  
いと、心に強く誓っていた。

彼には他校に通う二つ年上の兄がいるのだが、その兄が何度も警  
告してくれたことがある。

『数学には気をつける』

くしゃくしゃに丸めたテストをゴミ箱に放り投げながらそう口す  
っぱく話してくれたのだ。

当時、中学生の身分でありながら、ある程度、この少年に数学の  
恐ろしさの抗体が出来たのはそのおかげだろう。

「あ、あー！ー！」

しかし、彼の大切な勉強に邪魔が入る。  
成実が雑誌をページを開いて、大声を上げた。

「……今度は何ですか？ 先輩」  
「ちよつと、見てよ、これ！」

椅子から飛び上がった彼女は声を弾ませて、清人の前に駆けてきた。

「これ！」

と指差した雑誌を押し付けてくる。

それは見開きいっぱいにかでかと飛び出すように文字が並んだ特集ページだった。日本に新しく出来た、巨大テーマパークであることはすぐに分かる。

ここ数ヶ月はテレビなどのメディアには引つ張りだだった人気テーマパークである。清人も意識せずともその情報を耳に入れていた。

何でも元々は外国のテーマパークだったものが、こうして日本にも進出してきたらしく、特にずば抜けた絶叫マシンの多さが注目されている。

ページにもジェットコースターに乗った人々の写真が真ん中に掲載されていた。

「スペーストレジャーランドじゃないですか？ 確か、すぐ隣県に出来たんですよ。それがどうしたんですか？」

「むっ、察しが悪いわね。ここに行きたいのよ」  
「行けばいいじゃないですか。まだ出来たばかりで人でごったがえしてると思いますが」

清人は興味がない様子で素っ気無い返事だ。

元来、彼は人が多い場所はあまり好きではないのである。

しかし、成実はというと、

「ここを次なる取材の場にしましょう」

と雑誌を丸めながら夢見る少女のような瞳で提案してきた。

これはあまりに突拍子もない発言だ。

「何をまた、とんでもないことを。そもそも、行くとして誰がお金を出すんですか？」

「きつと臨時の部費が下りる」

「下りません、下ろさせません、下りたとしても、行かせません」

と清人は意識したわけでもなく韻を踏んだ否定の仕方をした。

「う、うまい。やるなあ」

それに対し、思わず拍手をしてしまった成実。しかし清人はそれを無視して言及した。

「第一、何のために取材に行くんですか。目的のはっきりしない取材では、行ってもレポートにまとめきることが出来ませんから」

「……全く、細かいことを気にする奴だ」

「そこは慎重で冷静な人間だと言って欲しいですね。ともかくそんな場所に新聞部では行くことは出来ませんから」

清人は冷たく突き放すように言う。



「ぐぬぬ……」

すると、成実は自分の頭に雑誌を被せて悲しげに鼻を嘍った。

「ああ、神様、どうしてこんなに私に歯向かう部員がいるのかしら。どうか、排除してください」

これには清人のツッコミが炸裂する。

「あんたが、無理やり入れたんだろうが！」

そして、二人がじりじりと睨みあい言い争っていたとき、突如、部屋のドアが開いた。

普通、部屋に入るときはノックをするのが常識だが、鼻歌を歌いながら入ってきたその少女はそんなこと気にする素振りもない。

あまり身なりを気にしないタイプの人間なのか、髪の毛はぼさぼさ、シャツの襟は曲がっているし、ブレザーの一つのボタンは取れかけている。

まるで自分の家に帰ってきたかのように、

「こんちわーッス」

陽気な挨拶をした。

しかし、その少女の軽やかな足取りが前方の二人を見て、はたと止まる。

「……………」

すると、にらみ合った清人と成実の視線が一瞬、無言でその少女を捉え、すぐに元に戻った。

さすがに場の空気を読んだ少女は額に手を当てた。

「ありやりや、またいつもの漫才が始まっているようで。まあまあ、なるみんなにきよぼん、ここは落ち着こうぜ」

「漫才じゃないです！」

「漫才じゃないわ！」

二人の気迫に、およよ、と少女は後ずさる。

「麻子まこには関係ないの。下がっててくれる？」

「そうです狐坂先輩きつねがはか、これは先輩と僕の問題ですから」

狐坂麻子と呼ばれた少女は言われた通り、押し黙った。素直にくるりと体の向きを半回転させドアに向かう。

そのまま二人の戦線から離脱するかに見えたが、一度部屋を出てから、すぐに戻ってきた。

しかめ面をして言い合いをしている二人に向かって、こう言う。

「おーい、外にまで喧嘩の音が聞こえておりますよー。あんまり度が過ぎると部の評判が落ちて、先生の耳に入れば部費が削られますっつば」

それにピクリと反応したのは、清人の方だ。悲しいかな、やはり、部費や評判という言葉には過剰に反応してしまう人間なのだ。

「確かに、それはまずいです。こんなことしている時じゃない」

冷静になつたらしく、呼吸を整えて椅子に座る。

「ちよつと、何を途中で終わらせてるのよ!」

それでもまだ成実は諦めていないようだったが、麻子が彼女の机から取り出したものを見て、顔色を変えた。

「ほら、これ食べちゃうぜ」

それは彼女が放課後に食べようとあらかじめ用意していたクッキーの箱だった。自宅に置いてあった頂き物をそっくりそのまま学校に持ち込んでいたのである。

「こら、麻子。それを机の中に戻しなさい」

「じゃあ、あたしの言うとおり、喧嘩をやめな。愛しいお菓子のことを思えば、熱くほてった気持ちもすぐに冷えるっつてば」

「……はいはい、分かりましたよ」

さすがに、自分のお楽しみを横取りされてはたまらんと大人しく成実は従った。

すぐさま麻子からクッキーの箱を取り上げ、大事そうに頬ずりする。

「ああ、私のクッキーよ」

それを見て、麻子はくすくすと笑った。

成実が箱詰めされたクッキーの箱を開けると、辺りにふんわりと甘く香ばしい匂いが広がった。

クッキーたちはプラスチックのトレーで綺麗に仕分けされ、アイモンドがちょこんと乗せられたものや、紅茶の葉が生地にブレンドされたもの、楕円形のシンプルなものもあれば、チョコチップが練りこまれたものもある。

そのどれもが可愛らしい。

小腹のすいた年頃の少女には、それらがとても魅力的なごちそうに見える。

「じゃあ、クッキーおくれ」

誘惑に耐え切れず、麻子が手を差し出す。自分にも分け前を寄越せ、ということなのだろう。

しかし、成実はそれを見てきよとんとした。

「何で、麻子にあげないといけないの？」

「喧嘩の仲裁をしたのはそれなりの功績ではにやいのか？」

えへん、と彼女は胸を張った。

「何よそれ、頼んでないけど」

しかし、そのあまりにもあっさりとした口調に、麻子はげんなり

と肩を落とす。

「だ、だめ？」

肩を震わせながら懇願した。

「駄目よ、駄目」

「どうしても駄目か？」

瞳を潤ませた彼女は恨めしそうにクッキーが入った箱を眺めている。

そこで成実は思いついた、と指を鳴らす。

「そうだ、じゃあいつものように面白い話をしてよ。そろそろいいネタ掴んでるんじゃない？」

その問いに対し、麻子にはやりと白い歯を見せて笑う。意味もななく急に声を潜めた。

とてつもなく怪しげな雰囲気だ。

「ほお、情報をお買いになりますかね？ 言っておきますがね、こちらも商売とあれば高くつきますぜ、旦那」

「妥当な交換条件でしょうね？」

「クッキー十枚でどうよ」

麻子は両手の指を全部立ててみせる。

その背後で清人は彼女たちのやり取りを見つめていた。

細かい所を除き、まるでどこかの映画のワンシーンのような取引

だ。

この狐坂麻子という少女は、こうして時々新聞部を訪れることがある。清人が成実に聞くと、彼女はただの友人に過ぎないと言うが、どうにもこういいう場面を見ていると、それだけではないのだろう。

うさん臭い匂いがぶんぶんする。

二人の関係、いや、新聞部と情報屋である彼女との関係だろうか。

いつごろからそれが続いているのか知らないが（彼女は二年生なので長くて一年ほどだが）、新聞部はその情報を元にして記事を書いている気配があるのを清人は感じていた。

これは過去の新聞を見せてもらって知ったのだが、明らかに新聞の余ったスペースを埋めるためのどうでもいいゴシップが見受けられた。

例えば、何組の誰と誰が交際しているとか、なんとかという先生は元不良だとか、校舎の二階奥のトイレに幽霊が出るとか、そんな塩梅だ（ちなみに、名前の箇所はプライバシーのためか、イニシャル表記となっていた）。

おそらく今回も同じような噂を取引するのだろう、と大方の予想をつけている。

健全な学校新聞を目指している清人にとっては彼女たちのやり取りはいい気持ちがない。横目でちらちらと観察した。

「駄目、上限は七枚までよ」

成実が手でバツテンマークを作る。

「う……」

「それが嫌なら交渉は決裂ね」

「よし、じゃあ七枚で」

どうしてもクッキーが食べたい麻子はしぶしぶながら成実の要求を呑んだ。

「面白いネタなんでしょうね？ それによっては報酬を減らすわよ」

「大丈夫、ご安心あれ、こっちも信頼を売りにしている商売だからね、ふふふ」

その笑いには間違いなく聞く者を不安にさせる成分が含まれていた。

「ほら、報酬は前払い、前払い」

「……はい、七枚ね」

成実は数を正確に数えながら麻子に手渡す。

「ふふつ、確かに頂きやした」

「それで、どんな話なの？」

チョコチップクッキーの端を齧りながら成実が麻子に話を促す。すると、彼女は嬉々として語りだした。

## 第一章 新聞部の日常 < 4 > キメラ

「キメラ、って知ってる？」

おいしそうにはむはむとクッキーに齧りついた麻子がそう切り出す。

「キメラ？ 何よそれ？ キメラ？」

「ハハ、違っつて。なるみんな知らないの？ 怖い怪物の名前だつてば」

「キメラ、そうか、何だか聞いたことがあるような……」

そこへ清人が割り込んで説明する。いつの間に現れたのか、二人の真横に立っていた。

「ギリシャ神話に登場する想像上の動物の名前ですね。女神エキドナが産んだとされ、ライオンの頭に山羊の体、蛇の尻尾を持った体だそうです。確か、火も吐くんでしたね」

「おお、きよぼんは博識だなー」

麻子がクッキーを頬張ったまま感心した。

「いえ、それほどでも」

言いながら、成実の箱からこっそりクッキーを掠め取る。

「あ、こらー！」

「いいじゃないですか、一枚くらい……あ、おいしい」

「きよぼんもこの味が分かるか、大人だなあ」



「それはどうも」

すると、清人を見つめながら膨れ面になった成実は、麻子に先を促す。

「それで、その怪物がどうしたの？」

「それがねえ、いるらしいんだよ」

麻子は意味ありげにおどろおどろしさを含ませた低い声で言った。

「居る？ 居るってどこに？」

「……ここ……」

麻子は指で真下を差した。すると、成実は急に慌てだし、何を勘違いしたのか「どこ、どこ？」とクツキーが入った箱の中を探りだした。

「むふう、違うってば、なるみん。学校、学校。学校の中に、キメラが入りこんだんだって」

「学校に？」と成実。

「キメラが？」と清人。

「まだ噂はそんなに広まってないけど、面白そうな匂いがあるぜ」

麻子は残っていた最後の一枚を食べきると、スカートの膝元に落ちていた食べかすを両手で払った。満足そうにおなかをさすってしまった。

「……」

しかし、二人は沈黙しているので、麻子は拍子抜けした顔をした。

「え、な、なんだよお、その冷たい反応は」

「何の冗談よ」

「信憑性ゼロですね」

清人は手のひらをひらひらとさせる。

「そう、かなあ？」

「ここは高校ですよ、小学校ならともかく、そんな根も葉もない話、まだ幽霊が出るって噂の方が信頼性がありますよ。ねえ、先輩」

「そうよ、そんな噂を流そうとしている人間の顔を見て見たいわね。いったい何を意図してそんな噂を広めようとしているのかしら？今時流行らないジョークだと思っわ」

二人の反応は冷ややかだった。清人などきびすを返し、机に戻る。  
うとしてる。

「あーあ、麻子にクツキーあげるんじゃないかった」

「……ちよつと待ちな！」

麻子は清人の腕を掴んで止めた。

せっかく自分がいち早く仕入れた情報をこんなにも無下に扱われたのであれば、彼女としてもプライドが傷ついたらしい。

「これには続きがあるんだって」

「……噂の続き？」

「そう、ここが重要なんだから」

「何よ、聞かせなさい」

成実が興味を示したことで、彼女も少し自信を取り戻したようだ。嬉しそうに鼻の頭を搔く。

「それがね、近々、そのキメラがこの学校の生徒を襲うらしいんだってさ」

「襲う？」

穏やかではない内容に、成実は眉をひそめる。クッキーに伸ばしかけた手が止まった。

「もしかしてその噂は、全体で何かの比喩なの？」

つまり彼女が考えたことは、キメラとは何か、それに類する不吉なことや、別の恐ろしいものを例えた、言い換えた言葉ではないかと思っただけである。

「さあ？ あたしはそれ以上、知らないもん。ただ、襲うってことは確かだよ」

「その噂は近いうちに、学校で何かが起こるってことを示してるのね」

成実が念を押すように聞くと、彼女は、「うー？」と濁った答え方をした。

「そうともとれるよ、ね？」

「そんなまさか。真剣に考えすぎじゃないですか？ ただ、皆を怖がらせた誰かが、適当に考えた話にしか僕には思えませんが」

清人が口を挟む。

「うーん」

すると、成実は両腕を挙げて背伸びをしながら、椅子の背もたれに倒れこんだ。

「分からーん」

そして、体勢を元に戻すと、先ほど読んでいた雑誌に視線を落として、あ、と声を漏らした。

「何？なるみん」

彼女が開いているのは先ほどのテーマパークのページだ。そこに掲載されているアトラクション、「モンスターダンジョン」を覗き込み、真顔でこう言った。

「ねえ、もしかしてキメラってここから逃げてきたのかな？」

キメラ

忍び寄る闇の孤独を感じて、彼は動き出す。

誰もいない、白い校舎の壁に囲まれた影の中で、そっと息をひそめている。

その爛々《らんらん》と輝く双眸が、狙うべき獲物を探していた。

太陽の光は街の向こう、山々の稜線の際で静かに燃え、それに対峙する空は滲み出した薄い夜の藍。

クラブに精を出す生徒たちの声はとうに消えうせていた。教室の明かりもちらほらというほどしか確認できない。

その時、彼が身を震わせたのは、突如響いた笑い声のせいだった。

背丈のばらばらな少年たちが数名、門に向かって談笑しながら歩いている。

ああ、あいつだ。

両目がナイフのような鋭い光を見せる。

ついに、踏み出した。

遠い昔に大切なぬくもりを忘れていたその体がどこか軋んだ音を立てる。

門の向こうで手を振り別れた、一人の少年に狙いを定める。

しばらくは気がつかれないよう、息もやっと肺に届く程度の浅い呼吸だ。

街の埃が舞う大気は冷たい寂しさを含んでいるようで吸うというより、歯で噛み潰す。

ほどなく、少年が路地への曲がり角を曲がった。

思ったとおりだ。

ここまでくればいいだろう。

待ちきれない彼は、背後からその少年に走り寄った。

全ては、彼の行き場のない怒りによって、始まりを迎える。

## 第一章 新聞部の日常 <4>>キメラ(後書き)

これで一章の部分が終わりです。

そろそろ事件が起こりそうな気配が高まってまいりました。  
次回はちよつとした過去編へ。

## 朝の訪れ      o l d   m e m o r y

朝、目を覚ますと私はよく父が帰宅しているのか確認したものだ。

その日もいつものように時間が来て、安らかな睡眠に暴力的な目覚まし時計が鳴って起きる。

昨晚、半分開けっ放しにしていた自室のドアの隙間から母が用意しているのだろう、香ばしいパンの焼ける匂いが漂ってきていた。目をこすって起きると、時刻を見て、ドアの横にかかっているホワイトボードを見た。

それが、私の毎朝の儀式。

黒い線で三つに分けられたボードには母と私、それから父と名前が記入されている。

でも、やっぱり。

父の欄は今日も真っ白なままだ。

そのすぐ横の棚の上、ふかふかのテイディベアの手にはペンが握られたまま。黒い瞳が寂しそくに私の目には映った。

がっかりして、不貞腐れて、もう一度ベッドの中にもぐりこんでやろうか、と思う。

代わりに、まくらを顔に押し付けてみた。

母が名前を呼ぶ声がした。



朝だから、朝食を食べなさいというのだろう。

はいはい。

まくらに顔をつけているので、くぐもった声の返事だ。  
長い髪を払いのけ、パジャマ姿のまま立ち上がる。

リビングのテーブルには湯気の立つスープが用意されていた。私は椅子に座らず、キッチンに立つ母のエプロンを引っ張った。

お父さんは？

今日は帰ってないわよ。

毎朝繰り返される、ほとんど意味を成さない儀礼的な親子の問答だ。

テレビをつけてごらんなさいよ。

お父さん、出てるかもよ。

母は優しくそう提案した。

私は仕方なく、テレビのリモコンを探し、電源を入れた。  
面白くもない、日々の出来事を話すニュース番組。

朝から不機嫌そうに顔に皺を寄せたキャスターが昨今の不況に熱弁を振るっている。私は父の姿が見えないとすぐにチャンネルを変えた。

どこにもいない。

私はそれを母に告げた。

そう。

母の返答は慣れたものだった。感情は含まれていない。

私はぶすつとしたまま椅子に座り込む。

父がテレビに出ていないと寂しいが、仮にいたとしても画面に映し出された二次元の父など、本物ではないと私は知っていた。つまり、私にとってはどっちでも大差ないことだった。

お父さん、何してるの？

私はマイクを持ったレポーターが喋るテレビを消して、スープを啜る。

お仕事よ、お仕事。

どんな？

ジャーナリストっていうお仕事なのよ。記者とも言うのかな？ 世界中を旅して、いろんなことを調べてるの。世

一人で？ 私も行きたいのに。

お父さんはいつもずるい。私達はいつも置いてけぼりだし。

ふふ、まだ成実は小さいから駄目ね。お仕事は簡単なことじゃないの。

母は隣に座って私の頭を優しく撫でた。  
そして、微笑んでいるその顔を見上げる。

その表情が突然、止まった。  
固まった。

テレビが砂嵐に変わるように、両端から引っ張られたように風景が歪んだ。

視界が色を失う。ブラックアウト。

映像が切り替わる。

あの、いつもと違う朝を思い出していた。

やたらテレビの音量が大きく鳴り響いている朝で、私が階下に降りると、画面にはどこか遠い国の戦争の様子が映し出されていた。

お母さん、テレビうるさいよ。

しかし、いつもの場所に母の姿はなかった。

廊下に出る。ぎょっとした。

母は玄関の固定電話の受話器にすがりついていた。彼女は穏やかな性格に似合わない泣き声で何かを話しているのだ。

その背中が妙に小さく見える。

夫は見つかってないんですか！

どこに居るんです？

お願いです。見つけ出してください！

相手が何かを話している声。

いいえ、あの人が死ぬはずありません。  
お願いです。もう一度会いたいんです。

泣き崩れる母の背中に私はどうしたのか、覚えていない。  
ただ、気がつけば、寝ぼけた頭のまま、母に抱きしめられていた。

強く、窒息しそうなほど強く。  
なぜか、サイレンの音が脳裏で鳴り響いていた。

ひだまりのような母の匂い、だ。  
じわり、と目じりからあふれ出した何かが、エプロンに吸い込ま  
れていった。

## 第二章 記憶喪失の少年 < 1 >

目が覚めると成実には自分が教室の机で寝ていたことに気がついた。

「う、あれ？」

身体を起こすと同時にチャイムが鳴る。

担任教師の枡口が、騒ぎ始めた生徒を黙らせるために手を叩いた。

「おうい、今日のホームルームはこれで終わりだ。皆、そういうことだから、充分気をつけるように。それから、何か知っているものは職員室に来てくれ。それでは解散」

なにやら重要なことを彼は言っていたようだが、成実には分からない。全く耳に入っておらず、熟睡していたせいだ。

頭を揺すつて、のんびり背伸びをする。

そこへ現れたのは、友人の良子だった。

右の視界に彼女が持っているカバンのキーホルダーが見えた。それで成実には彼女だと分かった。それは、彼女が鬘<sup>ひこき</sup>にしてあるバンドのマスコットキャラクターで、それを持っているのはこのクラスでは彼女だけだったのだ。手に入りにくいレア物なのだ、と以前自慢してきたのを覚えている。

そのバンドに影響されたのか、彼女は軽音楽部に所属していた。近づいてきた長身の良子は腰を折って、成実の顔を覗き見る。

「あら？ 寝てたんだ」

彼女は成実の様子を見て推測したようだ。

「うん、おはよう」

返事をしながら、成実は年頃の少女らしくなくぼりぼりと頭を掻く。

「昨日の夜、遅くまで本読んでたから」

そんな彼女に良子は額につんと人差し指を当てた。

「悪い子、早く寝ないからこうなるんだよ」

「ふふ、分かってはいるんだけど」

成実は言いながら、ふと周囲を見渡す。

すると、いつもならすんなり部屋からいなくなる生徒たちが、今日はやけに残っていてところどころでひそひそと話をしている。

「……………？ 何かあったの？」

「うん？ ああ、成実、先生の話聞いてなかったのね」

「何の話だったわけ？」

「私もよく知らないんだけど、四組の沢口和也って男子が一昨日から家に帰ってないんだって」

それを聞いて、彼女は目を睜った。

「そ、それって」

「昨日から行方不明ってこと」

その瞬間、言葉が引き金になったように、成実の脳内を刺激した。古く閉ざされていたはずの記憶の扉が開かれたようだった。ノイズ交じりの音声が聞こえる。

フラッシュバックしたように、頭の中でテレビ画面の様子もよみがえった。

『えー、紛争地帯の詳しい状況は未だ、はっきりとした情報が伝わってきておりません。現地で武装隊の激しい衝突があったようで、現場に居合わせたと思われるジャーナリスト、稲葉洋司さんを含めた数名の安否が確認できていません。繰り返します、現地の情報はまだ伝わってきておりません 』

臨時のニュースを伝えるテレビの声だ。

どうして、今そのことを思い出すのだろう。

あれは父が居なくなった朝のことだ。

凍てついた手が肩に置かれたようなぞっとする感覚を成実に呼び起こす。

全身が金縛りにあったようで……。

「ちょっと、成実。どうしたのよ」

気がつけば、放心していたようで良子に肩を揺すぶられていた。それで成実のはつと我に帰る。

「あ、ごめん。その生徒が行方不明になったんだってね」

「そうなの、どうやら、昨日の夜から家に帰ってなくて、ちょっとした騒動になってるのよ。それで、何か知っていることがあれば職員室に来てって先生が。もしかして、成実、何か知ってる？」

「うっん、名前すらよく知らない人だもの」

「そっ……」

彼女はどうかやら先ほどの友人の放心した状態が腑に落ちず、気になつていたようだったが、成実が気がついていない。

おもむろにぽんと手のひらを叩いた。

「ともかく、これは緊急事態ね。いろいろやらなくちゃ」

「へ？」

良子は彼女の言動に面食らつた顔をする。

「ごめん、今日は先に帰つて。私、用事ができたから」

「ちょ、ちよつと」

啞然としている友人を横目に成実はカバンを持ち上げ、教室の外へと急いだ。

目指すは一年生の教室だ。

「あれ？ 稲葉先輩」

成実が清人の教室を覗き込み、彼の名前を呼んだところで背後から背中を叩かれた。振り返るとハンカチで手を拭きながら立っている清人だった。

「ああ、妻沢君、いたのね」

「どうしたんですか？ 慌てた様子で」

成実がわざわざ教室に来るとは、絶対何かある、と思つている彼は胡乱な目つきである。出来れば逃げ出したかった、という感情は少し歪んでいる口の端から容易に察することが出来た。



「どうしたじゃないわよ。事件よ、事件。麻子の噂が的中したのよ」  
成実は興奮した様子で鼻息荒く説明する。

「あの、行方不明者が出たとかいう話ですか？」

「そうよ、情報が早いわね」

「ホームルームで説明があったのでどのクラスの生徒も知ってると思いますよ」

「まあ、いいわ。ともかく、このまま放っておくわけにはいかない、行きましょ」

彼女がそう言った途端、彼の目が点になる。

「は？ 行くつてどこへですか？」

「決まってるじゃない、取材よ。新聞部だもの、事件のことを調べるの。そしてあわよくば、私達が、行方不明の生徒を見つけるのよ」

自信ありげに人差し指を立てる彼女の前に、清人は冷めた様子で、なんら反応を示さなかった。そして、こう指摘する。

「……先輩、それは僕らの仕事じゃありませんよ」

「なんで？」

「話によれば保護者の方が警察に届けを出しているそうですし、一般人の、ましてやただの高校生の僕らが首を突っ込むことではありません。興味があるのは分かりますが、僕らのような素人ではきつと中途半端なことしか出来ませんって」

「あら、何よその言い草は。いつもいつも取材取材ってうるさいくせに、いざ目の前に絶好の取材対象が現れたとたん、及び腰になるのね」

「……そうではありません。取材することは大切ですが、今回のそれは僕らが出る幕ではないと言っているんです。いいですか、僕は列記とした高校生です。テレビドラマや小説を読んで、ちよつとその気になり、探偵気取りなことをすることは間違いだと思われま  
す。場合によっては他人に迷惑をかけかねない」

清人は彼女の皮肉に対し、熱くなることもなく、正論を述べる。

彼は彼女の後輩でありながら、どこか、彼女の保護者として、監督をしなければならぬと思っ  
ている節があった。

そのため、今回も勇んで走り出そうとしている彼女を止めに入ろうとしたわけである。

しかし、それで「はい、そうですね」と成実が納得すれば苦勞はしない。

案の定、彼女は諦める素振りは見せず、清人の前で人差し指を振ってみせる。

「甘い、甘いわね。私はそんなことに触発され、見おう見まねの低レベルな探偵もどきになるつもりはないわ。そんな低俗なものと一緒ににしないで」

すると、彼女はここで一呼吸入れ、

「いい？ 妻沢君、たとえ高校の新聞部に所属していようと、私たちはジャーナリストなの、立派な記者なの」

「は、はあ」

「そうよ、クールでスマートなジャーナリストが取材を始める基礎基本の理由。それはとても簡単に説明できるわ」

「な、なんですか？」

すると、彼女はそれっぽくポーズをとって、手の指で拳銃の形を作ると、それを真つ直ぐ清人の眼前に向けた。

すばやい動作で、彼女の流れるような長髪が揺れ、振りこぼれた毛先の向こうに見える鋭い眼光は、力強い信念の輝きが満ちているようだった。

「真実を知りたい、それだけよ！」

ドラマか映画の決め台詞であるかのように、びしり、と彼女は言い放った。

「し、真実、ですか」

その美しくもあり、同時にずしりと重量感のある言葉は、少々、高校生が口にするには大仰おおおつに思えたが、清人は頬を叩かれたような思いだった。

少々、彼女が芝居がかったことをしたせいかもしれない。

ジャーナリスト。

それがなんだかはよく知らないが、

少しでもかっこいい、と思った彼がいた。

いや、変な勢いに騙されてはいけない。

清人は浮かんだ感情を消そうとする。

「私はこの事件の真実を知りたい。そう、知りたいの。よって、調査を始めるにあたり、確固とした初步的な理由は満たしたとされるわね」

完全に自らの言葉に恍惚としながら、成実はそうまくし立てる。

「……………」

「なに变な顔をしてるのよ。もし何か手柄を立てられたら、部の人氣も上がるかもよ。これでどう？ 悪くないでしょ」

「ま、まあ」

「何？」

「うーん、少しくらいなら」

清人としては必死に言葉を濁したつもりだったが、彼女は嬉しそうに大きく頷いた。

「オーケーってことね」

「……………ええつと、分かりました」

言いながら、どこか、取り返しのつかない返事をしてしまったかもしれないと清人は冷や汗を掻く。

## 第二章 記憶喪失の少年 <2>

「それで、まず何をするんですか？」

手を拭いたハンカチをポケットに戻しながら清人がそう訊いた。

「そうね、その行方不明になったっていう沢口って生徒がどんな人なのか、行方不明になった状況を調べる必要があるわね」

「今からその人のクラスに行くんですか？ もう放課後で生徒はいないかもしれませんが」

彼は教室の時計を眺めて首を振った。

「ああ、そうよね。うーん、ここはいつそその人の自宅に言ってみない？ そこなら、警察からでもいろんな情報も入ってるだろうし、どんな友達がいるかご家族の方から聞けるじゃない」

「その場所は、誰に聞くんですか？」

「手っ取り早く担任の先生よ。彼の友達なんですって言ったらきくと教えてくれるだろうし」

その発言に清人は細い目で彼女を見た。

「先輩」

「何よ？」

「それは真っ赤な嘘ですよね」

「なあに、嘘も方便よ」

ぺろりと舌を出し、不敵に微笑んで彼女は言う。そこには何か失敗することへの不安は一片も見えない。

こういう時に発揮される彼女の行動力は、目を瞪るものがあることを清人は知っていた。

そのため、大丈夫だろうか、と心の中では思っていたものの、それを口に出すことは無かった。

すると、彼女は有言実行と親指を突き出し、そのまま階下の職員室に向かうべく廊下を進んでいく。

そして、それから数分後、自慢げに小さなメモ用紙をちらつかせ、胸ポケットを入れながら職員室を出てくる成実を清人は出迎えていた。

「本当に出来たんですか？」

「ええ、友達なんですけど、ご家族の方と話したいって言ったら、割とすんなりと。どうにも、沢口って生徒、両親と二人の兄弟で生活してるみたいね。そう話してたわ」

彼女はポケットをぽんと叩く。

「先生には事件のことを話しに来たわけじゃないって分かると多少がっかりされてたけど」

「……職員室でも、やっぱり事件のこと、話題になっている感じでしたか？」

清人はさつきから気になっていたことを訊ねる。すると、彼女はしかめっ面になり、うな垂れた。

「そりゃ、もう。むさいおっさんばかりがさ、隅でソファを固めて顔つきあわせてるの。思わず後ずさっちゃったわ」

「ううん、やっぱり人が一人いなくなっただけですからね。もしかするとその人の自宅にいつても、それどころじゃないって門前払いされるかもしれませんよ」

実は、清人はこのことを気にしていたのだ。

いくらこっちは事件のことを調べるためとはいえ、実際に息子がいなくなってしまうた家族のことを考えると心持ち、穏やかではないだろう。パニックになっている可能性もある。

そうならば、自分たちにとてもじゃないが構っていられないに違いない、そう考えたわけである。

「そうあつても、忍耐よ。話を聞かせてくれるように頼む。それだけ」

「はあ」

「ジャーナリストには、忍耐も必要よ」

彼女はまるでそれが自然なことであるかのように平然とそう言うてのけた。さあ、行きましようとな勝手に歩き始める。

しかし、その後ろ姿を見ながら、清人は呆れていた。

なにしろ、彼女はその同じ口でいつも駄々っ子のように忍耐力の欠片もない愚痴をこねているのだ。調子がいいというか、なんというか……。

ともかく、彼がこのようにしばし無言で立ち尽くしているのはそういう理由である。

二人が住んでいる町は陽なた市と言った。県内でもそれなりに大きな町で、古くよりその土地柄から港町として栄えた土地だった。

なんでも、周囲を山に囲まれ、町の東側を海に面したこの地形は、天然の漁港と呼ばれて名高く、漁のシーズンになると町全体が活気付く。

年間を通してそれほど降水量が多くなく、自然に囲まれた温暖な気候が特徴である。

二人が通う、広国高校はそんな町の中心部から南寄りの住宅地の傍にあった。

町の北西から少しずつ支流が重なり、大きな流れとなつた黒多川が海まで向かう途中、それと交差する形で線路が走っているのだが、広国高校はちょうどその近く、川のほとりの大きな白い建物だ。

近くで見ると、少々壁面がくすんで見えるが、それなりに新しい校舎である。

その校舎の門を今しがた出てきた二人の姿がある。

「それで、彼の家はどこだったっけ？」

成実が先ほどの畳んだメモ用紙を取り出して確認する。清人もそれを横から覗き込んだ。教師の文字で、住所と、簡易的な地図が書かれている。

「ここからそれほど遠くないですね。このまま川を北上して、あ、駅の裏手の辺りになるんだ」

それを見ながら彼はふむふむと頷き、方角を指で差して彼女に示す。

それで目的地の大方の目星がついたので、二人はそこに向けて歩き出した。

道のりは全体で十五分ほどだった。

どこにもあるようなごく普通の青い瓦の家が見えてきて二人は



立ち止まる。

「どうやらそこが示されている沢口和也の自宅らしい。小さな庭には大きく枝を張った柿の木があり、軒先には黒と赤の自転車が並べておいてあるのが外から見える。」

成実が先に歩き、門扉を開けて、玄関で呼び鈴を鳴らした。

「はい、どちら様ですか？」

中から顔を出したのは、成実たちとそれほど年齢の離れていないような長身の男性だった。

「どうやら、彼が沢口という生徒の兄ということだった。」

「聞くと両親は今、警察署の方へ出向いていて留守らしい。」

「弟のことで何か？」

彼からそう聞かれて、成実が説明した。

「自分たちは彼の友人で事件のことを聞きたくて訪問したのだ、と簡単に話した。」

「よければ、お兄さんからでも少し話を聞きたくて、ですね。」

「ああ、いいよ。上がってつてよ。」

すると、意外にもすんなり許しが出た。

「ちょうど今、他の友達も家に来ているところだし。」

成実がぴくりと顔を上げる。

「他にも、誰か来てるんですか？」

「ああ、陸上部の明宮あけみやって一年生の男子生徒。弟とは昔からの付き合いみたいで、先輩と後輩の間柄だよ。知らない？」

下手に知っていると言えば、話がややこしくなる気配を感じた成実は素直に首を横に振った。

中に案内され、靴を脱ぎ、居間に続く短い廊下を歩きながら、成実は後ろの清人に囁いた。

「知ってる？ その明宮って子」

清人は少し考える素振りを見せてから、知っていることを簡潔に答える。

「僕と同じクラスではないので、あまり。でも、校内では先輩たちを差し置いて、かなり足が速いって聞いたことがあります。中学の頃は大会で何度か優勝したこともあるとか」

「へえ……全く知らないわ」

「はあ……」

そんなことを話しながら、案内された居間に入ろうとして、成実はぎよっとした。

入り口のすぐ目の前、自分の足元で平身低頭し、土下座をしている少年がいたのである。

「うわっ!!」

その拍子に、驚いた成実の頭が背後の清人の顔に当たり、眼鏡が落ちてしまった。

「痛っ!!」

「ごめん、大丈夫？」

成実は失態に慌てて振り返り、彼に落ちていた眼鏡を手渡す。清人は少し赤くなった鼻の辺りをさすりながらそれを受け取った。

「ええ、平気です。どうしたんですか？」

「ああ、目の前で人が土下座してたから、びっくりして」「どげざ？」

二人が振り返ると、確かにそこには姿勢を低くして頭を下げている少年が、いや、少し違う。

「11、12、13、14……」

なにやら、彼は数を数えている。

よく見ると、それは土下座ではなく、腕立て伏せをしているのだ。部屋の真ん中で。こちらの存在に気がつくこともなく。

一心不乱、とはまさにこのことだろう。

「じゃあ、何か飲み物を用意してくるから、適当にくつろいでてよ」

なぜかその状況に慣れている様子で、沢口和也の兄はそう言うってどこかに消えてしまった。

そのため、そこには成実と清人、それからなぜか腕立て伏せをしている少年の三人が残されてしまう形となった。

未だ、腕立て伏せを止める様子のない少年に居間に入ることも出来ず、困惑した成実は、

「こ、これはどうすればいいの？」

と狼狽する気持ちをそれだけ、口にした。

## 第二章 記憶喪失の少年 < 3 > (前書き)

文章中に矛盾に近い部分がありましたので、その点を考慮した結果、ほんの少し削除しました。物語自体には大した影響を与えるものではないと思いますので、一度お読みになった方は気にせず、無視してもらって大丈夫です。

## 第二章 記憶喪失の少年 < 3 >

「いえ、すいません。まさか驚かせてしまうなんて思いもしなかったものですから」

テーブルの椅子に座りながら少年がへこへここと頭を下げた。名前は明宮風馬あけみやふうまだと言う。

髪を短く刈り込み、顔立ちのほっそりとした少年だ。そこだけを見れば清人とそれほど変わらない男の子だが、首から下の腕や足はやはり鍛えているだけあって、張った筋肉の形がよく見えた。

色白でひよろりとした小枝を思わせる清人よりも、幾分か屈強そうに見える。

足が速いという噂は本当なのだろうと、成実は内心、納得した。先ほど説明があったように、彼は沢口の陸上部の後輩ということだった。

「もういいわよ。でも、どうしてこんなところで腕立て伏せなんて？」

成実が不思議そうに訊くと彼は、頭を掻きながら、へへっと笑った。

「実は自分、陸上部なんですけれど、いつもだったらこの時間帯は練習時間なんです」

「はあ」

「それで、どうしても身体を動かしてないと落ち着かなくて。だから、止む無くここで腕立て伏せをしてたんです。それはもう癖とい

うか、自分はそういう性質たぢなんです」「  
「ほう、なるほど。そういうことだったのね」

中々、調べがいのありそうな面白い人間だな、と成実は眉を動かす。

「へへへ、すみません」

「いや、もう謝らなくていいけど」

いまいち話題の見つからない清人はそんなことをぼつぼつと話す二人をしばらく眺めていることにしていた。

そうして部屋の中を見ていると、たまたまこちらを向いた風馬と目が合った。彼の口が開く。

「えっと、お二人は沢口先輩とどういう関係なんですか？」

なんとという気もなしに、そう訊かれた。

返答に困り、言葉を失った清人だったが、すぐさま成実が答えた。

「ああ、私達は新聞部なのよ。今回の失踪事件について調べるために今日はやってきたわけ。だから、特に彼と何か関係があるわけではないわ」

「え、すると、友達でも知り合いでも、親戚でもなんでもないんですか？」

「言ったとおりよ。でも、さすがにこのことは沢口さんの家族には言わないで、事件が起こって寄ってきた野次馬だと思われたら、いい気持ちがないでしょ」

「せ、先輩。そんなこと言っていないんですか？」

あっけらかんと全てを話してしまった彼女に対し、清人は風馬の

顔をちらちらと観察しながら注意した。

「だって、事実だし。いちいちどういう人間関係かなんてでっちあげるのも面倒でしょ。ねえ、明宮君、協力してくれる？ 事件についてあなたが知ってることを聞かせて欲しいの」

すると、彼は子供のように両目をぱっちり開けると、嬉しそうに身を乗り出した。

「ええ、いいですよ。かつこいいですね。被害者宅への潜入捜査ってことですか？ 刑事ドラマみたいだ」

清人はそう言った目の前の少年に冷たい視線を向ける。

人が一人居なくなっているのに、この不謹慎な発言はなんだ？ というわけだ。本当に自分の先輩のことを心配しているのか、疑いたくもなかった。

この明宮っていう生徒、ずいぶん能天気な人間だな。清人はそう分析する。

しかし、一方で、成実は興奮している風馬に気分をよくしたようだった。テーブルに肘をついて、どこか利いた風なことを言う。

「ノンノン、そうじゃない。私達は真相を追うジャーナリストなの。その辺のへっぴこ刑事とは違うわ」

「ジャーナリスト、それまたかつこいい響きですね」

彼はうつとりとした表情で頷く。

「そうよ、あなたジャーナリストって何か分かる？」

「ええと……実は、よく知らないです」

「ほう、それがなんたるかを知らんな」



調子付いた成実が座り方を直し、長話をする態勢に入る。

このままだと、二人で違う方向に話が進んでしまいそうだと危惧した清人は軽く咳払いをして会話を止めた。

「えー、ごほん」

「何よ、何か言いたいことがあるの？」

「あのですね。それは今話すべきことではありません。重要なことは事件について知っている情報を、彼に訊くことです」

清人がそう言って、話を本題に戻す。

「ま、まあ、それもそうですね。明宮君、先輩が最後に目撃されたのはどこだか知っているの？」

「ああ、それなら、行方不明になる寸前に学校の校門で別れたっていう先輩の友達が居ます。先輩、それからどこに行ったのか、全く分からなくなっちゃって」

「ふうん。それで、最後に別れたとき、その先輩に何か変わったところはなかったのかしら？ 聞いてない？」

「うーん、そうですね。いつもと変わらなかつたと言っていました。自分も部活の時は顔を合わせるんですけど、普通でしたよ。いつもどおり元気でいらっちゃって」

「とても、自分から失踪するようには見えなかつた？」

「ええ、まあ」

成実はそこで吐息を漏らし、頭の後ろで腕を組んで、「どう思う？」と清人に訊いた。

「そうですね。自分から姿を隠した可能性がないとするならば、なんらかの事件や事故に巻き込まれたって考えるのが妥当ですね」

言いながら、清人の脳裏では数日前に聞いた麻子の妙な噂が引っかかっていた。

『キメラが学校に入り込んだ』

どこか嫌な感じのする話だった。

やはり、もしかするとそれと今回の件は関係しているのだろうか。とすると、沢口和也はキメラに襲われた？

そんな馬鹿な、ナンセンスだと否定する。

「うーん、分かん」

降参した、と成実がテーブルに突っ伏した。

それとほぼ同時に居間のドアが開き、沢口和也の兄がお盆にアイスコーヒーを乗せてやってきた。全員の数を確認し、シロップとミルク、それからわざわざストローも持ってきてくれた。

礼を言っ、三人は受け取る。

「ふう、あんまり人におもてなしすることがないから、インスタントコーヒーが入っている場所が分からなくて、探したよ」

彼は苦笑いしながら額の汗を拭って、角の席に座った。

その様子を見ながら、今度は清人がさきほどから思っていたことを彼に質問をした。

「あの、先ほどからなんだかとても落ち着いていらっしやるように見えるんですけど、もしかして、弟さんが居なくなるこっつて前に

もあつたんですか？」

「え？　そう見える？」

意外そうに彼が言ったので、清人は不躰ぶじつけなことを言ってしまったと、慌てて謝った。隣では、成実がコーヒーストローをかき混ぜながら、話に耳を傾けている。

「あ、ごめんなさい。ご家族の方が居なくなつたんですから、当然心配ですよ。落ち着いているなんて言ってしまうって、すいません」

しかし、彼は笑って首を振った。

「いや、君の言うとおりだよ。まさかそんな風に見抜かれるとは思わなかつたから驚いてたんだ」

「……言う通りってことは？」

「そう、実は以前にもこんなことはあつたんだ。その時は、遠くに引越してしまっていた友人の元に、無断で遊びに行つてたんだだけ。体のいい一泊二日の旅行さ。中学生だつたくせに。そのときも当然大騒ぎでかなり大変だった。そういうことがあつたからこそ、俺としては今回もどうせそんなことじゃないか、と薄々思つてるんだ」

「へえ、そんなことが。それで、今回はその友人のところへは連絡は入れたんですか？」

「もちろん連絡したさ。でも、来てないって。だから、今は他の友達の家で連絡してるところさ。たぶん、大騒ぎしなくても、その内ひよっこり帰ってくるよ」

彼が明るくそう言ってくれたので、その場になんだか安心した空気が漂った。そう言われると学校での騒ぎはもしかすると、過剰な反応なのかもしれないとも清人には思えた。

そういえば、と思い出す。

昔読んだ本の中でこの国の毎年の失踪者数は十万人にも上るとい  
う記述があった気がした。

それは単純に計算して一月で、八千人強もの失踪者がでることを  
示している。しかもそれは届けが出された数であって、実際はもっ  
とたくさんいるらしい。

それは決して良いことを指しているわけではない。しかし、逆に  
考えればそんなことはほぼ日常茶飯事と思うこともできる。今回の  
件も多くの中の一件だと思つと、それほど、深刻になることでもな  
いのかも知れない。

その後は、全員でアイスコーヒを飲みながら、先ほど風馬から  
聞いたものとあまり変わらない内容のことを教えてもらった。

どうやら、得られる情報はそれほど多くないらしい。

成実は途中からは適当に頷いて話を聞いていた。

そして、時計の針も回り、そろそろ帰るべきだという空気が濃厚  
になり始めた時だった。

ふいに、玄関で引き戸がガラガラと開く音がした。

次いで、

「ただいま」

という少年の声があった。

その声を聞いて、もちろん成実と清人もぴくりと反応したのだが、  
正面に座っていた二人の顔色がさっと変わったので、確信した。

兄の方が弓で弾かれたように立ち上がり、

「和也！」

と叫んだ。

そのまま玄関のほうへ一目散に駆けていく。三人も席を立ち、すぐさまその後を追った。

すると、ドアの向こうから怒鳴り声が聞こえてきた。

「今までどこ行ってたんだ、馬鹿！」

見ると、玄関先で、和也と呼ばれた少年がその兄から両肩を掴まれ説教を受けていた。乱暴に身体を揺すられ、その表情は何が起ったのか分からないように困惑しているようだった。

そんな彼は兄の顔を見て、後ろからやってきた成実たちの方を見る。

「彼が、沢口君？」

成実が隣の風馬に訊くと、

「ええそうです」

と間髪入れずに返答し、戸口で棒立ちになっている少年に駆け寄った。

「先輩！ 大丈夫ですか？」

しかし、そう言われてもその少年は訳がわからないといったように目を瞬かせている。青ざめているほどではないが、顔色は悪くみ

えた。

「おい、聞いているのか？ 皆心配してたんだぞ！ いったい今までどこに行ってた！」

再び兄の怒声が響く。

「そ、それが……」

言いかけて、少年の視線が幾度か宙を漂い、ぼつりと小さくつぶやいた。

「分からないんだ」

とそれだけ。

「わ、分からない？」

「今まで一日、どこにいたのかも、何をしていたのかも。思い出せない」

これにはその場にいた全員の空気が凍った。思わず絶句する。

「それは、どういっ……」

「分からない。気がついたら、家の前にいて、昨日からの記憶が全部ないんだ」

困り果てた消えそうな声でそれだけ言って、少年はその場にそのままへなへたと蹲ってしまった。重たい頭を支えようとするかのように、俯いている額を手で覆う。

そんな彼の影を戸口から差し込んで来た夕陽が不吉に黒く、長く、

引き伸ばしていた。

## 第二章 記憶喪失の少年 <3> (後書き)

これで、2章が終了です。

矛盾している点、言葉の誤り、改良した方がいいと思われる箇所がありましたら、ご意見をお聞かせください。



### 第三章 新たな爪痕 <1>

事件解決の翌日、箱に残っていたクッキーを二人で分け合っ  
て食  
べながら、成実と清人は部室で顔を突き合わせて座っていた。

その日はあいにくの雨で、湿気が部屋に籠もった古臭い匂いをさ  
らに倍増させている。気を利かせたのは清人で、薬局で買ってきた  
という消臭剤と芳香剤を部屋の本棚の上に設置した。

そのため、かすかなラベンダーの香りが辺りに漂っている。

ただ、無言の時間が流れていた。

その時、成実の目が光る。

「ちよっと、チョコのクッキー食べすぎじゃない？ こっちの紅茶  
クッキーも配分よく食べなさいよ」

清人がクッキーを口に運ぼうとしていた腕を掴んで、成実が噛み  
付くように言った。

「いいじゃないですか、それくらい。好きなものを食べさせてくだ  
さいよ」

「駄目よ、世の中バランスが大事なの。多すぎず、少なすぎず、瘦  
せすぎず、太りすぎず。この国の三権分立のシステムもそう、どこ  
かに権威を集中させると独裁体制になるんだから。そうならないた  
めにバランスをとってるの。分かる？」

「またそんなこと言って……もしかして先輩、食事のとき、一人何  
個まで食べていいかって、計算するタイプの人間ですか？」

「まさか、ふざけないでよ。私はそんな面倒くさい人間じゃありま  
せん。私は妻沢君の健康を気遣ってですね、体にいいと言われる紅  
茶のクッキーを推奨してるんです」

「そんなことでね、僕は騙されませんよ。そっちは煙に巻いてるつ

もりでしょうが、僕にはただ先輩がこのクッキーを食べたいのが見え見えです」

すると、目つきの鋭くなった成実の掴んでいる手にさらに力が入る。

「あら、後輩の癖に生意気なことを言うのね。年功序列という言葉を知らないのかしら。私の言うことを聞きなさい」

「いいえ、僕はそんな思いつきのにわか権力に屈するつもりはありませんから。断固、戦います」

それが、宣戦布告の合図のように、突如二人のにらみ合いが始まった。無言になった二人、お互い手に本気で力を入れ、どうにかクッキーを自分の方へ寄せようと、一進一退の攻防が始まる。

「ぐっ……」

「ぶっ……」

力の拮抗に、クッキーを持つ清人の手がぶるぶると震えており、ふいに……転げ落ちた。

「あっ」

「うわっ」

しかし、それは床に落ちる寸前で、どこかから伸びてきた手によって間髪、キャッチされた。

「ふひひ、頂きい」

そして、クッキーは成実たちの元に戻ることなく、その手の持ち

主の口に運ばれ、あっという間に噛み砕かれた。

「ま、麻子！」

名前を呼ばれたその少女は満面の笑みを浮かべて言う。

「これが、漁夫の利ってやつよ。二人が争っているのを見て、虎視眈々《こしたたん》と部屋の隅でねらっていたのさ」  
「さ、最後のやつだったのに……」

愕然とした成実は小刻みに机を叩いて不服を申し立てる。

「やっぱり食べたかったんですね」

すると、結局、自分は食べられなかったくせに、清人はそんな彼女を見てどこか勝ち誇った表情になった。

「うるさいわね。妻沢君なんか乙女の気持ちなんて分からないわよ」

そして、今度は標的を変えるように、きりつと麻子を睨みつける。  
鼻息が荒い。

「で、どうしてあんたもここにいるのよ」

怒りをコントロール出来ていないのか、歯軋りをしているのが分かった。

「いえいえ、少々気になったことがあります、今日もここにお二人がいるかと思い、参上した次第でございます」

「気になること?」

すると、麻子がぐいぐいと肘で清人の肩を小突いた。

「事件のことですよ、旦那あ。例の生徒が居なくなった事件。解決したらしいけど、そのとき、きよぼんたちは現場にいたんでしょ?」

「ああ、そのこと……」

「聞いてんだよ。その人、いなくなってた間の記憶がまるつきり無くなってるんだってね。記憶喪失ってやつ?」

「まあ、そういうことになるわね」

成実はいかにも釈然としていないようで、憂鬱そうに肘をついた手に頬を乗せ、そう答えた。

一昨日前のことを思い出している。

あのとき、記憶がないと訴えた沢口和也はその兄と明宮に支えられながら、家に入れられ、居間でようやくお茶を飲み、一息ついた。それで、少しは何かを思い出すかとも思われたが、相変わらず彼は首を振るばかりで、失踪中に何が起こったのかは全く分からなかった。

「全然思い出せない。最後に思い出せるのは校門で友達と別れたところまでで、気がついたら、家の前にいた」

彼はそう繰り返すばかりで、一向に、埒が明かない。

しかし、一方で記憶を失っている以外は彼には何か特別なことが起こったようには見えなかった。外傷らしい外傷は見えないし、乱闘に巻き込まれたときのようには、服装が乱れているわけでもない。どこかで転んだ拍子に記憶を失ったということも考えづらかった。

持ち物も何か盗まれたものがあるわけでもなく、そっくりそのまま、下校時に持っていったものだ。

物騒な事件に巻き込まれたような気配は皆無と言ってよかった。

だが、記憶がないという事象はその場の全員に言葉にしがたい、得体の知れない不快感を与えていた。

記憶が無いとして、今までいっただい彼は誰にも見つけられることなく、どこにいたのか、はたまた隠れていたのか、もしかすると、誰かといいたのか。

疑問は膨らむばかりだった。

そして、その問題は解決の糸口を見出せないまま、時間が過ぎ、やがて彼の両親が戻ってきた。それに付き添う形で、年配の警官も一人ついてきていた。

母親はすぐさま息子の元に駆け寄り、父親は額に手を当て、深い溜息をついていた。息子の無事を確認し、両親はほっと胸を撫で下ろしたようである。弟を両親に任せ、和也の兄が弟の一日の記憶がないことを警官に話していたが、警官は少し首を傾げた後で、ただ疲れているのだろう、とそれだけ返した。

もし心配なら病院で検査してもらおうといいとさらにそう付け加えて、特に本人に問題がなく、事件性も薄いところを見ると、すぐに帰っていつてしまった。

警察もいつまでも構ってられるほど暇でもないのだろう。

成実と清人もそれ以上はその場に長居するのも家族の安堵の再会に水を差すと思い、本人が無事だったので帰る、そう伝えて帰宅し

たのだった。

事件のあらましを成実から聞いて、麻子はヒュー、と口笛を吹いた。

「ふうん、そうだったんだ。それで、きよぼん、今日はその行方不明になった沢口君は来ているのかい？」

「いや、来ていないみたいです。やはりご両親が心配して、病院に行ったようです。でも、先ほど特に異常は見られなかったそうだと、そのクラスの担任の先生から聞きました。明日からは登校するそうです」

「なるほど、とりあえず一件落着いてとこですかねえ」

### 第三章 新たな爪痕 <2> キメラ

しかし、そこに割って入ったのが成実の大きな溜息だった。

「けど、なるみんな納得していないようで」

すかさず、麻子が彼女の気持ちを代弁した。

「狐坂先輩、それは僕もです。この事件、大騒ぎする必要のないものに見えますが、どうにも、引つ掛かりがあります」

「不明確な部分が多いのよ。確かに行方不明になっていた彼が戻ってきて、それで問題ないかもしれない。でも、記憶がなくなっている上に、その間、誰にも発見されずどこに居たんだってこと、解決してないわよね。これは異常だと思うわ」

「そうですね」

清人が相槌を打つ。

「彼の様子を見る限り、悪意のある誰かによって監禁されていたようにも思えない。監禁されていたと仮定したとしても、一日だけ彼を捕らえておいて、身代金も要求せず、そのまま何もせずに帰すというのは解せないわ。そんなことで犯人になんらかのメリットがあるならば話は別だけど」

「ううん、そうだな。考えにくいね」

そして、彼女は椅子に座ったまま麻子の方へ座る向きを変えると、

「加えて、麻子が教えてくれた例の噂。キメラが学校に入り込んで生徒を襲うってやつ。それとの関係性も何かあるんじゃないかと思

うと、さらに謎が増えるのよね」

これには清人も同意する。

「そうです、それも否定できません」

麻子が教えてくれた奇妙な話はここ数日で、じわじわと校内に流れてはじめているようだった。

まるで、失踪事件に追い風を受けるように、クラスからクラスへ、生徒から生徒へと伝播でんぱしている。現に今朝、清人も友人の一人からその話を聞いたばかりだった。

嵐の前の予兆のようで清人には不吉な気がした。

「ほう、ようやく信頼してくれたんだ？」

「まだ、可能性の段階ですけど」

すると、そこで麻子は点差が開き、勝利を喜びをかみ締めた野球選手のような笑みを浮かべてみせた。

「それが、もしかすると、確信に変わるかもよ」

「どういう意味？」

成実が問う。

「また、新しい噂、聞いたんだぜ」

「へ？」

「聞きたいよな、聞きたいよな？ 二人とも」

違法の取引をする役人のようにもみ手をしながら、彼女は二人に



にじり寄ってきた。この少女、どこかこんな動作が様になってみえる。やり慣れているのだろうか、そこはかとなく胡散臭い。

清人はそれを見て、むっと口を結んで警戒するが、噂の内容を聞いてから信憑性を考えても遅くないと思い、「どうぞ」と発言を促した。

「キメラの怒りは未だ収まらない。それ故、犠牲となる獲物は一つに非ず。次なる獲物が狙われるのは遠くない。全ては来るべき時に向けて」

彼女がそれを言い終えるか言い終わらない内に、跳ねるように椅子から立ち上がった成実は、

「麻子！」

と叫び、彼女の両腕を掴んだ。

「それは、本当なの！ 誰から聞いたのよ！」

「ほう！ 予想通りの反応、信じてくれたみたいだぜ」

「いいから質問に答えなさい。誰から聞いたの？」

有無を言わせない彼女の気迫に麻子は少々ひるんだが、顔を彼女から違う方向に向け、

「じよ、情報の出所は企業秘密だつてば」

とそれだけ言った。

「高校生の分際で、企業秘密もなにもないでしょうが、ほら、言い

なさいって!」

「はうっ! き、きよぼん、この人こわーい。助けてよお」

彼女はそう言って、救いを求める目で清人に訴えかけた。しかし、清人も彼女が話した内容が内容であるだけにそれに応じるわけにはいかなかった。

「先輩、お願いします。話してください。とても重要なことだと思うんです」

「こ、これぞ四面楚歌? 救援は来ないのかよ」

「麻子、話して」

「うう、分かったよ。話すから、話すからさあ」

ついに観念したらしく、麻子はすっかりしよげてしまって、椅子に座り込んだ。意気消沈したようで、二人には聞こえないように、「これは暴挙だ」とつぶやいている。

「どこで、それを聞いたの?」

「ネットの掲示板だよ。この学校の裏サイト」

「裏サイト?」

成実は何んのことだか分かっていないようだったが、清人は不快そうに眉根を寄せた。それがどういうものかを知っているのだ。

「なるみん、それについてはあまり深く聞かないほうがいいよ。人間の心の真っ黒い部分に関わることだからさ。ともかく、あたしはその中を覗いてた時に、偶然その書き込みを見つけたの」

「うーん、それがカメラの噂ね。じゃあ誰が書いたのかは分からないわけ?」

「ネット上のことだからね、一応、お名前はご丁寧にカメラってな

つてたけど、それだけじゃ誰が書いたものか分からないよ」

「どうしても？」

「私の力じゃねえ」

「そう、なら仕方ないわね……でも妻沢君、これって」

「ええ、単なる噂というより、失踪事件の犯行声明ともとれますね」

「しかも、キメラの怒りは収まらない。次なる獲物が狙われるって、これは事件がまだ起こることを予告しているわ」

「まあ、あくまで現時点では失踪事件とそのキメラを結びつけられることですが……」

「あの、そろそろ腕を放してもらえませんかね」

ベそをかきそうな麻子が先ほどから強く握り締められたままの腕を見ながら成実に訴えた。椅子に座っても尚、逃げないようと彼女に押さえられていたのである。

「ああ、ごめん」

成実が放すと、彼女は掴まれた跡の残った腕を大事そうにさすつた。口を尖らせながら、成実を睨んでいる。その後にくちくちと「この怪力女」などという暴言が清人には聞こえた気がしたが、それは無視した。

成実はというと、椅子に戻り、無表情のまま、その肩からこぼれた長い髪を一束、指で摘んでいた。そして、くるくると指に巻きつけ、弄びはじめた。

「ねえ、なるみん、クッキー食べていい？」

麻子は残ったクッキーたちを身体を揺らしながら覗き込んでいる。

「好きにしていいわ。今は話しかけないで」

成実にはもはや、そんなことどうでもよかった。今しがたの情報を頭の中で整理している真つ最中だったのだ。

こういうとき、雑音は耳に入るだけ邪魔だ。成実はそう思っている。

それを察してか、清人も麻子もそれから椅子に座って大人しくした。降り止まない雨垂れの音と、小さくクツキを噛み砕く音だけが、小さな部屋を満たしていた。

五分ほど経つただろうか、彼女は指に巻きつけていた髪の毛をぴんと弾くと、

「しばらく、様子を見てみましょうか、このまま考えても答えは見つかりそうにないし」

そう結論を先送りする発言をした。

これには清人も賛同する。

「そうですね。このまま何事も起こらなければいいですけど」

「うん、それが一番だとは思っけど」

## キメラ

今日、彼は人気のない体育館の裏、用具が収められた円形の屋根をした倉庫の影にいた。

目の前にはコンクリートの塀があり、その向こうの通りを過ぎて

いく自動車のエンジンが近づいたり、遠ざかったりした。

街には雨が降っていた。

そのため、タイヤが水たまりを突っ切り、派手に飛沫を上げる音も混じっている。

彼はおもむろに手のひらで雨粒に手を触れた。指で伸ばして、そのひんやりとした感触を確かめる。

それから満足そうにうっすらと微笑んだ。

全ては彼の目論見通りに進んでいた。

障害となるものは、今のところ見当たらない。

胸の内に秘めている、氷のような、閉ざされた静謐せいひつの中で膨らむように揺れている蒼き炎。

彼の怒りは未だ消えることはない。

だが、それは浄化に向けて、着実な歩みを続けていた。

必ず来るであろう、その日に向けて。

だが、それにはまず、成すべきことがある。

そのために、彼の頭脳は、研ぎ澄まされていなければならない。失敗をするわけにはいかなかった。

そうなれば、どれほど惨めな思いに彼は打ちひしがれるだろう。

それは絶対に防がなければならない。

自らの信条にかけて。

彼は爪を研ぐ。荒い呼吸を抑えながら。

次の獲物はもう決めてある。

間を置かず、矢継ぎ早に行うことに意味があった。

それにより、生徒達を覆う、闇の力はその色にさらに濃い黒を混ぜるだろう。

見上げた曇天の中にカメラのフラッシュのような稲光が駆け抜け、少し遅れて、大地を揺るがすような雷鳴がとどろく。

まるでそれは、人々を脅かすカメラの咆哮のようにも聞こえた。

### 第三章 新たな爪痕 <3>

広国高校一年の檜山千穂ひやまちはが事件のことを聞いたのは、寝坊した土曜日の朝のことだった。

通っている塾には午前九時には到着していなければならないのに、千穂が目を覚ましたのは、その二十分前だった。

少人数制で、教師による行き届いた一人一人への指導を売りにした個人経営の塾で、そこへは千穂の家から少なくとも自転車で二十分はかかる。

つまり、計算上、起きた瞬間に家の前にとめてある自転車に飛び乗り、行って来ますと手を振り、ペダルを漕ぎ始めないと間に合わない時間だったのだ。

時計の針を見て、千穂は愕然としている。

「ああもう、私の馬鹿、馬鹿あ」

ぼかぼかと自分の頭を叩きながら飛び起きた。

昨日、きちんとセットしようと思っていた目覚まし時計はその機能が作動した様子はなかった。

昨夜は机で勉強しながら眠くなり、そのままベッドに入ってしまったせいだろう。

忘れないようにと、メモ用紙をデスクライトのスイッチの横に貼り付けていたというのに。

とんだドジを踏んでしまった。

千穂はどたばたと部屋の中を歩き回り、塾のテキストや筆記用具をカバンに入れていく。

残されている時間などない。

しかし、

「あれ、数学のテキスト、どこに行つたっけ？」

千穂の手が止まる。

確か、机の横のラックの中に塾のテキストは置いていたはずなのだが、数学だけが見当たらないのだ。

「昨日、使ったときはきちんとここにあったのに」

それがなければ、授業に行つても問題を解くことが出来ない。

「ど、どうしよう。どこに置いたのかなあ」

焦った千穂は必死になって、机の引き出しや本棚、ベッドの下の隙間を探すが見つからない。心当たりの場所は全部探したつもりだった。

そうして諦めかけ、覗いたカバンの中になぜだか最初から入っていたことに気づく。どうやら、何を思ったのか、前日数学のテキストだけをその中に入れていたらしい。

両肩から力が抜ける。

「何で、なんで、私、何してるんだろ……」

自らの不可解な行動に腹が立つやら、情けないやらで千穂はもう泣いてしまいそうだった。これでまた余計な時間を食ってしまった。

慌てて、部屋の外に飛び出し、母親を呼ぶ。



「お母さん、塾に遅れそうだから車で連れてってくれない？」

返事を待っている暇はない。すぐさま部屋に引き返し、タンスから今日着る服を取り出した。

しかし、シャツに腕を通そうとしたとき、今度は探し物をして散らかった床のノートに足を滑らせ、派手に転ぶ。

どてん、と大きな物音と共に背中を打った。

目の前に火花が散る。

「いたた……」

しばらく痛みにも悶絶し、起き上がる気力も起こらなかった。

こつこつ連続で失敗してばかりだと、だんだん、塾などどうでもよくなってきた。正直、どうしてこんな日に塾があるの、と言い掛かりのような不平も言ってみたくもなかった。

物音を聞いて驚いたのか、母親が部屋の扉を開けた。散乱した部屋の中で転がった千穂を見て、目を丸くしている。

「何してるの？ 大丈夫？」

駆け寄ってきて、千穂を抱き起こしてくれた。

「ちょっと、バランス崩しちゃって」

「もう、いつも気をつけなさいって言ってるでしょう。千穂は昔からそうなんだから」

母の言葉が彼女の心にチクリと刺さる。

そうなのだ。千穂は昔からそそかつしくて、へまをよくやらかす。注意が足りないとか、天然だとか、周りはそう言って笑われるし、ちっとも嬉しいだなんて思ったことはない。

自分は駄目な人間だと、そう思っていた。そうだからこそ、人前ではいつも引つ込み思案で、おどおどしているのが普通だった。

誰からも頼りになんてされたことはないし、迷惑をかけてばかりだ。今だつてそう、母に心配をかけている。

「大丈夫だから、これくらい平気。それよりも塾に行かないと」

千穂は元気なところを見せようと立ち上がり、軽く屈伸運動をした。

「本当に？」

「本当だつてば」

すると、どこからか電話のコール音が小さく聞こえてきた。どうやら、階段の下で固定電話が鳴っているらしい。

「はい、もしもし檜山ですが」

父が受話器を取ったようで、くぐもった話し声が聞こえてくる。

「え？ はあ、お宅の娘さんが？……ええ、いますが、電話を代わりましょつか？」

千穂、電話だ。

階下から自分を呼ぶ父の声が聞こえてきた。

「はい、今行きます」

千穂は、もしかすると今日の塾の講座が臨時で休講となった連絡かもと、淡い期待を抱き、階段を下りていった。

しかし、父から代わってもらった受話器から聞こえてきたのは、それよりも何倍も急を要することだった。

「ああ、千穂ちゃん？ どうも、藤咲由貴の母です」

「え、由貴ちゃんのお母さんですか？」

てつきり、友人本人からだと思っていたので肩透かしを食らう。

「どうかしたんですか？」

「それがね、ちょっと困ったことになっているの？」

「困ったこと？」

「ええ、千穂ちゃんのところによ貴が来てないわよね？」

これはどういう意味だろう？

「いえ、来ていませんけど」

「やつぱり？ ううん、いったいどこに行ったのかしら。実は、昨日から由貴が家に戻ってきてきていないの」

その深刻な声に千穂は二の句が継げなくなる。まさか、そんな内容を伝える電話だとは思わなかったのだ。

「ほ、本当ですか？」

千穂の頭から塾のことが吹き飛んだ。

「うん、携帯電話にかけても繋がらなくて、今、友達の家には片端から連絡をしているんだけど、どこにも居ないって」

「……そうだったんですか」

「千穂ちゃん、昨日、あの子に会わなかった？」

「えーっと、えっと」

千穂は動転している気持ちをどうにか落ち着けようと深呼吸して、記憶を呼び出した。一昨日の学校の記憶。

由貴とは同じクラスなので、もちろん、その日も朝から顔を合わせていた。教室に入って挨拶をしたのを覚えている。特にいつもと同じで、むしろどこか元気なほどだった気がする。

そして、授業を受けた後は、昼食も一緒に食べたし、午後の授業も相変わらず眠たそうな目をこすりながら先生の話を聞いていた。

放課後には途中まで下校し、分かれ道で別れたことまでは覚えている。

「下校したところまでは一緒でした。でも、その後は知りません。そのまま帰宅する方向に向かって行ったので、寄り道はしていないと思いますけど」

「そう……、やっぱり下校したのは確かなのね。じゃあ、どこかあの子が行きそうな場所に心当たりはある？」

「行きそうな場所……」

「どんな瑣末な情報でもいいの、知らない？」

千穂は彼女とよく行く場所なら覚えていた。踏み切りを越えたと

ころにあるコンビニ、商店街の端にあり、おいしいと評判のクレープ屋、街中のカラオケに行ったこともある。そう言えば、ときどき一緒にゲームセンターにも行ったこともあった。千穂はそれほど興味はなかったが、由貴はそういう場所が好きだと言っていた。

千穂がそのことを彼女の母親に話すと、

「……そう、分かったわ」

とあからさまに落胆の色が窺える声でそう言った。どうやら、伝えた場所はすでに探したようだった。

「すみません、お役に立てなくて」

千穂は謝る。

「ううん、そんなことはないわ。ともかく、話を聞かせてくれてありがとう」

不安を見せないようにか、彼女は受話器の向こうで明るく言ってみせた。

「全く、いつたいどこで油を売っているのかしらね。のこの帰ってきたら怒鳴りつけてやらないと」

「はは、そ、そうですね」

千穂も無理やり笑って見たが、それは表情が見えなくても引きつっていると分かるほどの痛々しい笑い方だった。

「千穂ちゃん、ごめんなさいね。朝から心配させるような電話を掛

けてしまつて」

「いえ、そんなことを謝らないでください。私も由貴ちゃんが早く見つかつて欲しいです」

「きつとあの子のことだから大丈夫よ。その内戻ってくるわ。そうしたらすぐに本人に連絡させるから」

「……分かりました」

「それじゃ、千穂ちゃんありがとうね」

「はい、それでは失礼します」

受話器を下ろして、千穂はしばらくその場で静止して動かなかつた。ただ、心臓だけがドクドクと胸を叩いて騒がしい。

### 第三章 新たな爪痕 <4>

近くで聞いて、事情を察したらしい両親は千穂の背中を支えるように立って、顔に憂色をたたえている。

「どうしよ、由貴ちゃん、いなくなっただんだけ」

千穂はとても心細い気持ちになって倒れてしまいそうになる。それを見かねてか、母が励ましてくれた。

「大丈夫よ。どこかで変な事件が起こったなんて聞いてないわ。きっとどこかで友達とでも遊んでいるのよ。その内に元気な顔で戻ってくるわ」

「でも……でも、連絡が取れないって変じゃない？」

「それは、きつと携帯の電池が切れていることに気がついてないのよ。よくあることだよ」

「よくあること、かな？」

千穂は楽観的に捉えようとしたが、胸の奥からふつふつと湧き上がってくる黒い予感に到底無視できる類のものではなかった。すぐに俯いてしまう。

「塾はどうする？ 行くの？」

「ごめん、お母さん。こんな状況じゃ、そんな気分になれない」

「そう、それじゃ無理に行くことないわ。家にいなさい」

母は寛容だった。塾に無理強いして行かせようとはせず、千穂の感情を優先してくれた（おそらくそのまま行かせても勉強に身が入らないと、考えたのだろう）。

「……うん」

力なく頷いて、部屋に戻る。

扉を閉め、それから周りを遮断するようにカーテンも閉めた。机と本棚の開いた僅かなスペースに腰を下ろし、頭上を通過する雷雲が早く通り過ぎていくのを祈るような気持ちで、足をぐっと引き寄せた。

足元には、去年の誕生日に買ってもらった携帯電話を置く。試しに電話帳に登録されている藤咲由貴のアドレスを開き、電話をかけてみた。

「  
」

無常な呼び出し音がしばらく鳴った後、女性の声で繋がらないことへのメッセージが入る。

やはり、無駄なようだ。

無意味かもしれないが、居ても立ってももられず、メールを送った。

連絡が欲しい、という内容の文面を打ち、送信する。そのまま眼に見えない電波となって、宙に消えた千穂の思いは彼女に届くのか、分からない。

膝と膝の間に顎を置いて、長いため息を吐く。

千穂はそれまで一緒に過ごすごことの多かった親友が突然居なくなるという、未曾有<sup>みぞう</sup>の危機に直面していた。考えたくなくても、最悪の状況というものが脳裏をよぎる。

もしそうなれば自分はどうなるかなど、分かるはずもない。

全てのことへの気力が失せ、まるで自分は座り込んだまま石像のように動けなくなるのではないか、という錯覚にも陥りそうになっ



ていた。

由貴のことを思い出していた。

彼女は少しきりつとした顔立ちが特徴で、ちょっとボーイッシュな恰好の似合う明るいい女の子だった。千穂とは違い、何か自分に考えばあれば率先して主張できるタイプで、面倒見もよく、皆から好かれていた。優しい子だ。

千穂には目を閉じさえすれば、あの快活な話し方を思い出すことができる。

「絶対、だかんね」

「約束だかんね」

と、何かと語尾に「だかんね」を付けるのが、彼女の口癖だった。そういえば、最初に仲良くなったころはその口癖がとても新鮮だったなあ、と千穂はしみじみと思う。自分の周りでそんな言葉の使い方するのは彼女くらいだったためだ。

彼女とは中学の頃からの付き合いなのだが、最初のクラスで初めて隣の席になったのが彼女だった。

控えめに、ぼつりぼつりとしか話せない千穂に、彼女はきつぱりはきはきと明確なものの言い方だった。一見噛みあってないような自分たちだが、意外にもとても相性が良かった。

彼女があれこれと話し、千穂が二、三言返す。会話にもバランスがあるとすれば、もしかすると、自分たちの会話はそれでバランスが取れているのではないかと思った。会話の割合が一定で守られているような気がするのだ。

そうして毎日が過ぎていき、数ヶ月が過ぎたとき、彼女が言って

くれた印象的な言葉があった。どんな流れでそんな言葉がでてきたのは覚えていないが、友人たちとの会話の中で、

「だって、私と千穂は友達だかね」

そう言ってくれた。

あときは嬉しくて千穂も強く頷き返したのを覚えている。

彼女の言葉の当たり前のようなニュアンスがずっと体の中に解けるように流れ込んできて、ほっとしたぬくもりを感じさせてくれた。

これが、彼女とのつながりの証かな、と千穂は隠れてこっそりはにかんだものだ。

そして、それは今でも千穂の心の中できちんと息をしている。そう信じている。

「由貴ちゃん……」

しかし、今、彼女はいつたどこに居るのだろう。早く戻ってきて、また元気な声を聞かせて欲しかった。

まさか、このままお別れなんてことはないよね。

それから、しばらく経ったとき、ふいに携帯電話が鳴った。

「あー！」

すぐさま液晶画面を見て、名前を確認するが、それは由貴からのものではなかった。しかし、その代わりに映し出された名前はよく知っている人物からのものだった。

メールの着信である。

もしかすると、由貴に関することだろうか。  
そう思った千穂は内容を確認しようと思わずボタンを押していた。

#### 第四章 忘却の戦慄 <1>

腕時計の針は五時を回っている。

未だ五月の太陽は空の高い位置に居座り、そこから圧するように、世界を見下ろしている頃だった。

突き抜けるような青空の下、稲葉成実は駅前のアベニューのベンチに座っていた。制服姿の彼女は大きなロゴマークの目立つファストフード店の手前で、通りを行き交う人々に目をくれながら、時折、携帯電話を開いては閉じる、そんな作業を繰り返していた。

「遅い、遅いわ」

しばらくすれば、不機嫌そうに足を鳴らし始める。どうやら待ち合わせの人物が現れないことに腹を立てているようだ。

ぶすつとした顔をして、組んだ足を逆の足に組みかえる。

またしても、

「まったく、いつまで待たせる気かしら」

そうぼやいては携帯を覗く。よっぽど電話をかけて怒鳴ろうかとも思ったが、まるでそれを見越して制するように相手からの謝罪のメールが入った。

『あと五分ほどでそちらにつきます。待たせて申し訳ないでした』

走りながらメールを打っているせいなのか、最後の語尾がおかしい。おそらく言葉の入力のショートカットを失敗したのだろう。

どうにも間抜けな文章になっている。

成実はそのを見て、おちよくつつているのかと腹を立てるべきか、これは滑稽だと笑うべきか、感情がごちゃまぜになり、少し怒るところがどうでもよくなった。

一先ず、大人しく待つことを選択する。

それから、さらに時間が経過し、ようやく駅前に唯一あった公衆電話の角を曲がって少年がやってきた。走りながら、額に汗を滲ませた彼は、

「はあ、はあ、遅れて、すみません」

と一言謝り、彼女の隣に腰をかけて制服の襟元をばたつかせ、汗を拭った。

「ちょっと、いったい全体何があったらこんなに遅くなるわけ？信じれない」

当然のことながら、先ほどの怒りが再燃し、剥れてしまっている成実は冷淡な言葉で彼を問い詰めた。

約束した時間からはすでに三十分も過ぎてしまっている。いつもなら、時間に遅れることなどない清人が今日に限って遅れるなど、前代未聞だった。

「なにしろ、呼び出しが急でしたからね」

清人が言い訳めいたことを口にしたので、成実にされに火がつく。

「でも、それにしただってあなたの家、ここからそんなに遠くないでしょ！こんなに遅くなるのは異常よ、異常！」

すると、彼は首を振って弁明した。

「実は、学校にいたんです。今日は、勉強しようと思って」

「土曜日だったのに、それはそれはご苦労なことで」

皮肉たっぷりにそう言う。

「それで、先輩からメールをもらって、すぐに駆けつけようと思っ  
たんですけど。そこで、不測の事態が」

「不測の事態？」

彼女は眉間に皺を寄せる。どうやらそれが遅刻の原因らしい。

「ええ、校門を出ようとしたときに見つかってしまって」

「見つかった？ 誰によ」

すると、清人はうつろな目で、背後の公衆電話の方向を顎で示し  
た。

すると、そこからひょっこり顔を出したのは、見覚えのある少年  
の顔だった。短髪に太陽の光で焼けた肌の明宮風馬がいた。

彼はどうもどうも、と馴れ馴れしく頭を下げながらこちらに歩い  
てくる。これには、成実も口を開けて呆れた。

「な、なんで、あなたがここにいるのよ」

「どうしてもついて行きたかったそうで。生徒が失踪した事件がま  
た起こったっていったら、目の色を変えましてね」

すると、風馬は成実の前でぺこりと頭を下げ、懇願した。

「あの、稲葉先輩。自分、沢口先輩のことがあって以来、どーしても事件のことが気になってたんです。そりゃ、もう夜も寝むれなくなるくらいで。それでまた行方不明になった人が居るって聞いて、じっとしてられなくて、妻沢さんについて来たんです。あのう、ついて行ってもいいですか？」

成実は無言のまま、じろりと隣の清人を睨んだ。怒りのせいか、目じりがひくひくと痙攣しているように見える。

殺気を感じた清人は本能で謝罪をした。

「先輩、すいません。ついうつかり事件のことを喋ってしまったばかりに。どうしても振り切れなくてここまでひっついて来ちゃったんです」

「あの、本当に連れて行ってもらっただけでいいんで」

風馬はさらに頭を下げる。

成実としては、怒鳴って追い返してしまいたかったが、ここははつきり言わねば、と自分を抑え、紳士的に彼と向き合ってた。言った。

「……明宮君、あなたそもそも、新聞部の人間じゃないでしょ。私は部外者を連れて行く気にはならないわ。余計なことをされると嫌だし」

「そこを、なんとかお願いします」

彼は手のひらを摺り寄せる。

「言っておきますけど、私達は真剣にこの事件の謎を究明して、解決したいと考えて、調査をしているの。分かる？ あなたみたいに

ただの興味本位で近寄ってきた人間を、帯同させるわけにはいかないんだから」

成実は毅然とした態度ですっぱりと彼に言い放った。これは脈がないと見て、成実には風馬が諦めるかに見えたが彼は引き下がらなかつた。

いつも身体を鍛えているだけあつてか、それくらいの忍耐力は有しているらしかった。

こつ食い下がる。

「自分だつて、事件を解決させたいと思つてますよ。もしかすると先輩が居なくなつたのは誰かにどこかで監禁されていた可能性も出てきたんでしょ？ そうだとするならば、自分だつて黙つてられませんが。こんな妙な事件に誰も巻き込まれないように阻止したいんです」

風馬はどうやら一歩も引く気はないようだ。これに対し、成実はさらに追撃しようと口を開いたが、それを清人が制した。

「先輩、遅れてきてこんなことを言うのもなんですが、このままここで言い争つていても時間の無駄だと思います。とりあえず、今日のところは彼を連れて行つたらどうですか？」

「妻沢君?!」

成実はまるで、味方に裏切られたような素つ頓狂な声を出して驚いた。すると、彼は手刀を顔の前で横に振る。

「おそらく彼は帰りそくにありませんよ。駄目だつて言つてもどうせついて来るに違いありません。だったら、もういっそのこと」「連れて行け、と?」



「時間を無駄にする気がないなら、です」  
「……わかった。確かにその通りね。今日だけ、特別ということにしましょう」

成実も声を荒げることに無駄な労力を使いたくないと判断したのか、意外にもすぐに首を縦に振り、清人の案を呑んだ。

「いいんですか？」

風馬は子供のようにその場で飛び跳ねる。

「いいって、今言ったでしょ。何度も同じことを言わせないで。ただし、今日だけ《・・》だからね」

最後に強調させて成実は釘を刺した。

「はい、はい、はい」

しかし、彼は聞いているのか、何度も頷いて、今度は勝利のガッツポーズを決めている。

その極端な喜びぶりに、成実と清人は一步後ずさってみていたが、やはりオーケーしなればよかったとうすうす後悔した。

思わぬ飛び入り参加で人数が増えたが、気を取り直して一行は大通りを西に向かって歩き始めた。

少しづつ通りには帰宅を急ぐ人々の姿が増え始め、その中を縫うように進んでいく。

「それで、今から行くのは、行方不明になった藤咲由貴さんに最後に会ったっていう檜山千穂さんの家ですね？」

歩きながら、清人は成実にそう確認した。

数十分前に成実から送られてきたメールの内容はおおよそ次のようなものだった。

一昨日から家に帰っていない生徒がいることが分かった。彼女の名前は藤咲由貴で、一年の五組の生徒。彼女の先輩で知り合いの生徒の元にも連絡が入り、その生徒が成実の友人だったため、成実にもその情報が入った。

麻子が話していた噂から数日しか経っていないため、関連性が強く疑われる。これから、その藤咲由貴に最後にあつたという友人の檜山千穂の自宅に向かう。至急、駅前のハンバーガーショップの前に集合。

要約すると、こんな感じになる。

「ええ、そうよ。ここからあまり遠くないから、歩いていくわ」

「先輩、そんなこと言わずに皆で走って行ったらどうでしょう？」

その方が早く着きますし、健康にもいいですよ」

そう提案した風馬は大きく足踏みをしていおり、身体を持て余しているようだった。どこかでピストルの音が響けば、そのまま走り出してしまいそうである。

「明宮君、申し訳ないけど、あなたの意見は聞いていられないわ。

今日はただ私達について来るだけっていう約束なんだから、大人しくしていてよね」

「はい！ アイアイサー」

すると彼は自分が持っているときり元気な声でそう叫んだ。他人への配慮を欠いた鼓膜に響く彼の声を少しでも抑えようと、彼女

は耳を塞いだ。

「……ああ、うるさい。声は普通の大ききさで出してくれる？」

すると、成実がひどく迷惑そうな清人を見、彼はその意を察した。お前が連れてきたんだから、邪魔にならないようにお前が処理をしろということだろう。清人としても自分に非があることは重々承知していたので、大人しくそれに従う。

放置し、彼女に癩癩かんしゃくを起こされても困るからだ。

そのため、道中の間、成実を少し先に歩かせ、清人は風馬とどうでもいい話をすることにした。

#### 第四章 忘却の戦慄 <2>

藤咲由貴の最後の目撃者である檜山千穂の家につくと、すぐさま成実が呼び鈴を押した。沢口和也の家では彼の兄が顔を出したが、今回は千穂の母親がゆっくりと扉を開けてくれた。

見覚えのない人間たちに、

「どちら様でしょうか」

と少々警戒した声を出した。

清人たちには娘の友人が行方不明とあって、さすがに気の毒なのか、顔色が青いように見える。

清人は風馬が余計なことをしないようにと見張っていたため、受け答えは主に成実が行った。

簡単にここを訪れた理由を説明する。

自分たちは学校の新聞部で、事件のことを知りたい。つい数日前にも同じような事件が起こり、もしかすると関連性があるかもしれないので、どうか檜山千穂と話をさせて欲しい。

と、今回は包み隠さず、全てを話した。

すると、母親は校内で同じような事件が起こったことを初めて知ったようで、驚いているようだった。

「最近、何かと物騒だっというけど、こんな身近でそんな事件が起きてたなんて知らなかったわ」

口元に手を当て、動揺している。

「はい。それで、どうかその友達である千穂さんにお話しを聞きたいんです」

「そう……でも、千穂は今朝その話を聞いてから落ち込んでるみたいで、ずっと部屋にいるの」

母親は心配そうに表情を曇らせて言った。

「閉じこもっているんですか？」

これは清人だ。

「二階の自室にね」

「……」

「居なくなつた由貴ちゃんは千穂の親友だね。ただでさえあまり友人の少ない子だから、その分、堪えてるんだと思うわ。だから、出来ればそつとしておいてあげて欲しいのよ」

「あの、でも……」

そう言い掛けた成実は、千穂に少しでもいいから話を聞かせてもらおうと、願い出るつもりだった。

しかし、その言葉を押し留めたのは母親の伏し目がちな視線だった。彼女は無言だったが、成実には精神的にダメージを受けている娘を守るための構えの姿勢をとっているように見えた。

その瞬間に、成実の中である葛藤が起き、

「そうですか……それなら話を聞かせてもらうのは無理ですね」

と控えめに彼女の言葉に同意した。

「ごめんなさいね。早く事件が解決すればいいと思うんだけど」

「いいえ、いいんです。話を聞くのが無理なら、私達は今出来ることをしますから」

「そうなの？ 本当に申し訳ないわ、ごめんなさい」

「いえ、これで失礼させていただきます」

成実はそれが自分のすべき礼儀であるかのように、ありがとうございまして、と丁寧に頭を下げた。

これには、いつも強引なところのある彼女にしては珍しい、と清人は思った。隣の風馬は残念にそうにうなだれていたが、それは見ず、成実らしくない、とその後ろ姿を見ていた。

扉が音もなく閉まり、三人が玄関先にとりこのされた。少々空しい沈黙が流れる。

千穂の母親が家の奥へ向かう音を聞いてから、

「いいんですか？」

とさすがに清人は訊いた。

問いたださずにはいられなかった。

しかし、彼女はドアの前で仁王立ちをしたままで、決心した張りのある声で言う。

「いいのよ。何度も訊かないで。確かに真実を知るためには少し強引な調査も、時には必要なかもしれない。でも、それで人を傷つけるようなことをしていいかどうか、今の私には分からない」

その言葉に清人ははっとした。

彼女は彼女なりにジャーナリストとしてのあり方を模索している

のかもしれない、そう悟ったからだ。ただ恰好いいからとその言葉を振りかざして、気取っているだけかと思っていたが、そうではないらしい。

そう今、この瞬間、この少女は確かに迷っていたのだった。自分が向き合つべき問題と。

しかし、彼女は情熱とモラルとの相克そうごくの影を内に隠し、くるりと清人たちに向き直つて余裕の笑顔を見せた。

「今は真実を知るための扉の鍵をこじ開ける気はないの。それに…

…」

「それに？」

「きつと、私の父も同じことを考えているかもしれないし」

彼女は急に遠くの風景を眺めるときのようにそつと目を細め、懐かしむような言い方をした。

それを聞いて、清人はあることを思い出す。

「……！　そういえば、先輩のお父さんって……」

しかし、その言葉を扉が開く音と、少女の声が遮った。

「ちょっと、待ってください」

振り返ると、そこには小柄な少女が玄関に立っていた。俯きがちに、でも確かにこちらを見つめながら一歩、二歩と進んできた。そして成実の前で立ち止まると、

「私が檜山千穂です」

と自己紹介した。お辞儀の際に、二つ結びの髪が垂れた。

「え、あの……」

「由貴ちゃんのことを聞きに来たんですね。分かることであれば、話、します。私に出来ることなら何でも協力したいです」

しかし、そう言ってくれた彼女の表情は強張っており、思いつめているのが見て取れた。まるで、無表情な着せ替え人形のような印象を与える。

「大丈夫なの？ 無理はしないほうがいいわ」

成実が彼女を気遣う。

しかし、彼女は気丈に首を振った。

「平気です。えっと、皆さんは同じ高校の生徒さんですよね？」

これには風馬も含めた三人が頷いた。

「私は稲葉成実、新聞部の部長よ」

「ええと、同じく新聞部の妻沢清人です」

「自分は陸上部の明宮風馬っス」

順々に簡潔な自己紹介をした。

「あの、よ、よろしくお願いします」

「こちらこそ」

千穂は全員の顔を確認するように見つめ、小さく目を動かしていた。胸元で両手を握り、大人しそうな子だ。というのが瞳を見た清



人の印象だった。

「先ほど、母と話していたことは聞いてました。それで、私は何を話せばいいんですか？」

「そうね、でも実は、あなたが彼女と下校時にいた状況というのは、だいたい耳に入っているの」

これは、成実が情報元となっている友人との連絡のやり取りで把握していたのだ。

「はい……それじゃあ何を？」

「一つ……」

成実は彼女の前で人差し指を立てる。

「……？」

「キメラについて何か知っている？ もしくは、藤咲さんがそれについて、知っていた、何か、普通ではない反応をしていた様子はなかった？」

千穂はその言葉を聞いてぐっと思を呑んだようだった。

「キメラってもしかして、今流行ってる変な噂ですか？ 怪物が人を襲うって」

「そう、あなたは知っているのね」

「これは、確か三日前くらいに友達から聞いたんです。由貴ちゃんからじゃありません。聞いたときは彼女も一緒に居ました」

「それで、彼女はどんな反応をした？」

成実が待ちきれないように訊く。しかし、彼女から帰ってきたの

は、

「……特に。へえ、変な話って受け流してたような感じでした。興味を持ったようでもなかったですし、信じている素振りには微塵もありませんでした」

という空っぱの返答だった。これに成実は眉間を指でつまみ、溜息を漏らした。

推理が行き詰ってしまったのだ。

「あ、あのお、もしかして先輩たちは由貴ちゃんがその怪物に襲われたって思っていていらっしやるんですか？」

「言い換えるとそうなるかもね。どういった理由かは分からないけど、神話に登場する怪物の名を借りて、連続で生徒を誘拐、監禁している人間がいるのかもしれないと考えているの」

物騒な言葉を聞いてか、千穂は身体を縮ませて恐怖の表情を浮かべた。見ると、額に手を当て、ふらりと倒れかけていた。

「か、監禁？ 誘拐、ですか？」

そこへすかさず、彼女の背後に回りこんだのは風馬だった。

咄嗟の判断と陸上部で鍛えた瞬発力で、大股で踏み込み、すばやく彼女の背中を押さえた。

「大丈夫ですか？ 檜山さん」

優しく、そう話しかける。

「ああ、すみません。私、びっくりしてしまって」

彼女を脅えさせてしまったと察知した成実は慌てて、表現を改める。

「あ、いや、あくまで推測の段階よ。まだ関係性があるか判らないし。でも、檜山さんの話だと、居なくなる人間がカメラの話によってなんらかの兆候を示しているわけではないよね」

「は、はあ……お役に立てず、すみません」

千穂はしゅんとしよげてしまう。

「なんであなたが謝るのよ。それは私たちの考えが間違っていたのかもかもしれないっていうだけで、もう一度考え直せばいいだけのことよ。あなたは悪くないわ」

「ああ、すみません。つい癖で謝っちゃうんです」

言いながら彼女はどこか悲しげに薄っすらと笑って見せた。そこには、笑みだけでは隠せない、過去に縁取られた自らの暗い習性が垣間見えるようだった。

「癖で？」

「私はそういう人間なんです。いつもそれで、由貴ちゃんにも迷惑をかけて」

彼女の声が次第に力を失い、風に吹かれたロウソクの火のように儚さをうかがわせた。このまま彼女が泣いてしまうのではないかと清人が案じたとき、ふいにどこからか携帯電話の着信音が聞こえた。

その瞬間、千穂の顔が電気が走ったように反応するのが見えた。ポケットから鳴っている携帯を取り出し、画面を確認する。

「まさか……」

「由貴、ちゃんです」

「早く出て……」

成実に言われて、千穂は震える手で通話ボタンを押し、耳元に当てた。

「由貴ちゃん？ 由貴ちゃん？」

一瞬の沈黙。

そして、一拍置いて、千穂の両目から大粒の涙が堰を切ったように溢れ出していた。うんうん、と嗚咽を堪えながら彼女は頷いている。

その様子を三人は固唾を吞んで見守っていた。

「無事、無事なんだよね？」

成実が清人を見て、目で合図を送る。

どうやら、藤咲由貴の無事が確認されたようである。

「よかった、ほんとに、よかったよお」

搾り出すような涙声のまま、千穂は紐ほどかれたような笑顔になる。

しかし、ほっと胸を撫で下ろしたのもつかの間で、

「ねえ、じゃあ今までどこに行ってたの？」

と千穂が電話の向こう側に質問したあと、その返答にその場に戦慄が走る。

「……え？ 記憶がない？ それ、本当なの？！」

言葉を失ったのは成実だけではない。その場にいた清人も風馬でさえ、衝撃に固まってしまった。

まるで見えない魔物と眼が合い、恐怖で動けなくなってしまったかのような、肌があわ立つ衝撃だった。

しばらくして、

「どっぴいっことよ」

やっと成実がそれだけ言った。

「……これはいったい、どっぴいっことよー！」

## 第五章 手がかりはキメラ <1> (前書き)

ええ、毎日更新していくと目標に掲げておきながら、それが難しくなったので、報告します(最近、忙しくなったため)。

極力、更新はしようと思いますが、以前も二日遅れたように当分不規則になると思います。

## 第五章 手がかりはキメラ <1>

週が明けた月曜日の放課後だった。

校舎の二階の廊下を西から東に向けて成実が歩いてきた。自慢の黒髪をなびかせて、小脇には教科書を詰めたカバンを抱えている。

その表情は浮かなかった。

授業が終わり、いつもなら生徒達の気配もまばらなはずの通路の  
はずが、今日は違うのだ。廊下の隅でなにやら奇妙に固まり、声を  
潜めて話し合う生徒たちの姿をいくつも確認できる。

成実は興味がない振りをして、それをすが眺め見ている。

何を話しているのかは容易に想像できた。

その正体は最近、学校全体に広まっている、謎の噂だ。

キメラが校舎に入り込み、生徒を次々に襲うという、シニールな  
B級のホラー映画のような話だった。

生徒達のいったい何割がその話を信じているのか、成実には分  
からない。しかし、全くのゼロということはないはずで、そうでな  
ければ、とつくにそんな荒唐無稽な話、消えうせているはずだ。おそ  
らく面白がっている生徒たちの煽りも受けて、学校中に広まってい  
るのだろう。

成実はもちろん、そんないる筈もない怪物のことなどこれっぽ  
ちも信じていないが、その背後で同時進行している、謎の失踪事件  
にどこか得体の知れない漠然とした恐怖を感じていた。

そう言えば、さすがに藤咲由貴の事件があつてから、成実たちの  
ほかにもその失踪事件とキメラとを関連付けて考える生徒も出始め

ていた。その話がまた校内に広まるのも時間の問題だろう。

成実にはまるで自分たちの目の届かないところで、何かよからぬことが行われ、近い内に底知れぬ闇が口を開けるような気がしていた。そして、その全てをどこから見つめ、高笑いをしている人物がいる。そんな予感が頭について回って離れなかった。

廊下の突き当たり、戸口の脇、スライド式のショーケースに新しく入荷された書籍が陳列されている図書室が見えてくる。

成実は静かに扉を開け、中を覗きこんだ。放課後の図書室は生徒の姿はほとんどなく閑散としている。

閲覧コーナーではやる気のある生徒たちがノートと分厚い本を開き、熱心に勉強に励んでおり、その机の背後に位置するカウンターには、眼鏡をかけた初老の男性が肘をついてパソコンの画面を眺めながらいびきをかいていた。

入り口から見える人間はそのくらいだ。

成実は一步踏み出して、戸を閉める。

本から染み出しているのだろうか、図書室はいつも独特な古臭い匂いがすると成実と思う。

振り返り、彼女は待ち合わせの人物の姿を探した。

ここから見えないということとは、カウンターの向こうにある本棚の群れの中に彼はいるのだろうか。走らないように急ぎながらラックに並べられたオススメ図書のコーナーを通り過ぎて、カウンターの端を横に曲がり、奥に進んだ。

清人は科学に関連する本が並べられた本棚の前に立っていた。気難しそうに、めがねに手をやりながら、本の背表紙を覗んでいる。



「どう、何か収穫はあった？」

成実は彼の肩を叩いて聞いた。清人は成実を一瞥してから、すぐに本棚に視線を戻して言った。

「いいえ。これだ、というものは何も」

「……そう」

肩を落とし、彼が見ている本たちをざっと眺める。そのほとんどが脳の関するものだった。

最初の失踪者の沢口和也も、第二の失踪者の藤咲由貴も同様にその間の記憶を無くしている。その異常な点を追求するために、成実は清人にその謎について調べるように頼んでいたのだった。

成実の推理としては、やはり、二つの事件とも同一犯により実行されており（つまり、二人は誘拐されたと仮定している）、その後、二人は犯人の手によりなんらかの方法で（その理由は不明）、その記憶を消されてしまったのだと考えていた。

清人は後半部分が少々突飛な考えだと、眉をひそめたが、成実は断固としてその考えを押し通し、その裏づけとなる情報を彼に集めてもらっていた。

「やっぱりそんなに都合よく人の記憶を消せる方法なんて無いもんだなあ」

彼女は嘆息を漏らす。

「ええ、そうでしょうね。僕らの脳の記憶はロボットなんかと違ってコンピュータで簡単に取り出せたり、ボタン一つで消去したり付

け加えたりするなんてことは不可能なんですから」

彼は最初からこんなことは無駄足だったんだ、と言いたげな顔を  
して、手に持っている本を棚に戻した。

それでも、納得の出来ない成実は、

「でも、よく映画やドラマなんかでは記憶喪失の人間が出てくるわ  
よね？ どうにかして記憶をいじくれたりはしないの？」

と、そのことを思い出し、彼に質問したが、それはありえないと  
彼は即答する。

「……確かによく聞く話ではありますが、ああいうのは誰かがその  
人物の記憶を消そうと意図してやっていることではないでしょ。本  
人が事故にあったり、ショッキングな出来事に出くわしたりして、  
偶然に発生している事象です。まあ、誰かがそういう状況を仕組ん  
だとすれば出来るのかもしれませんが、成功する可能性はとても低  
いはずですよ」

「ふうん、その僅かな可能性にかけるには現実的ではない、か……」

「ええ、その通りです。それに……」

「それに？」

彼は急に真剣な表情になり、

「言おうと思っていたんですが、仮にもそんな方法がこの世にある  
とすれば、それはとても恐ろしいことです」

そう言った。

「どっぴいっぴいとっ」

訝る成実に、清人はこめかみを押さえながら説明する。

「いいですか？ そんな方法があれば、自分にとって都合の悪い他人の記憶を勝手に消せるわけですよ。例えば、自分が何かの罪を犯して、それを誰かに目撃されたとします。そのことを証言されれば、自分は捕まる。でも記憶を消す方法があれば、殺す危険も冒さず、永遠の口封じが出来ますよね」

これには、成実は言葉を失うと共に、盲点に気がついた。

「……！ 確かに言うとおりだわ」

「そんなものがあれば、世の中は犯人の見つからない犯罪で溢れているかもしれない。でも、現実はそのじゃない。最初からそんな方法なんて存在しないんですよ。今日、ここで調べてみて、それをさらに確信しました。さっきも言ったように人間の脳は僕らが思い通りに出来るほど、単純な作りじゃないんです」

しかし、

「でも、でも……」

と成実は食い下がる。

「なんですか？」

「逆に考えてよ。そんな方法がないとしても、行方不明になった二人が記憶を失った事実は変わりない。その不自然さは残るわ。清人君は、それが偶然だと言い切れるの？」

清人は言葉に窮する。確かにそう言われると、自分の考えに対す

る自信が霧散してしまふ。

「……それは、分かりかねます」

そう弱弱しく返した。

「でしょう？　まだ、記憶を消す方法がないとは断言出来ないわ」

勢いを取り戻した彼女がふんと胸を張る。

「分かりました。でも、僕が調べられるところはもう調べましたよ。ともかく、この点は保留ということでもいいですか？」

「いいわ、そうしましょう」

話を終わらせ、二人は本棚たちの隅に設置されたいたゆったりとした長いソファの上に腰掛けた。清人が何をやるのだろう、と見ていると、成実はカバンから一冊の大学ノートを取り出した。大きく『取材ノート』とサインペンと書かれている。

筆記用具を手に取り、なにやら熱心に文字を書き込み始めた。

おそらく、今までの情報を整理しているのだろうと考えた。ただでさえ不可解な事件だけに何が分かっている、何が分からないのか、書き出していかなければ混乱してしまふ。

結構ずぼらに見えて、こういうところはしっかりしているのだから、と清人は人知れず感心した。

ちなみに、清人が中身を覗きこもうとすると、信じられないスピードでノートを閉じられてしまった。

「乙女のノートを覗き見だなんて、いい根性じゃない」

というわけだ。

同じ新聞部だというのに、情報の共有は許されならしい。

その点を不服に思う気持ちと、確かに、女性の持ち物を覗き見るといふのはセクハラになるのかもしれない（彼女なら本当に訴える可能性が大）、と退く思いがぶつかった。

結果、危険性の高い後者が勝ち、大人しく彼女の作業が終わるのを待つことにする。

数分後、

「じゃあ、次の調べ物ね」

ペンを仕舞うと、彼女は開口一番そう言った。

「はい？」

ノートを指でトントン叩きながら、彼女は説明する。

「カメラについて調べるのよ。手がかりとなるとすれば次はそこね。そこに今回の事件のヒントになるものが隠れているかもしれないわ」  
「……さいで」

まだ調べるのか、と清人は呆気にとられてしまった。そんな彼を見て、成実はおごをしゃくって指示する。

「ぼつとしてないで、資料を探してきなさいよ」  
「……はいはい」

清人はなんとなく言い返せず、彼女の指示に渋々立ち上がる。

そんな二人を遠くの閲覧コーナーから見つめている人物がいた。

机に座り、分厚い専門書に目を通す振りをしながら、隙をみては、視線を彼らに向ける。

そこからは彼女たちの潜めた声を聞き取ることは出来なかったが、話している大まかな予想をこの人物はつけていた。

清人が立ち上がり、本棚の間に姿を消す。

その様子を目で追い、それから、本に視線を落とす。細心の注意を払いながらの偵察だ。

この人物としては彼らを偵察していることを悟られてしまうのは、都合が悪かった。

そして、しばらくしてもう一度本から顔を上げ、成実を見た。

幾秒かの沈黙の後、

ふいにこちらを見た彼女と目が合った　気がする。

慌てて本に目を戻し、その人物は平静を装った。右手に持ったペンを回す。

妙な緊迫を感じ、額に冷や汗が垂れる。

しばらくして怪しまれないよう本を閉じ、その人物は椅子から立ち上がった。この場から立ち去ろうと判断した結果だった。

勉強している他の生徒たちの間をすり抜け、出口に向かう。

今日のところはこれで終わり。

彼らに自分の存在を悟られては困る。

だが、

近いうちに何らかの然るべき手を打たねば。

その人物は胸の内に思考の火を灯らせ、ゆっくりと扉の向こうに姿を消した。

第五章 手がかりはキメラ <2> (前書き)

以前に書いた箇所を修正しています(6/14)。

どうにも変な癖というか……読点がやたら多いことに気がつき、削りました(変でしたよね?)。

なぜか自分、何かと言葉を区切りたがるようです。

また何か気がつき次第、修正します。



第五章 手がかりはキメラ <2>

清人が再び片手に本を抱えて戻ってきたとき、ソファに座った成実はなぜか、図書室の入り口を見つめ、怪訝けげんそうに眉間に皺を寄せていた。

「あれ、先輩。どうかしたんですか？」

疑問に思ってそう訊く。

「うん？」

「何かあつたんですか？」

彼女は首を傾げる。

「ううん、なんだか、誰かに見られていたような気がして」

「誰かに？」

「座つてたらどこからか視線を感じたのよ。まるで、観察されてるみたいなの」

清人はそう言われて辺りを見回す。

しかし、特におかしな人影は見当たらない。カウンターの老人は眠ったままだし、閲覧コーナーでは生徒達が教科書に向かい、鉛筆を走らせている。

「何かの気のせいじゃ？」

言いながら清人はあることに気がつく。もしかして、それは気のせいではなく、彼女に密かに恋心を寄せている誰かではないのか、

と。

わがままなところも多いが、傍から見れば成実はかなり器量よしだった。そのため本人にその自覚があるのかは知らないが、男子生徒たちの中では実は人気があったりする。もしかすると、そんな生徒の一人がこの場所にいたのかもしれない、と清人は思ったのである。

「……そうだといいけど。それより、持ってきてくれた？」

気を取り直した彼女は清人が持っている本に目をやる。

「はい。ギリシャ神話の本でもよかったです、こちらの方がとりあえず簡潔に要約して書いてあります」

彼が持っていたのは、ファンタジーに登場するモンスターたちを取り上げた、図鑑のような書籍だった。

ぱらぱらとページを捲り、この辺りですかね、と成実に開いて見せる。すると彼女は清人の手から無言でそれをぐつと引き寄せ、齧りつくように読んだ。

「ふむ……」

しかし、清人がそれを持ってきてくれたことへのお礼の一言もない。彼の眉が不機嫌そうに片方だけ動いた。

そんな彼の感情を知ってか知らずか、彼女は読み終わって顔を上げた。

「うーん。これって前に妻沢君が話してくれたこと？」

「まあ、大半は同じ内容ですね。ライオンの頭に山羊の体、蛇の尻

尾を持った怪物の話です」

「……最後は、このベレロフォンって人に倒されちゃうんだ」

「そうですね。まあ、人を襲っていた怪物らしいですから、物語としては必然的な結末とも言えます」

成実の言葉に清人が返答していく。

そして、さらに読もうと文章に目を戻した成実の目が止まった。まるで、見えにくいかのように眼を細めて文字を読んでいる。

「ねえ、これ。キメラっていろんな種類があるの？ 体から山羊の頭が生えてるって話も乗ってるんだけど。ああ！ それに蛇じやなくてドラゴンって説もあるわけ？」

素っ頓狂な声を出した。清人はそんな彼女に静かに、と注意してから説明する。

「ええ、キメラの容姿は実はいくつもの説があるんです。興味深いものには、人間の顔を持ったキメラもいるらしいですよ。とにかくいろんなバラエティに富んでいて調べると面白いです」

「はあ……」

「さらに、ギリシャ神話に限らず、こういった怪物の話は世界各地で見られます。つまりは複数の動物が組み合わさった生物のことですが、実は日本にもそれと似たような特徴を持った怪物がいることを知ってますか？ 先輩」

成実は少し考えるように宙を睨んで首を捻ったが、皆目見当もつかないようで、すぐに清人に答えを聞いてきた。

「降参よ。全然知らない」

「鵜ういと呼ばれる生き物です。一説によれば、猿の顔に、タヌキの胴

体、手足がトラで、尻尾は蛇という、これまたキメラに負けず劣らず面妖な姿をしているそうです。また、ヒョーヒョーという気味の悪い声で鳴いたとされていて、平家物語や、撰津名所図会せんしゅめいしよすゑなどに登場しています」

「へえ、それはまた聞いただけで鳥肌が立ちそうね」

成実は話を聞いて寒気を感じたようにソファの上で首をすぼめてみせた。

「まあ、全てが全てそうだということは出来ませんが、大昔の人たちは、人知を超えた超自然的なものをそうやって怪物として具現化し、崇めたり、畏怖する対象としていたんでしょうね」

「ふうむ、なるほど。それで、他には何か情報はある？」

「それがですね、伝説上に登場するキメラではないんですが、現代にはそれとは別のキメラと呼ばれる動物がいるんです」

「それはどうということ？」

「僕は専門家でないので詳しくは知りませんが、生物学の分野では複数の動物の胚を組み合わせて作られた生物が存在するらしいんです。例えば、山羊と羊が合わさった『ギープ』、ライオンとヒョウが合わさった『レオポン』、植物で言うと、じゃが芋とトマトが合わさった『ポマト』なるものもあります」

「……」

一気にいろいろな情報が頭に詰め込まれたせいか、成実は呆けた様子で、ぼかんと口を開けている。

「あ、あの先輩、大丈夫ですか？」

「ええ、気遣いは無用よ。少し混乱しただけ。でも、こうやっているという聞いても、今回の事件と何か繋がりがあるのかは、全く判らないわね」

「そうですね」

「大体、どうしてキメラなのかしら」

腑に落ちない彼女は手持ち無沙汰に再びページを捲る。ぺらぺらと同じところを行ったり来たり、交互に見ている。

そしてそこで、キメラについての短い記載があるのに目がいったその瞬間に彼女はひらめいた。

「ふふ、ふふふ……」

「あ、やっぱり、病院に行った方がいいんじゃないですか？」

突如、不気味に笑い始めた彼女を見て、清人は本気で心配になった。

「冗談はよしなさい、違うわよ。見なさい、これを」  
「……？」

彼は言われるがままに彼女が指差す文章を覗きこんだ。そこには短い言葉でキメラを表す表現が乗っている。

「キメラは、その姿の不可解さから、訳の判らないものを例えるときに使われることがある」

清人がそれを声に出して読んだ。

「どうよ？」

「何がです？」

「訳の分からないもの、まさに、この事件そのものじゃない」

大した根拠があるわけではないのに、成実にはそれが、犯人が示

したメッセージのような、一種の確信を抱く。

まるで、自分たちに向けられた挑戦状である。

この事件、真相を暴けるものなら、やってみるがいい。そう語りかけられている気がした。

面白いじゃない。

成実はうそ笑む。

もう自分の考えを疑うことはなかった。

間違いない。この事件の裏には全てを操っている人間がいるのだ。本を静かに閉じて、深呼吸をする。そして、決意した。

絶対、この事件の真相を見つけてやるんだから。

第五章 手がかりはキメラ <2> (後書き)

ええと、この辺りで物語の中間地点でしょうか。

といつても、大抵予想を超えて長くなるのですが。

これからも、まだ事件が続きます。成実と清人たちにも何かよからぬことが起こる予定です。

あと、これから先は真相を予想しながら読んでみてください。  
読まれた方からの感想、待ってます。

## 第六章 第三の事件 <1> (前書き)

ええ、執筆が遅れていまして、不規則な投稿が続いております。忙しいというのもあるのですが、少々内容で行き詰った点があり、試行錯誤しながら調整しております、思うように進んでいないのが現状です。とりあえずそこを乗り切ればもっとスムーズになると考えています。



## 第六章 第三の事件 <1>

誰にも見られないように抜かりなく警戒しながら、少年はそっと自宅の裏口に回りこんだ。

「よし、ここまでクリアだ」

そう意気込む少年は、そっと制服のポケットに突っ込んでおいた鍵を取り出す。

それは、今朝、使用人が一階の管理室に置いていったもので、いくつもあるスペアキーの一つだった。朝食が終わったちよつとした隙にそつと管理室にもぐりこみ、入手したものである。

「まったく、毎日毎日、こっちがうんざりしてるんだよ」

そう堀に寄りかかり、ぼやいた少年の名は、せんざきとある仙崎透。広国高校に通う二年生の生徒である。

くつとひかれた太めの強い眉、きりつとしまった口元はその点だけを見ると、真面目で利発そうな印象を与える。

しかし、校則で処罰されない程度に染めた髪と、抜き足差し足で、狭い路地を進む姿は、充分よからぬ問題を起こしかねない町の不良に見えた。他人の家に忍び込もうとしているこそ泥にも見える。

そんな彼が小さな石段の上にあり、狭い通路の入り口である頑強そうな鉄扉を観察している。そつと、周囲を見回し、もう一度誰もいないことを確認してから、一息に石段を登り、取り出していた鍵を門の鍵穴にはめる。

「よし、入った」

中で鍵の外れる音。

ここまでは計算どおりだ。

誰かが近づいてくる気配はない。

透には使用人がこの時間帯は邸宅の西側の部屋を掃除していることは確認済みだ。

家の正面から入れば間違いなく複数の監視カメラに見つけられてしまうが、ほぼ使用人しか使わないこの場所からなら、カメラは一台しかなく、その死角を熟知している透には隠れて進むことはお手の物である。

両脇を植え込みによって仕切られ、奥の勝手口に向かう通路を透は、腰を落として進む。

いつそほく前進でもしたい気持ちだったが、それでは服が汚れてしまう。だから、精一杯姿勢を低くした。

まったく、こうでもしなけりゃ俺に平穩が訪れないって、どういう家だよ。

僅かな砂利音も、命取りになりかねない状況で、ようやく彼は勝手口に手を伸ばす。

そこでふと、動きを止め、彼は空を仰いだ。

相変わらず大きな家だ、とうんざりしているのである。

学校の体育館ほどの規模がある、その城のような住居、いや、豪壮な邸宅というべきだ、ともかく透はそこに住んでいる。

あの父が建てた、この抜け殻のような邸宅に。

「まったく」

ふんと鼻を鳴らし、透はノブを回す。

鍵はかかっている。

これまた計算どおりだ。同時に胸が高鳴った。

これは、ひよっとして本当に上手くいくかもしれない。

そのまま中に入り、物音を立てないように注意しながら広いキッチン（というよりもレストランの厨房だ）を通過して、食器棚の並ぶ通路を一息に駆け抜けた。

あとは階段を上り、気づかれないように自室に戻るだけ。透はしめしめと唇をなめる。

だが、そつと様子を窺いながら広間への扉を開いたときだった。

扉の端を何者かが掴んだ。

その危険を咄嗟に判断した彼は、ぐつとノブを引くが、相手の力は想定異常に馬鹿強い。なんと彼が体重をかけても、びくともしないのである。

「え、な……」

木製のドアが軋んでしまうのではないかと思うほど強く扉のフレームががっしとつかまれている。

「ぶぐぐ……」

あつという間に透は力負けし、ずるずると引き摺られる形で、広間に引つ張られた。

「おかえりなさい、透様」

掴んでいたのは、屈強な体つきをした初老の男性だった。少し白

が混じり始めた黒髪で、皺が寄った額は深い貫禄を漂わせている。

美濃<sup>みのはるお</sup>治夫、この仙崎家に長年勤めているベテランのバトラー（執事）である。

彼はノブにしがみついている透を見るや、柔和な笑みを浮かべそう言う。

「透様じゃないだろ、美濃さん。ったくどうしてあんたが？」

彼は悔しそうに地団太を踏む。

「おや、もしかすると私のようなむさい老人がお出迎えしたのがおきに召しませんでしたかな？ 透様にはもっところうら若き女性、そうメイド、そちらが良かったのでしょうか？ 最近は何かと流行っつておいででしょう」

「変に気を回さなくて結構だよ。あいにくとそういう趣味はねえ。俺が言いたかったのは、どうしてあんたがここで俺を待ちうけたのかってことだ」

「ふむ、そう言われますと？」

美濃は面白がっているようにわざとらしく言う。

「俺は今日、誰にもばれないように、正面からじゃなく裏口から入ってきた。カメラにも映らないように、姿も隠して、だ。なのに美濃さんは、まるで俺の行動を全て読んでいたかのようにここにいただろう。それはどうしてなのか聞いているんだ」

「簡単なことです。スペアキーですよ」

彼は事も無げに言う。

「スペアキー？ 気づいてたのか？」

確かに、透は今朝管理室からスペアキーを盗んだ。だが、あの時は誰にも見つかっていなかったはずだ。  
すると、彼は、

「これでも執事ですから。毎日の点検を怠るなどということはございません。それで、今日点検したところ、三つある物の一つだけ無くなっていたというわけです。博様のご家族はこちら側の建物には来ることはございませんし、他の家事使用人でないとすれば、犯人は透様しかいらつしやらないということだ」

「……マジで、ばれてたんだ」

「盗んだとなれば鍵で出来ることは一つ。扉を開けることです。ですから、透様がお帰りになるこの時間帯、監視カメラを見ておりました。すると、案の定」

「案の定？」

「裏口の鉄扉が開閉するのが見えたというわけです」

そのまま後ろにのけぞってしまいそうになる透。

扉か。確かに自分の姿は見られないように細心の注意を払ったが、他の証拠がカメラに映っていたなど、計算の外だった。

「透様を家にお迎えするのは私の役目でございますから、当然、ここで待っていたわけでありませう」

「……」

透はがっくりと肩を落とす。

「さあ、透様。お疲れでしょう、自室にお戻りになる前に入浴なさって汗を流されてはいかがでしょう？」

「結構だよ。風呂に入るタイミングぐらい俺に選ばせてくれ」

「では、自室までお荷物を」

「いいって、それくらい自分で持つ」

「お腹がお空きではないですか？ 誰かにすぐに食べられるものを  
お運びしましょう」

「美濃さん！」

矢継ぎ早にあれこれと世話を焼こうとする彼に透は声を荒げた。

透はまるで何もできない赤ん坊に接するようなあれやこれやと気を回される生活にうんざりしていたのだ。今日だってそれが嫌で、誰にも見つからずに帰ってきたかったのである。

「どうしましたか？ 透様」

落ち着き払った彼の声は逆に透の神経を逆なでする。つい言葉に怒りがこもってしまう。

「放っておいてほしいんだ。言うておくけど部屋には誰も寄越さないでくれよ。夕飯に呼んでくれればいいから」

「お言葉ですが、透様のお傍にお付きすることは、雄一様より仰せつかっておりますので、迷惑がられようと、出来る限りのことはさせてもらいます」

「親父のことはいい！」

癪に障ったのか、突然、ぴしゃりと透は言い放つ。彼の目つきが鋭く変わった。

「しかし……」

「ともかく、俺の部屋には来ないでくれよ。俺が傍に付かれるのを嫌がってるんだ。そういうことだから、頼むよ」

それだけ言い残し、階段を駆け上がると一直線に二手に分かれた廊下を右に曲がる。そのまま一直線に進めば透の部屋だ。

苛立ったように扉を開け、中に入ると内側から鍵をかけた。

そこで深い溜息が漏れた。

ドアに背をもたれその場に座り込む。

「なんだよ。俺だって一人になりてえんだよ」

しかし、つぶやいて目を閉じたのもつかの間、すぐにどこからか物を叩く音がする。首を上げて、音がした方へ向けると二階の自室の北側のガラス戸を誰かが叩いているのだ。

時折ひよっこり出た顔と一緒にタバコを指に挟んだ片手が見える。中年の男性だ。大口を開けて何かを言っていた。

開けてくれ？

「叶野さん！」

透は驚いて、窓に近寄る。すぐに鍵を開け、家の壁面に張り付いていた彼を部屋の中に引つ張り込んだ。

ごろんと前転しながら彼は部屋に転がりこむ。器用にタバコを持つたまま、だ。

「おう、た、助かったぜ」

するとそのもさもさ頭の中年男性、もとい、叶野はタバコの煙をぼふつと吹いて感謝の意を述べた。

「ああ、灰皿！」

いつもの癖なのか、綺麗に手入れされているカーペットの上にタバコの灰を指で落とそうとする。すかさず、透は脇にあった鉄製のくずかごを間一髪差し出した。灰が舞って、中に落ちた。

「おおっと、すまねえ」

「すまねえ、じゃないっすよ。カーペットがこげたりしたら大変なんですから。気をつけてください」

叶野はあごの辺りをぼりぼりと搔いて小さく頭を下げた。

「ああ、すまんすまん。今度から気をつけるよ」

ぶっきらぼうな言葉に反省の色は見えない。

「約束どおりの時間に来てもらって嬉しいですけど、どうしてこんなところから来たんですか？ あんな場所をよじ登ってこなくても他に入り口から入るっていう、常識的で、はるかに安全な方法があるんですけど」

すると彼はにやりとタバコを啜えたまま笑う。

「つい昔の血が騒いでな。壁とか見るとよじ登りたくなるんだよ。ほらよく言うだろ、どうして山に登るのかって聞かれて、そこに山があつたからって。そういうもんだよ。壁を見た瞬間、俺は入り口から入るといふ選択肢を捨てたんだ」

透はそれを聞き、よく不審者として誰にも見つからなかったものだどひやりとする思いだった。

「……そんな安直な理由で、部屋にいる俺を驚かせないでください」



肩を落とし、安堵する透。

「安直じゃない。立派な大義名分だろうが」

タバコの煙を撒き散らして、憤慨する。

「はあ、少なくとも、俺には分からないです」

「まあいい。それで、またわざわざ俺を呼んだのには、どんな用件があるんだ？　すでにお前に言われたことは全部やったぞ」

叶野はタバコをくずかごの底に擦りつけて火を消して聞いた。早く本題に入りたかったらしい。

「ええ、まあ、そのことはとても感謝してます」

そこで、透はゆっくりと申し訳なさそうに息を吐き出し、

「その上でなんですけど、実は、問題が発生してしまっ。それが叶野さんぐらいにしか、頼めないことなんです」

「俺にしか頼めないことか。透に頼りにされているようでお兄さんはうれしいぞ」

叶野は満足そうに目を細める。

「それで、どんな頼みごとが？」

「ええつとですね……」

透が相談内容を話しかけたとき、突如彼のポケットの中で携帯電話が鳴り始めた。設定された着信音であるため、誰からなのかはす

ぐに分かる。

叶野に断わりを入れて、透は携帯電話を彼は取り出した。

「篠田かすみ」

画面にはその文字が浮かんでいた。

第六章 第三の事件 <2> (前書き)

ふう、ようやく投稿できました。

なんだか、だんだん間隔が大きくなっているような……。

## 第六章 第三の事件 <2>

教卓を見ると、すでに担任教師の姿はなかった。それで、もうすでにホームルームが終わっていたことを千穂は知った。

いつも気が抜けているようで、集中力がないうんじゃないかと注意されることも多いが、今日は別に意識が虚空をさま迷っていたわけではなかった。

ある考えごとをしているうちに時間が経過し、その時には、ホームルームが終わっていたのだ。

断じてぼうつとしていたのではない。

教室内が生徒たちの話し声で溢れている。真面目に放課後の掃除をしようとしている生徒は見受けられなかった。ばたばたと走り回るせいで、埃が立っている。

どうしようかな。

時計を見ようとして顔を上げて、そして、こちらに近寄ってきていた由貴と目が合った。

「千穂、もう帰る？」

そう話しかけてくる。

それがいつもの習慣で、千穂は彼女が戻ってきてよかったと思う。一昨日までは、一日失踪していたということ、クラス内外から様々な生徒が押しかけていたが、それもようやく収まったころだった。

千穂は考える。

もし、彼女が行方不明になったまま、時間が過ぎていたら、と。そうなれば自分は学校に登校できていたかどうかも怪しい。あのまま部屋に閉じこもり、不登校になるという選択肢を、自分が選んでいたかも知れないと思うとぞつとした。彼女が欠落した日常など、おおげさに思われるかもしれないが、先の見えない深い霧の中にもぐりこんだようなものなのだ。

でも、こうして由貴は戻ってきてくれた。無事だという電話をもらったときの、安堵感というのは一生忘れることはないだろう。あの後、彼女の家に行き、声だけでなく存在する彼女に抱きついて、すがり付いて泣いた。みつともないとか、そんなことは考えなかった。

由貴が目の前にいてくれることの幸福に気づいた瞬間でもあった。

彼女は彼女で、泣いていた。

記憶がなくて、自分だって状況を理解できず、怖かったかもしれないのに、

「ごめんね、ごめんね」

と繰り返し謝ってきた。

でも、千穂にはその優しさが好きだった。かけがえのない友情を確かめて、それで、失踪事件は幕を閉じた。

と、最初は思っていた。

でも、千穂の中には小さなしこりのように残っていた疑念があることに気がついていた。

稲葉という新聞部の先輩が言っていたけど、由貴が記憶を無くし

ていることには何か原因がある。

それには自分が知らない特殊な事情があるのに違いない。そして、まだ曖昧ではあるものの、千穂にはそう思っただけのある根拠があった。

そう、それは、由貴が居なくなった日の……。

「由貴ちゃん、今日は行きたいところがあるの」

意を決して、千穂は彼女にそう切り出した。

「行きたいところ？ どこ？」

普段、自分から主張することや提案することの皆無な千穂のこの発言は多少、由貴を驚かせた。

「新聞部の部室」

「新聞部？ またどうしてそんなところに？」

彼女が目丸くするのは当然だ。千穂は彼女に、自宅に来た成実たちのことは話していない。

そのため、千穂は簡単に事情を説明し、彼女たちについていけば、何かしら、由貴が突然いなくなってしまったことの原因を知ることが出来るのではないかと考えていることを彼女に聞かせた。

「へえ、新聞部ってそんな活動もしてるんだ」

日頃、そんな部活の名を聞くことのない由貴は意外そうだった。正直、千穂だつて急に家に来られたときは、どういふことなのか、と混乱した。けれど、同時に協力したいと思ったのも事実だ。

あの、稲葉という人の目がとても真剣だったのを覚えている。それを見て、何かの冗談ではないと判断したのだ。

「そこで、事件のことについて聞きに行きたいの」  
「……」

すると、由貴は急に押し黙る。困ったような、不思議な顔をした。

「由貴ちゃんは、自分が記憶を無くしたとき、何があったのか知りたくないの？ 変だっと思って思わない？」

聞いた話では、由貴はやはり千穂と学校を別れた直後から記憶を失い、気がつけば、家の前に立っていたのだという。

その間、約一日。

記憶が空白になるとはどんな心持ちは分からないが、少なくとも気持ちがいいものではないだろう。

「それは、気になるけど。何か嫌な感じなのよね」

それは彼女に似合わない、どこか弱気な後ろ向きの言葉だった。

「それは、どういうこと？ 怖くてその間のことを思い出したくない？」

「どう言ったらいいのかわからないけど。でも、千穂が行きたいって言うなら、私はいいよ。どうせ暇だかね」

「うん……ごめんね。もし嫌だったら先に帰ってもらってもいいけど」

千穂は控えめに目を伏せながら、ちらちらと彼女の顔を窺った。

「謝らなくていいよ。もう行くなって決めたんだから、ほら、早く行こう」

由貴に手を引かれ、千穂は椅子を立ち上がった。しかし、その場で由貴ははたと動きを止める。

「で、……」

「で？」

「新聞部ってどこ？」

「え、……」

千穂の目が点になった。

なにも思い浮かばない。

「えっと……」

これが、幽霊部の厳しくも悲しい現実である。

とりあえず、二人は教室を出て、文化部の部室がありそうな西棟へ向かうことにした。というのも、広国高校は、校舎が一つではない。生徒たちの各クラスと、音楽室や、家庭科教室など、主要な特別教室は東棟にあり、普段、生徒たちはその東棟から離れることなく授業を受け、一日を終える。

そのため、西棟を使用しているのは専ら、生徒よりも教師が多い。元々はその棟にも、クラス教室もあつたらしいのだが、少子高齢化の余波によるものか、単なる、棟の老朽化による安全地帯への避難のつもりなのか、空き教室が多いのだ。古びた木材の匂いがする美



術室や、怪しげな薬品が陳列されている理科実験室など以外は、基本的に教師たちが授業の準備室や、倉庫などに使っている。

千穂と由貴も入学したてではあるものの、その事実を知っていてその空き教室の一部が文科系のクラブの部室として利用されているという話をつつすら聞いたことがあったのだ。

その西棟と東棟は二つの通路で繋がれていて、一つは一階と二階に渡り廊下があった。

「放課後に西棟に行くなんて初めてだよね」

階段を下りながら、由貴が言った。

「だね。私なんて入学時のオリエンテーションで行ったつきり、まともに足を運んでない気がする」

「いくら毎日通ってる高校でも、自分の立場によって行動範囲って狭まるもんだね。この高校のことでまだ知らないことや、見たことのない場所が一杯あるんだろうね」

「そうだね」

「ふむ、そう考えるとき、残りの高校生活を無駄にしないようにしないと。卒業した後になって、学校に知らない場所があったんだなんて気がつくのは、ショックじゃない？」

「うん、そうかも」

「ああ、そう言えばさ、知らないことって言えば、先生の顔だって知らない人って多いよね。担任になったり、科目で担当される先生だと顔や名前も覚えてるものだけど、卒業まで何の接点もないと、違うクラスの子と話して、へえ、そんな先生がいたんだってことない？」

「ああ、あるある。よく離任式や退任式とかで初めて見て、何の先

生だろうつて思ったり」

「そうそう、全く自分には認知の外だったりして、失礼この上ないけど存在すら知られていないという。それで、そんな先生を学校から送り出すって思うと、少し罪悪感みたいなのを感じたり、ね。まあ、間違いなく向こうも自分のことなつてよく知らないに違いないけど」

彼女がそう言って、ふふふと笑う。

ああ、この感じだと思いながら千穂は頷く。こんなテンポで彼女とはいつも話すんだった。特に彼女と長い間会わなかったわけでもないのに、この感覚を再認すると同時に、まるで自分の居場所に戻ってきたように感じた。

やっぱり、彼女は私の大切な友達。

そんなどうでもいい話をしながら、渡り廊下に差し掛かったときだった。いつもはほとんど人影も見えないはずの通路に、珍しく、誰かが立っていた。

一人のようだ。

何を迷っているのか、中央辺りでうろつくと方向転換をしている。その姿は少々気味が悪い。

それでも、千穂たちは立ち止まっているわけにもいかず、通路に踏み出した。

その距離まで来て、千穂にはその人物が誰なのか、見覚えがあることに気がついた。日焼けした短髪の少年だ。彼もそれが分かったように、

「ああ、この間の……」

と相好を崩し、少々馴れ馴れしい雰囲気です手を振って近寄ってきた。

千穂は一瞬、どう反応すべきかどうか迷ってびくりと身体を震わせた。ただそれだけなのだが、それを敏感に感じ取った由貴は、すっと目の前に足を踏み出した。

その少年と千穂を結ぶ直線上に楯になる形で立ちふさがる。鋭い視線を向けた。

「あなた、誰ですか？ 千穂に何か用？」

「え、その……」

彼は予想外の警戒反応にその場で、立ち止まる。突然の緊迫に、千穂は慌てて由貴の対応の誤りを指摘した。

「由貴ちゃん、違うよ。その人は変な人じゃないから。昨日、新聞部の人たちと一緒に家に来てくれたの」

「え、そうなの？」

すると、目の前の少年が丁寧な会釈をする。

「陸上部の明宮風馬です。どうも」

「ああ、すみません」

間違いに気がついた彼女はすぐさま早とちりを詫びる。実はこの由貴という少女、どうにも千穂を自分が襲い掛かる外敵から守らなくてはならない、という一種の使命感を抱いているのである。

「千穂が驚いたみたいだったから、何か嫌なことでもされているの

かと思つてしまつて」

風馬がへこへここと頭を下げる。

「ああ、自分が悪かつたんですよ。数日前に一度だけしか会つたことがないのに、急に呼びかけたりしたから。驚きましたよね？」

「いえ、大丈夫です。えっと、それで、隣にるのが藤咲由貴ちゃんです」

千穂がそう紹介すると、彼が目を見張つたのが分かつた。物珍しそうに、由貴の顔を眺めた。

「ああ、あなたが行方不明になつていた……」

そうじろじろ見られては、こちらも困ると、後退りする由貴。しかし、直接の接点はないものの、失踪した自分を見つけ出そう協力してくれたらしいこの少年に、迷惑をかけた謝罪を述べた。

「私が居なくなつて、いろいろ多くの人に迷惑をかけたみたいで、本当にすいませんでした」

すると、彼は滅相もない、と手を横に振る。

「自分なんて、ただついていただけですから。新聞部の稲葉先輩の方がもっと積極的に藤咲さんを探し出そうとしてましたよ」

「新聞部の稲葉先輩？」

そこで、千穂が当初の目的を思い出す。

「あ、そうだ。私達新聞部に行こうとして部室を探してたんだつた」

「え、檜山さんたちも行こうとしてたんですか？」

「どうやら、この少年も同じ考えでここに居たらしい。しかし、なぜ、ここでうるうるとしていたのか、それが謎だった。」

千穂がそれを問うと、彼は苦笑いをしながら答えた。

「部室は目の前の西棟なんですけど、自分、部室に入れてもらえないんですよ。どうにもその稲葉先輩から煙たがられているようで。だから、ここでこうしてどうやったら入れてもらえるか、考えてたんです。でも、それも今、解決しました」

「はい？」

「檜山さんたちを新聞部までの案内人、ってことにしてくださいよ。そうすれば、部室に入る口実になりますから」

「案内役ですか？」

「ええ、初めて行くんですけど」

「……まあ、いいですけど」

一瞬戸惑ったものの、由貴が首肯した。  
すると、

「やったー」

そう高らかに拳を突き上げ、子供っぽく彼はガッツポーズを決める。その様子に千穂と由貴は顔を見合わせて不思議そうに首を捻った。少々、喜び方がオーバーでは、と思ったわけだ。しかし、案内してくれるというのは願ってもないことで早速、

「えっと、じゃあ案内お願いできますか？」

風馬に呼びかける。

「ああ、そうですね。こちらでございます、お嬢様方」

風馬はすぐさま襟元を正すと、まるで客を席に案内するウエイターのように二人を先導した。胸を張り、まるで自分の晴れ舞台がやってきたといわんばかりのふんぞり返り具合だ。

しかし、残念ながらその役目はあっけなく終わりを迎えることになる。

というのも、渡り廊下の先の角を曲がり、慌ただしく走ってくる二人の人物の影が見えたからだ。

その二人こそ、新聞部部长稲葉成実と副部长である妻沢清人だった。

第六章 第三の事件 <3>

いったい何を急いでいるのか、通路を直進してくる。

このままでは衝突は免れないと察知した三人は咄嗟に通路の脇に身体を寄せた。しかし、これでは気づかずに彼らは素通りしていくと考えた千穂は遠慮がちに彼らに声をかける。

「あ、あの……」

その声に気がついたのか、それとも見覚えのある彼女の存在に気がついたのか、走りながら千穂を一瞥した成実が急ブレーキをかける。ぶつかりそうになって寸でのところで清人も立ち止まった。

「あれ？ 確か、檜山さんよね？」

成実は本当はすぐにも走り出したのか、足踏みをしたまま聞く。

「はい、あの……」

「今日は何か用？ それと、隣の人って」

「ああ、私の友達の藤咲由貴ちゃんです」

成実が合点がいったとぼんと手を叩く。由貴が如才無くお辞儀をし、

「あ、あの、藤咲由貴です。なんだか私を探すために協力してくれたいので、ご心配をおかけしました」

と恐縮気味に礼を言った。

「そう、あなたが藤咲さんなのね。出来れば今でも話をしたいところなんだけど、あいにく、急いでるのよ」

「急いでる？ それはまたどうして？」

何かただならぬ空気を感じた風馬が鼻を膨らませて訊いてきた。

「ついに三件目だよ。行方不明の生徒がまた出たんだ」

「ほ、本当、ですか？」

その情報を初めて聞いた成実たち以外の人間の顔つきが変わった。

「ああ、おとといから居なくなっていて、実はもう無事に家に帰っているんだけど、聞いた話では藤咲さんたちと同様に、記憶を失ってるって」

「……また、記憶が？」

「……」

「それは何組の生徒ですか？」

張り詰めた重たい空気を打ち破るように、そう問うたのは千穂だった。それは、いつもの内気な様子ではなく、何か切実な強い意志から発せられた言葉に聞こえた。

「え？」

「お願いします。教えてください」

「ちょっと、千穂、どうしたのよ」

いつもと違う親友の姿に由貴は戸惑っているようだ。彼女の肩を掴み、不思議そうな顔をしている。



「二年生の篠田かすみって子よ。もしかして知り合い？」

成実はその彼女の反応を見逃さない。僅かだが瞳孔が開いた。間違いなく心当たりがある顔だった。

「知り合いなのね？」

「知り合い、というわけではないですが、同じ塾に通っている人、です」

「同じ塾ねえ。他に何か言えることは？」

成実は静かな声で追求する。

「ありません。それだけです」

千穂はきつぱりとそう言い放った。

成実は眼光を鋭くして、彼女のその言動と挙措から、その裏に潜む真意を探ろうとした。

彼女がどうして、この事件に興味を持っているのか、その謎を。

「いったい、何を考えているの？」

しかし、今はまだ掴みきることが出来ない。それならば、と成実の考えはまとまっていた。

「そう、分かったわ。それなら、ついてきてもらおうかしら。どうやらあなたもそのつもりらしいし」

「はい、お願いします。いいよね、由貴ちゃん」

由貴は目の前で起こっている二人の会話についてこれていないように、目を瞬かせていたが、ようやく我に帰り、

「うん、分かった」

と了承した。

すると、そのやり取りを見ていた風馬が自分も自分もと飛び跳ねながら拳手をする。

「稲葉先輩、自分も」

「あなたは却下」

成実、取り付く島もない。

「どうしてですか、そんな邪険にしないで下さいよ」

「だって、うるさいし」

「そんなあ、静かにしてますから」

「陸上部はどうしたの？ 練習に行ってきたさいよ」

「今日は顧問の先生が出張で、解散して自主練ってことになってい  
るんです。だから大丈夫」

「だめ、そもそもこの前、きちんと言ったでしょ、あれ一度切りだ  
からって」

「何言ってるんですか、同じ事件なんですから、解決するまでがな  
がーい一回ですよ」

「そついうのを屁理屈って言うのよ、ぐうつ。ああいえば、こつ言  
う」

成実はぎりつと風馬を睨んで明らかに苛立っていた。それを見て、  
危険を感じたのか、清人が提案する。

「先輩」

「何よ？」

「もう、抵抗するのは止めにして、ここは潔く彼を連れて行きまし

「よう」

すると成実はくるりと自分の部下を振り返り、見損なったと、声を荒げた。

「妻沢君は私の味方のはずじゃないの？」

「もちろん、一応味方です。だから、最善の方法をこうして提案しているんじゃないですか。前回も同じことを言いましたが、これ以上、時間を無為なものにするのは、目的に反しています。それには、彼を連れて行くのは致し方ないかと」

「……」

「……」

「……泣いていい？」

「……先輩、ええと、心中お察しします」

普段反目しあっている二人ではあるが、このことにおいては清人も、彼女に同情を示した。

予想外ではあったものの、成実たちは千穂に由貴、風馬を加えた五人で移動することになった。

昇降口を出て、校舎の外を歩きながら成実が説明する。

「実は、その篠田かすみの情報をくれた人と校門で待ち合わせしてるの」

「情報をくれた人？」

「訊いたのは由貴だ。」

「うん、同じ二年生の仙崎透って生徒よ」

すると、その名前に覚えがあるのか、質問をした由貴、だけでなく千穂も僅かに反応を示した表情だった。

「……やっぱり、知ってるのね」

と確認する。

この点については、なにやら押し黙ってしまった千穂に代わって由貴が話をした。

「ええ、実は千穂と私は通っている塾が同じなんです。その塾の経営者の親戚に当たるんです。なんでも、その方の兄の息子だということ、時々塾の方に顔を出してることがあるんです。それで、仙崎先輩とは顔見知りの仲なんですけど」

「それは、篠田さんも行ってるっていう……」

「はい、同じ塾です」

「で、仙崎君が塾の経営者の親戚ねえ。それはまた大層な」

成実は驚嘆の声を上げる。自分の周りにそういった地位の人間がないので、とても偉い印象があるのだ。

しかし、彼女は首を振る。

「いえ、それよりも仙崎先輩の父親の方が……」

するとなぜか、語尾が消えてしまった由貴。遠くの一点を見つめたまま、あっと口元を押さえた。

「……？」

不思議に思つて成実がその方向に目を向けると、一台の車が校門の前に止まっていた。いや、成実の目にはそれが一瞬車と識別すべきなのか、迷つた。

あの胴長のダックスフントを髻鬃ほづがっとさせる長い車体に、太陽の光を跳ね返す黒の光沢のボディ、付近を通る人間たちに圧倒的な威圧感を与える一台の高級車が停車していた。

テレビ画面の中でしかお目にかかれないうような、立派なリムジンである。

「誰か、有名人でも来ているんでしょうか？」

風馬が興奮に満ちた上ずつた声で言った。

「どうしてこんな高校に来るのよ」

と成実は否定したが、やはりその高級車が気になった。

「校長が調子に乗って買ったのかしら」

「校長、絶対調つてところですか？」

風馬の低レベルなギャグに無言の成実は鉄拳制裁を加える。

「くだらないこと、言わない！」

「すいません、冗談ですって」

そのやり取りが済んだ後で、一行は校門に近寄つた。他の下校中の生徒達も物珍しそうにそのリムジンを眺めている。高校にリムジンというあまりに場違いさ加減には誰もがただならぬ一種のものものしさを感じているようだ。

周囲には自分たちと待ち合わせているはずの仙崎らしき人物はま  
だいなかった。校門前で待ち合わせなので、どうせならこの際じっ  
くり観察しようとそのリムジンに全員で近寄る。

運転席のドアが開いたのはその時だった。

「よお、広国高校の新聞部ってのはおたくらのことかい？」

ドアの向こうからのそりと姿を現したのは、明らかにその高級な  
リムジンとは不釣り合いな男性だった。タバコの煙をくゆらせながら  
こちらに話しかけてくる。

まるで徹夜明けのサラリーマンのようなよれよれの白いシャツに、  
裾のぼろぼろのジーパン。無精ひげを生やし、もさつとした頭から  
はどこか不潔そうないメージを与えた。

自分たちが話しかけられたことに動揺しながら成実が答える。

「はい、そうですけど」

「ううん、確か話では二人って聞いてたんだが、俺の目に狂いがな  
ければ、あんたらは合計で五人だな。最初の話はさしずめデマって  
ところか？」

「えっと、すいません。いったいこれはどういうことなんですか？」

「もしかすると仙崎君の？」

「おう、すまねえ。自己紹介がまだだったな」

すると、彼は靴の裏でタバコの火をこすり付けて消すと、片手を  
差し出した。

「透からあんたらの送迎を承った叶野だ」

「ど、どうも、新聞部の、稲葉成実です」

成実がその手で握手をしながら、警戒の色が籠もった声で自己紹介を返した。

それを察したのか、

「ハツハ、そう警戒しなさんな。別に怪しい人間じゃない。これでも正式に仙崎家に雇われてる専属ドライバーだ。まあ、あまり普段は出番が多いわけではないが」

「専属のドライバー？」

現実感から遠く離れた単語に開いた口がふさがらない成実。それを尻目に、彼は後部座席のドアを開けた。

「ほら、ゲストの方々、乗った乗った。当初は二人だったが、五人でも変わりはない。むしろ多い方が運転する甲斐があるってもんよ」  
「え、乗っていいんですか？」

あまりに突然の事態に、何が起きているのか把握できない清人は眼鏡がずり落ちそうなほどに驚いている。

「当然だろ。分かり切ったこと言っただけで、さっさと乗れよ。透も待つてることだ。ああ、でも注意しとくけど、あんまり嬉しいからって車内で跳ね回るなよ。何か壊されると責任は俺が取られるからな」

滅相もございません、と寒気がする思いで成実たちはぶんぶんと首を振った。

こんな場所で飛び回るなんてはしたない行為できるわけが無い。

そして、周囲の生徒達の羨ましがな注目を受けながら、全員が無意識に一列になり、行儀よく内部に車内に足を踏み入れた。

中は目の前に大人数が座れるほどのL字型のロングソファが設置されており、そこへ、緊張した面持ちの五人が奥から順に腰掛けていった。

「それじゃ、大人しく乗っててくれよ。そんなに遠くないから、すぐに着いちまうと思うけど」

そう言っ て叶野が扉を閉める。

密閉された車内で、少なくとも一分は全員が無言だった。この非現実的な状況において、会話の口火を切ることが出来る勇氣がある者は、誰もいなかったのである。



第六章 第三の事件 < 4 >

大した振動もなく、滑るようにリムジンが走り出したところで、ようやく成実が口を開けた。

「っで、どっきりのネタばらしはいつなの？」

彼女は今まで掻いたことのない冷や汗を垂らしている。

「先輩、少なくともそれはないかと。どこかの著名人ならまだしも、こんな高校生を騙すにはお金がかかりすぎです」

清人は、ソファの前にある豪華なバーセットをしげしげと眺めながらそう言った。とてもではないが触れるわけにもいかないの、ショーケースに飾ってある宝石を眺めている気分だ。

デパートの化粧品売り場にいるような高級な匂いが所在無げな全員を浮き足立たせている。視線があらぬ方向をさ迷い、ぶつかり、伏せがちになる。

「仙崎先輩ですから、これくらいは当然のつもりなのかもしれませ  
ん」

説明責任を感じたように仙崎の知り合いの由貴が話し出した。

「何？ 仙崎君っていわゆるブルジョアってやつ？ うん？ ボン  
ボン？」

同級生であるのに、成実は仙崎なる生徒のことをまるで知らない。

「ソフトウェア会社のS.Zソフトウェアって言えば分かりますか？先輩はその社長のご子息になるんです」

彼女はまるで何でもないことのようにさらりと言つてのけたが、それを知っているものにとっては、開いた口がふさがらなくなるほどの事実だった。

「……あ、あの世界的にも有名な、ソ、ソフトウェア会社の？」

そして、衝撃に目を剥いたのは、清人ただ一人。あまりの衝撃に清人はうまく呂律が回っていない。

「はい、そうです」

こくりと由貴が頷く。

「ああ、聞いたことがあるような」

すると、清人はぼんやりと言つた成実に襲い掛かるほどの勢いで喋る。

「あるような、じゃないですよ。大変なことです。その会社は僕らが普段使っているパソコンはもちろんのこと、携帯電話なんかの身の回りの機器の開発に携わってます。どれだけの大会社だと思ってるんですか？最近では新たな分野の開拓だつて言つて、ゲーム機の製作にも着手を始めたつて注目を集めていますよ。昔は国内だけのほんの小さな企業だつた聞いてますけど、今では世界にその規模を広げている国際的な会社です。そんな会社の社長がこんな町に住んでいたなんて、全然知りませんでした。それもその息子さんがかんな普通の高校にいるなんて、全く持って信じられません」

興奮しながら息継ぎ無しにそこまで話す。そして、ようやく一拍置いたかと思うと、

「しかも、その社長さんはバブル崩壊時に破綻寸前となったその会社を見事な采配によって、見事会社の経営を持ち直し、そのまま一流企業へと上げた英雄として、広く知られています。英雄なんですよ、英雄！」

そうまくしたてる。その怒涛の話しぶりで興奮した彼を肩を抑えながら成実が制した。

「ちよつと落ち着きなさいよ」

この場にもう一人の風馬が出現したほどの思いで、留まらせようとした。それによって清人がそこで大きく深呼吸をする。

「ああ、すいません。僕としたことが取り乱してしまって」

すると、それを見かねたのか隣に座っていた風馬がどこからグラスを取り出し、ペットボトルから注いだ水を彼に差し出していた。

「この水を飲めよ。落ち着くよ」

「ああ、ありがとう」

彼にしては気が利くな、と礼を言って受け取ろうとして、ぎょつと驚愕した。グラスの底になにやらマークを発見したのだ。

「そ、それってまさかバカラのグラスじゃ？」

「は？ 馬鹿らのグラス？ おいおい、いくらなんでもそれは持ち

主に対して失礼だぞ、妻沢君」

彼は大真面目にとぼけたことを言って、冷たい視線を向けてくる。

「違うって、高級ブランドのグラスって言ってるんだって。壊したら大変だ。す、すぐに元の場所に戻して」

「そうか？ 普通のグラスに見えるけど」

「ちよつと明宮君、見せてみなさい。これは取材の材料にもなるわね。高級リムジンの内装なんてそうそうお目にかかれるものじゃないし、そんなグラスだってきつと高級品の中でも貴重なものに違くないわ」

すると、調子に乗った成実が思ってもみないことを言いだす。この少女、こんなときに限って取材根性を燃やすのだから困ったものである。

「いや、やめた方が……」

しかし、清人が止める前に彼女は椅子から立ち上がっており、風馬からグラスを受け取ったその瞬間、タイミング悪く車にブレーキがかかった。

「きゃっ！」

車体がぐつと前のめりになるのを感じ、成実が振動で体勢を崩す。グラスを持ったままつんのめって倒れこんだ。そのはずみでグラスがもの見事、手を離れた。

清人はグラスがこう自分に喋った気がした。

おいおい、洒落にならねえぜ。

中に液体が入ったまま、グラスが問答無用で、宙を浮遊する。清人の目にスローモーションで、ゆっくりと弧を描き、飛んでいく。それが窓から差し込む光を受けて、まるで宝石のようにきらめいた。なるほど、確かに高級品だ。

しかし、悠長に眺めている時間はない。

「檜山さん、キャッチ！」

咄嗟に出たのはその言葉だった。

その声が彼女に届き、反応をするまでにどのくらいの時間がかかったのかは分からない。

しかし、彼女は、本能的に、両手を、伸ばした。

そして、そこへ棒高飛びをやり終えた選手のように頂点で一度失速したものの、再び速度を速めたグラスが落ちてくる。

だが、それは命がけのダイビング。  
グラスにとっては生きるか、死ぬか、乾坤一擲けんこんいつてきの大博打。

そして今回は、彼を粉碎する硬い床の上ではなく、千穂の手のひらのクッションの上につまく着地することに成功した。

「やった」

しかし、喜んだのもつかの間。

「あ、わ、うわあ」

今度は身を乗り出してグラスをキャッチした千穂がバランスを崩していた。そのままでは前のめりに倒れてしまう。

グラスに一度免れたはずの地面衝突の危機が再び駆け寄ってくる。

そこへ動いたのが隣にいた由貴だった。

「千穂！」

彼女の腰に手を回し、危ういところで倒れ行く千穂の身体を抱きとめた。

間一髪、グラスが千穂の手の中で一命をとり止めた瞬間だった。

誰もが、息を呑んでいた。

「お、おお……」

中身の水はこぼれてしまったものの、それは皆が涙をこぼしながら頭を下げて謝罪をするという未来の悲劇を回避した形になる。

「おお！ ブラボー！」

座ったままの風馬が一人で盛大な拍手を送る。千穂が胸を押さえ、荒く呼吸をしながらケースの中に収めている。

「ブラボー、じゃないでしょう。だから、やめてくださいって言うたんですよ」

清人は倒れている成実を助け起こしながら、彼女と風馬の不注意を責めた。

「だって、じっくり見たかったし」

うじうじと口を尖らす成実に、清人は子供じゃないんだから、と眼鏡を光らす。

「だってもへちまもないです。全く、そういうことは今しなくなつていいでしょう。だいたい先輩は行動が軽率すぎるんですよ。いつも言っているように……」

「うわあ、また始まった」

成実が清人の説教から逃げるために耳を塞ぐと同時に、今度は車内に叶野の声が響いた。どうやら、運転席からマイクを通してアナウンスが出来るらしい。

「おうい、大人しくしてろよ。思った以上にやんちゃなやつらみたいだな。いいか？ 車内で走り回っていいのは、小学校三年までだ。高校生にもなったら、分をわきまえて、静かにしりとりでもして時間を潰せ」

どうやら、運転席にまでこちらが騒いでいる声が聞こえていたようだ。叶野の声は騒いだことにはそれほど怒っていないようだったが、苛立っているのは分かった。

それは紛れも無く自分たちの責任である。

だが、しかし、分をわきまえてしりとりというのもいかなものか。

成実は眉を寄せる。

そもそも、この叶野という男、いったいどういう人間なのだろう。

大金持ち専属のドライバーにしてはどうにも品がない気がする。言葉遣いは乱暴だし、身だしなみも整っていないかった。映画に出てくるようなハイヤーに乗る富豪には不釣り合いなイメージである。本当に雇われているのだろうか。

成実は心の奥で、分をわきまえてないのはどっちよ、と舌打ちした。

「おい、返事は？」

誰もが無言だったため、彼がそう言って了解の言葉を促した。

「はい、分かりました」

他の人間の声を押しつけて、風馬が元気よく返す。狭い車内に容赦なくびんびんと響いた。

「なあ、今時の高校生は音量のコントロールも出来ないのか？」

と叶野はうんざりしている。

いえ、彼だけです。

風馬を除き、その場にいた全員がそう思っていた。



## 第七章 富豪の少年と喪失の少女 <1>

案内された応接間で全員がもれなく溜息を漏らしたのは言うまでもない。

壁際には洒落た淡いオレンジ色の電球。それに灯された室内は洋館を思わせるレトロな雰囲気だ。天上にはぶら下がっているのが不思議なくらいの豪華な装飾のシャンデリアがあり、壁には、おそらく有名な画家の作品なのだろう、力強いタッチで描かれた人物画が飾ってある。

床はまるで当然のことのように鮮やかな模様の絨毯が敷き詰めであり、部屋の中央にあるテーブルと椅子は思わず座るのを躊躇してしまうほどの丁寧な彫刻が施されたアンティークなアームチェアだ。

「こちらで少々お待ちください」

そう白髪交じりで体格のいい老人（いかにも執事といった出で立ちで、美濃という名前だった）に案内され、五人は一瞬固まっていたものの、おずおずと手前の椅子から座った。

その老人が立ち去ってしまうと、場に沈黙が下りた。

皆それぞれ、自分たちがどれほど場違いかを脳内で認識しあっているのだった。

きつと今誰かからマイクを向けられたなら、

「普通の高校生ですいません。無性にすいません」

と開口一番、謝ってしまいそんな空気さえ漂っている。

清人は訳もなく緊張し、手のひらは汗でびっしょりだった。喉が渴いている。誰かに飲み物を頼みたいところだが、あいにくここはレストランというわけではない。

そんな彼の服の袖を成実が引つ張った。耳元で囁いてくる。

「ねえ、仙崎君って私達をこんなところに呼んでどうするつもりかしら？ 私達の目的が事件の調査ってことは分かっているはずよね。でもこれじゃ、まるで接待されてるような雰囲気だわ」

「そうですね。今回の事件の失踪者である篠田かすみさんの家まで、ついて来てくれるのかと思っていたんですけど。リムジンでお迎えが来て、彼の家に連れてくるというのはよく分かりません」

清人は言いながら、おそらく仙崎が入ってくるであろう応接間の入り口を覗んだ。成実は肩をすくめると、

「彼から何の説明もないし、なんだか変な感じ。お金持ちって一般人と感覚がずれてるってイメージがあるけど、思考パターンも違ってくるのかしら。部屋の仕様や家具なんかを逐一、事細かに自慢を始めたらどうする？」

とげんなりと妄想した。

「どうするって、さすがにそんなことはないと思いますよ。第一、情報をくれたのは向こうです。僕達をそれを目的に連れてきたんですから、事件のことを無視するなんてことはない」と

「まあ、そうよね。仕方ない、本人が来るまで待っていきましょうか」

成実は納得がいかない顔のままだったが、とりあえずは疑問を引つ込めた。ふと他の三人を目をやると、いつの間にか三人は三人で

会話に花を咲かせている。

「門から豪邸までに自分、歩数を数えたんだけど、七十歩はあったよ。どでかい庭だね」

「私、昔こんな家に住みたいなんてあこがれてたかね。庭から庭の端まで花を植えて、毎日手入れするの。これだけ広ければ鬼ごっこするのにも場所は事欠かないし、いいよねえ」

「ふふふ、そうだね。私もこんな家に住んでみたいかも。ああ、でも自分の部屋がどこにあるのか分からなくならないかな」

などなど。初めて見た豪邸の感想を各々が言い合っているようだ。そこに緊張感のかけらもない。完全に当初の目的を忘れた彼らの姿があるだけだ。

のんきなものである。

すると、清人の隣で成実が立ち上がった。興味引かれるものがあったのか何かを目指して一直線に進んでいく。

応接室の入り口の脇の壁、年月の経過を思わせる古い木製の本棚があった。彼女はその手前まで歩き、大きさを綺麗に整頓された分厚い本の一つを手にとった。持つだけでずしりと重いその本の表紙は立派な革で作られている。

それだけでかなり高価なものであると分かった。

重量感のある表紙を開くと、目に入ってきたのは1ページに所狭しを貼り付けられた写真だった。まるでひしめき合うように（よくはみ出していないものだ）、居場所を取り合う一瞬の記憶たち。

成実はその中の一枚に目がいく。

おそらく、仙崎家がどこか海外旅行へ行ったときに撮影されたら

しい。成実が知らない異国の綺麗な町並みとその向こうに見える瑠璃色の海を背景に家族が笑っている。

父親に両脇を抱え上げられている子供は、きっと幼い頃の仙崎少年なのだろう。いたずらっぽく舌を突き出し、右手でピースサインをしている。

パラパラとページを捲っていく。

旅行が終わり、この豪邸で撮られたと思しき日常の写真や、仙崎少年の学校での発表会などもある。だが、次第に気がつく。

1ページあたりに占める写真の枚数が減っていった……。

「悪いね、待たせて」

突如、真横で扉が開き、驚いた成実がアルバムを取り落とした。

「あっ」

テーブルの椅子に腰を下ろしていた清人たちの視線が扉を開けた茶髪の少年に向けられるのに対し、彼女の瞳が捉えていたのは、偶然に開かれたアルバムの最後のページだった。

しかし、そこにあっただのはそれまでの写真とは違う、様々な糸の刺繍の施された絵である。

成実が感じたのはいわゆる、既視感。

どこかで、これ、見たことあるわ。

しかしそう思った矢先、アルバムがパタリと閉じられる。腰を落としてそれを拾い上げたのは、アルバムの写真が撮られたころからずいぶんと成長し、男らしくなった仙崎透だった。

「あんたが、新聞部部長の稲葉さんか？」

彼はアルバムを元の本棚に戻しながら、そう訊いた。

「そ、そうよ、私が稲葉成実。あなたが事件のことで呼んでくれた仙崎透君？」

「おう、その通り。俺が仙崎だ」

そう言っただけで目元にかかった前髪を払いのける。そんな彼を成実はしげしげと頭からつま先まで見つめた。

「なんだ？」

そう訝って訊いた彼に、

「いや、なんだかお金持ちって感じがしなくなって、あなたの恰好を見てそう思ったの」

そう返した。

確かに、今の彼の恰好は英字新聞がプリントされたTシャツに紺色のジーンズというとても金持ちとは思えないラフな服装だった。

さっきのリムジンの運転手といい、お金持ちのステレオタイプが段々成実の中で崩壊していく。

「金持ちが金持ちっぽくしてないとまずいか？」

「いいえ、別にそうは言っていないけど。ただ、イメージと違うなって思ったの」

「ふうん、まあいいや。とりあえず、椅子に座ってくれよ」

「事件について話してくれるんでしょうね？」

「ああ、もちろんするって、せつかちだな」

透はとっつきにくそうに成実に眉をひそめる。しかし、彼女は謝るどころか、語気を強めて彼に詰め寄った。

「あのねえ、あなたはそう仰いますけど。私達はどうしてこんなところにつれて来られたのか全く分からないのよ。最初は校門で待ち合わせるはずだったのに、説明もなく高級なリムジンに乗せられてあなたの住んでる豪邸につれてこられて、こっちの気持ちも考えてよ」

これは確かにもっともなこと、清人も椅子に座ったまま頷いた。すると、透も自らに至らないところがあつたと自覚したのか、素直に謝る。

「ああ、そうだよな。ごめん。今日ここに二人を呼んだのは、ってあれ？ ずいぶん多いな。檜山と藤咲もいるし」

透はその時になって初めて、人数が想定していたものよりも多いことに気がついたようだった。奥に座っていた少女二人が挨拶し、会釈している（それに混じって、風馬が自己紹介をしていた）。

「どうして居るわけ？」

それには成実が説明する。

「檜山さんが事件のことについて知りたそうにしていたから、私が連れてきたの。知ってるでしょ、藤咲さんが記憶を失って行方不明になってたこと。もしかして、ご迷惑だったかしら？」

「いや、迷惑なんてことはねえよ。むしろ多い方がいいかもな」

「仙崎先輩、それはどういうことですか？」

これには、清人が質問した。透はそれに対し、先ほど言おうとして、言い損ねたことを話した。

「今日、皆をここへ案内した理由なんだけど。実は落ち着いた場所で、事件に関する意見交換がしたかったんだ」

「意見交換？」

「そう、俺もこの奇妙な事件に興味を持っててさ。確かに、事件そのものに犯罪の持つ凶悪さは感じられないけど、どうにも変だと思ってるんだ。失踪者が示し合わせたみたいに記憶を消すなんてありえないだろ？」

「そ、そうだったんですか」

これは初耳である。清人は自分たち以外に本格的にその説を考えている人間がいるとは思わなかったのである。

「そしたら、新聞部もどうやら俺と同じ考えで調査をしているって聞いてさ。話してみたって思ってたんだ」

「そこへ、今回の篠田かすみさんが失踪するって事件が起こったのね」

「そう、藤咲が居なくなっただけも驚いたが、また俺の知り合いの子だったからさ。さすがに深刻に思えてきてよ。まあ、無事に戻ってきたから良かったけどさ。やっぱり記憶をなくしてるって言うし、この機会に新聞部の方々と話をしようと思って呼んだんだ」

腕組みをしている成実が頷く。

「なるほど、どういうことかは大体把握したわ。それで、その失踪してたっていう篠田さんって人はどこにいるの？ 本人から話を聞

けないんじゃないわ、来た意味がないわ」

「大丈夫だって。もちろん来てもらってるからよ」

透が背後のドアを軽くノックする。



## 第七章 富豪の少年と喪失の少女 <2> (前書き)

本分の一箇所を加筆しました。事件の失踪者の共通点を言及している場面です。

## 第七章 富豪の少年と喪失の少女 <2>

そう呼びかけると、ドアノブが回転し、ゆっくりと扉が開く。そして、そこから一人の少女が顔を覗かせた。様子を窺うようにおずおすと前に出たほっそりとした顔立ちの彼女は、

「二年六組の篠田かすみです」

とクラスと名前だけの簡単な自己紹介をした。

成実は彼女に見覚えがあることに気がつく。確か生徒会の委員会役員だったはずだ。学校で集会があるときなどは、役員席の隅などで見かけることがあるのだ。

確か、保健委員会か何かだったか。

成実は記憶の糸を手繰る。

彼女が来たことで、全員が席に着席し、それに合わせたように、匂い立つ紅茶が運ばれてきた。全員の前に配られる。

やはり、一目でそれと分かるような高級品のティーカップで、清人は手に触れるだけで緊張してしまふ。彼は横目で風馬を観察し、ぞんざいに扱うことがないか見張っていた。

体験することのないどこか上品で厳かな雰囲気にはほとんど全員が無言になっている。

そんな中、

「それで、篠田さん。居なくなつたときのこと覚えて話を話してくれない？」

紅茶を一口飲み、一息ついた成実が話を切り出した。彼女はテ-

ブルの上に両肘をつき、組んだ手の甲に顎を乗せる。

名前を呼ばれたかすみは紅茶のカップを持ったまま緊張したどこか緊張した面持ちで小さく頷いた。

「は、はい」

しかし、その瞳はたちまち伏し目がちになる。

「と言いましても、記憶がないもので特に何か話せること、といってもですね」

「まあ、そりゃそうか。これまでの二人もそうだったものね。こっちがそんな質問する方が間違ってるわね」

「じゃあ、記憶がなくなる前までは何をしていたんですか？」

代わって、隣の清人が訊ねる。

「そうですね。私は保健委員の役員なんですけど、その日、二日前のことですね。会議がありました、そのせいでいつもより帰宅時間が遅かったのを覚えています。友達も皆帰ってましたから、教室に戻って荷物を取って、それから、下校しました」

「下校して、それから？」

「ありません。何も」

「記憶がない、と？　じゃあ、それから気づいたのは？」

「……自宅の前です」

まるで、そう告げることが罪であるかのように、申し訳なさそうに彼女は答えた。所在無げに俯いている。そんな彼女を見て、今度は透が話した。

「その間は、約一日。これまでの二件と同じなんだよ。それまでの

間、彼女の足取りは全くつかめない点も含めて考えて、二件の事件と同質のものであると考えていいと思うぜ」  
「警察にはこのことは知らせたんですか？」

と清人。

「ああ、そうなんだけど。やっぱり本人は何事もなく帰っているし、事件性はないと見ているみたいだな。犯人がいるんじゃないかも話したが、まだその線では動けないってさ。でも、連続で起こっていることにはおかしいとは思っているらしい。近々、この付近のパトロールをして、学校にも注意喚起に来るってさ。注意喚起って何を注意すればいいのか知らんが」

透は皮肉を込めた言い方をした。

やはり、警察も何の手がかりもない状態では動くに動けないのだろう、成実は思う。これが決定的になんらかの犯罪であるという証拠があればいいのだが。そうすれば本格的に調査行われ、この事件の真相が判明するかもしれない。

しかし、成実には分からない。  
「いったいこれは何なのだ？」

成実にはカメラのことを調べてからというもの、これが誰かの意図によって行われているものであることを確信している。

だが、その目的が分からない。  
「いったい何のために、犯人はこんなことをしている？ 苛立ちで唇をかんだ。」

しばらくしてから質問した。これは千穂にしたものと同じものだった。

「篠田さん、カメラの噂については何か知ってる？ これは、藤咲

さんにも訊いてるわ。何か少しでも気に掛かることはない？」

先に透が反応して首を向ける。

「キメラについて？ やっぱりの噂も関係していると考えてんのか？」

これは彼らに説明していかないことであつたので、成実は自分の考えを簡単に説明する。清人がそれに対し、少々補足しながら話した。

「……というわけで、私はその噂を流している張本人が今回の事件を裏で操っている犯人ではないかと思ってるのよ」

「ふうむ、なるほどね。新聞部はそんな風に考えてんだ」

「犯人が噂の中で登場させているキメラ、それについて何かを知っているから、狙われた。犯人の動機になっている可能性だつて考えられるわけ」

考えをだいたい把握したらしい透がその目で二人を交互に見つめる。

「それで、お二人は何か知ってる？」

すると、二人はやはり困った顔をして、首を強く振った。

「残念ながら、少しも心当たりがないんです」

「少しも？」

「はい」

「他に事件の被害者、いや、失踪者同士の共通点は見つかってないのか？」

透がそこで成実に質問する。

「共通点ね。それもよくわからないわよ。最初は二年生の沢口君、次に一年生の藤咲さんでしょ。藤咲さんは沢口君のことを知ってた？」

「いえ、知りません」

「篠田さんは？」

「え、と。知りません」

かすみの視線が少しだけ動き、すぐに否定した。

さすがにここまで知らない、分からないでは、成実もうんざりしてきてしまう。

「……二人とも知らないんだ」

「うっむ。そうなると、全員に特別な結びつきがあったわけでもなく」

と透。

「年齢や、性別、学年にも関係ないわよね」

と成実。

「ただ、共通点あるとすれば、この高校の生徒だっただけとくらいか」

「そうね。それくらいね」

「……大したことは分かりませんね」

清人が絶望するようにそうつぶやいたときだった。

かちゃり。

物が倒れる音がした。

「あ、きゃあ！」

全員が目を向けると、テーブルの上にティーカップが転がっている。千穂の前で、こぼれた紅茶がテーブルの端を伝い零れ落ちていた。どうやら、彼女の手が触れてこぼしてしまったらしい。

「ご、ごめんなさい。手が当たってしまって。わ、私おっちょこちよいだから」

「大丈夫？ ほら、ハンカチで拭いて」

どうすればいいのかとあたふた戸惑っている千穂に由貴がポケットからハンカチを取り出し、テーブルにかかった紅茶をふき取っている。

すると、どこからその状態を察知したのか、誰も呼ぶことも無いのに、先ほどの美濃と呼ばれた案内人の老人が現れ、手際よく濡れた床を布巾で処理を始めた。さすがは富豪の家の執事だけあって、すばやい対応だった。

その隣では、千穂がしきりに頭を下げている。

「いいんですよ。こういう時のために私がいるのですから」

美濃は薄い微笑を浮かべながら立ち上がり、代わりの紅茶を用意しようとして食器を片付ける。そうして頭を下げる彼に千穂は由貴に拭いて貰ったハンカチを出して、訊いた。

「すみません、このハンカチを洗ってきたいんですけど、どこか洗面台はありませんか？」

「そうですね、それなら、この部屋を出て通路奥を右に曲がった二つ目の部屋が給湯室です。そこでなら、ハンカチを洗ってきても大

丈夫ですよ」

「そんな、千穂いいのよ」

由貴はそう遠慮したが、千穂は首を振り、

「だめだよ、こんなびしょびしょだし。私が悪いんだからちよつと洗ってくるよ」

ときびすを返し、扉の向こうに小走りで駆けていく。

「……」

成実はなぜか、千穂が消えていった扉の向こうを怪訝そうに見ながら、ゆっくり鼻から息を吐いた。それから、自分の紅茶に目を落とし、持ち上げると一息に飲み干す。



第七章 富豪の少年と喪失の少女 < 3 >

「ねえ、聞いていい？」

彼女が横目で眇め見たのは透だった。

「あん？ 俺のことか？」

「そう。ここに来る車の中で聞いたけど、あなたのお父さんって会社の社長で相当なお金持ちなんですよ」

清人はむっと口を結び、飲もうとカップに伸ばしていた手を引っ込めた。

彼からは成実が事件のことに興味を失ったのか、情報が集まらず、むしゃくしゃした気分を紛らすために、違う話題に触れたように見えた。車の中でも言っていたように、彼女はあわよくば、この豪邸に住んでいる仙崎少年のことを記事にでもしようとしているのかもしれない。

あまり話題から逸れすぎるといふのであれば注意すべきだろうか、と警戒する。

「まあ、一般的にみれば、それなりにだろうな」

彼は遠慮がちにそう言ったが、ここで言うそれなりとは、とてもという意味なのだろう。

「そのお父さんはやっぱり忙しいの？」

「そりゃ、ね。数十年前ならともかく、今じゃ世界を相手にした商売だからな。社長と言えど、世界各地を転々としてるらしいぜ。いたいどんなことをしてるのやら。今じゃここに帰ってくるのは、

年に一回あるかないかだ」

「……年に、一回……」

寂しそうに成実が繰り返した。

「いったい今いまだどこにいるのか、それすらよく知らない。電話だつて一月に一度か二度、その程度だ。半年以上、何も連絡がないときだつてある」

「それで、あなたのお母さんはここに住んでるの？」

「離婚したんだ」

間髪入れず、彼は答えた。

離婚という言葉は他人の前に出すには通常憚られるものに思えたが、彼は何の抵抗もなくさらりと云つてのけた。

「……！」

「当然と言えば、当然だろ。母さんが望んでたのはこんな父親不在の空っぽの家族生活じゃなかったんだからよ」

「じゃ、それが嫌になつて」

「ああ、5年前にすっぱり別れて、今は時々俺の顔を見に来る程度かな。だから、今この家で暮らしてるのは俺と世話人くらいだ。隣の建物には塾の経営してる叔父さん家族が住んでるけど、まあ、あまり付き合いはないわな。ときどき食事するくらいだ」

まるで他人事のように恬然<sup>てんぜん</sup>とした口調で話をする透に、成実が訊いた。

「寂しく、ない？ そんな家に居て」

それはまるで、堪えていたような切迫した声だった。

これには、さすがに透も閉口した。息が詰まるように、胸の中にわだかまった生暖かい不満を吐き出す場所を探しているように見えた。

「今の状態がさ、いいものだなんて思っただけさ。親父は会社の危機を救ったなんて英雄呼ばわりされてるが、家庭内の危機は乗り切れてないんだぜ。母さんは居なくなった」

ぼつりと漏らす。

「確かに、お金はあつて何も不自由することなんてないかもしれない。でもよ、やっぱりいいわけねえよ」

透の声が次第に熱を帯びるように力が籠もり始める。歯を食いしばっているように見えた。

清人は彼から獣のような、ただならぬ空気を感じる。

「押さえ様が無くイライラすんだ。時々な。このままじゃいけないだろつて。俺の中がだまつちゃいねえ」

彼は無意識に拳を握り締め、それをテーブルの上で硬く結んでいる。怒りを堪えているのは誰の目にも明らかだった。

「あの、仙崎先輩」

それを察した篠田かすみが隣でなだめる様に呼びかけた。

「……！ ああ、ごめん」

それに気がつき、我に戻ったのか、

「なんか、辛気臭い話になったな。すまねえ」

と素直に詫びた。

「いや、話を聞いたのはこっちよ。仙崎君が謝ることじゃないわ」  
成実はそう言いながら、直前の彼の様子を目に焼き付けていた。  
忘れてしまわないように。

仙崎透。

彼は自らの現状にかなりの苛立ちを抱えている。それも、我を見失ってしまっただけに。そう、心のノートにメモを取った。

そのまま事件についての話も進展しないまま時間が過ぎていった。  
十分ほど経っただろうか。

由貴が何度も時計と入り口の扉を確認しているのに透が気がついた。落ち着かない様子で、不安げにしている。

「藤咲、どうした？ さっきからそわそわして」

「いえ、あの、千穂がまだ帰ってきてないので、どうしたのかと思っ  
つて」

言われてみれば、そうだった。

先ほどからかなり時間が経過しているのに、ハンカチを洗いに行っただけの千穂が帰ってくる気配がない。

どう考えても遅すぎた。

「まさか、迷子になったとか？」

そう冗談っぽく言った清人だったが、由貴はうんうんと頷いた。

「多分、そうだと思います」

「え？ そんなに遠くない場所でしょ？」

成実は呆れ顔をしている。彼女の常識から考えれば、迷子になるにも程がある、という計算結果が算出されているのだ。すると、由貴もそれには同感なようで、苦笑気味に、

「ええと千穂は、その、方向音痴なんです」

そう言って、立ち上がる。

「私、ちょっと探しに行つてきます」

そして、由貴がドアを開けようとしたとき、向こう側からドアが開けられた。

「あっ！」

「えっ！」

そこにはハンカチを握った千穂が立っていた。自分のことをたった今話されていたことを理解していないようで、ぼけっとした表情で立ち尽くしている。

「由貴ちゃん、トイレにでも行くの？」

「違つてば。千穂がなかなか帰ってこないから心配してたの」

「あ、ああ。そうだね。ごめん」

「あれ？ 家の中で迷子になってたんじゃないの？」

由貴がそう聞いたのも無理もない。彼女からは迷いに迷ってようやく帰ってこれたという安堵感が感じられなかったのだ。

「え？ うん。ちょっと道が分からなくなりそうだったけど、お手伝いの人に教えてもらったよ。ただ、そう、ハンカチを洗うのに手間取っちゃって」

「それにしても遅かったじゃない」

彼女の言うとおり、それを計算に入れても遅いものは遅かった。なんといってもハンカチを洗うだけである。どれだけ丁寧に洗ったところで、五分もあれば充分ではないだろうか。しかしそれに対し、千穂は、

「わ、私、のんびりしてるから」

えへへ、と舌を出してみせる。

「まあ、いって。彼女まで行方不明になったわけじゃなかったわけだし、記憶を無くしてるわけでもなさそうだしな」

椅子の上で背伸びをして、欠伸をしながら透が言う。お疲れなのか、どうにも千穂が姿を消していたことには興味がないようだ。

「あ、はい。私、この通り大丈夫です」

「本当に？」

由貴はやはり彼女を疑わしそうに見た。  
だが、そこへ透の声がかぶさる。

「というわけで、今日はこのくらいにしようか。これ以上話せることもなさそうだし。いろいろと新聞部の人たちの話も聞けたしね」  
「ええ、そうしましょうか。私もいろいろと面白かったわ」

清人は大して何も分からなかったのに、満足そうにそう言った彼女を見て、これは皮肉だろうか、と思う。

「そりゃ、良かった」

「また今度、話せたらいいわね」

そんな二人はテーブルを挟み、向かい合ったまま、立ち上がる。と、透の方から手が出て、握手を求めた。

成実は一瞬、戸惑ったが、すぐに自分も手を出して、握手に応じる。

成実が彼の凛々しく強い印象の目を見て、興味深いわ、と心の中で思った。

彼の内に潜む、意思の強さを感じ取った気がしたのである。

「面白い人ね」

知らず、口をついて言葉が出た。

「ああ、あんたもな」

もしかすると、透も同じことを思ったのだろうか。そんな答えが返ってきた。

その後、全員が席を立ち、荷物を持って部屋を出て行き始める。それぞれが和気藹々《わきあいあい》と豪邸の感想を口に出している

中、成実はさりげなく後に残り、集団の後ろの方にいた、篠田かすみの背後についた。

肩を叩き、そっと耳元で囁く。

「ねえ、さっき気づいたんだけど」

突然、成実にはなしかけられ、彼女はきょとんとしている。

「なんですか？」

「あなた、妙に隣に座ってる仙崎君のことをちらちら見てたわよね」

成実が言うと、少女の顔がふつと赤くなったようだった。それを見て彼女は確信し、直球で質問をぶつける。

「仙崎君はあなたのことをただの知り合いとしか言ってなかったけど、もしかして、付き合ってたたり、好きだったりするの？」

「い、いえ、そんなことは……」

何を突拍子も無く、と彼女はかなり強めに首を振って否定した。加えて、今日初めて会った人間にそんなことを聞かれると思っていなかったのか、ひどく驚いているようだった。

しかし、成実にはその動揺が逆に怪しく見えて仕方ない。

「じゃあ、どうして。彼を見ていたの？」

「ええと、ですね。それは……」

そう彼女が言いにくそうに、言葉を濁らせたとき、通路の先から立ち止まっている自分たちを呼ぶ声がした。

「先輩！ 置いてきますよ」



この馬鹿でかい声は間違いなく風馬のものである。耳を塞ぎたくなるのを堪えながら返事をした。

「分かった。今行くから」

すると、これが逃げるチャンスだと思ったのか、呼ばれたのをいいことに、かすみは成実の質問に答える前に早歩きで行ってしまった。

「あ、ちょっと」

呼び止める間もない。駆け足なので、すぐに先に歩いている集団に追いついてしまった。

しかし、しばらくその様子を見つめ、無言で立ち尽くしていた成実は、がっかりするかと思いきや、

「まあ、いいか。収穫はゼロじゃなかったってところね」

そう独り言を言って薄っすら微笑んだ。

## 第八章 キメラの急襲 <1><キメラ

『連続誘拐!? それとも神隠しか!? 広国高校で謎の失踪事件が多発!』

朝刊新聞の見出しにそんな文字が躍ったのは、清人たちが仙崎邸を訪れた日の翌日だった。清人は目を覚ましたばかりで、食卓に座り、母が用意してくれたハムエッグを口に運びかけて、新聞に目を運び、そのままフォークを取り落としそうになった。

目を疑うとはこのことで、最近、失踪者の事件について毎日のように調査を行っているせいで、目の知覚機能が何らかの誤反応を起こしたのかと思った。

なんでもない事件の見出しが目に入って、それが目から情報として入力され、脳に伝わる過程で、無意識に書き換えられたのだ。

それはよくある勘違いというやつで、普段なら、見間違いか、で終わるのだが、今日は違った。

ぎゅっと目を瞑ってもう一度新聞の見出しを覗き込んでも文字が変わることはなかった。

「うわ、え?」

そう思わず声を漏らしてしまった。

「嘘だろ……」

清人は半信半疑で、そこに記載されている記事を読む。そして、確信する。間違いない、今成実とともに調査している事件のことだ

った。

それほど大きな記事というわけでもなかったが、事件内容は三件とも記載されており、校内で流行っている謎の噂にまで言及されていた。しかも記事の後半ではまるで、そんな怪物があたりかもこの世に存在するかのよう、煽り立てる文章である。

さらに、警察の対応にまで記事は及んでおり、大した根拠も無いのにすぐさま嚴重な対処をしなければ、次は死人が出るかもしれないと大仰に締めくくられていた。

それと呼んだ清人は事は、これほどまでに大事件にまで発展してしまっただのか、と浮遊感にも似た非現実感を抱いた。

落ち着こうと、手元の牛乳を飲み干す。

「はあ……こりゃあ、大変だ」

そうつぶやいた矢先、携帯電話の着信音が鳴った。制服のポケットの中で震えている。

取り出すと、案の定、成実からだった。通話ボタンを押すと、

「見た！？ 聞いた！？」

という、情報量の著しく乏しい第一声が聞こえた。直前に、清人が新聞を読んでいなかったとしたら、朝から「説明に目的語がないんですけど」と怒らなければいけなかっただろう。

しかし、今回は幸いにも大体事情を把握していたので寛容に対処することが出来た。

「新聞のことですか？」

と冷静に訊く。

しかし、成実は思っていたことと違つらしく、疑問符がついた声を発した。

「は？ 新聞？ 違つわよ。テレビよ、ニュースよ。私達の高校が全国のお茶の間に流れてるわよ。大事件よ大事件」

よほど慌てているのか、着眼点が違つだろ、と清人は猛烈にツツコミたくなつたが、それよりも彼女のテレビという単語が気になつた。

「テレビでもそのニュース流れてたんですか？」

「そうよ、公立広国高校の怪異とか、おどろおどろしいタイトルでさあ。レポーターまで来て話聞いているのよ。アポなしだったみたいで、校長がテンパつててね……」

「それ、まだテレビでやってますか？」

清人はテーブルの上のリモコンを探る。

「ううん、もう終わつたけど。他のチャンネルでやってるかもしれない」

そう言われて清人はテレビのチャンネルを回す。

しかし、残念ながら見つからない。もしかしたら、もう一度放送するかもしれないな、ととりあえず民法放送にチャンネルを合わせた。

「全く、朝から驚きましたよ」

「そうなのよね。お母さんがテレビに学校が出てるなんて言うから

「何事かと思っただけ」

「まあ、当然と言えば当然かもしれませんが。これだけ同じような事件が続いているわけですから、マスコミが飛びつくのも無理はないかと」

「無理もない、わよねえ」

自分の意見に同意したのか、と清人は思ったが、成実の言葉にどこか疑いの気配があることに気がついた。

「何か、引つかかっていることでもあるんですか？」

「いや、ちょっとね。テレビの報道を見てて思ったんだけど、地味じゃないか、と」

「地味？」

これはどういう意味だろう。

「こんな言い方するのもなんだけどさ、確かにこの事件ってさ。行方不明者が三人も出て、それも皆が皆記憶を失ってる上、さらに学校にはキメラがいるなんていう噂が広がってる」

「はい、そうですね」

「でも、これが何者かの犯行なら、実質やってることは地味じゃない？ だって、たった一日だけ生徒を行方不明にして、それですぐに家に戻すのよ。それだけなのよ」

清人には一瞬、彼女が何を言いたいのかが分からなかった。

「そうですね」

「これだけじゃ、せっかくキメラを引き合いに出してる意味がないわよね」

「え？」

「だって、こんなに大層な怪物を出してきてるのよ。もつとこう、なんていうかさ。その怪物に食い殺された！ とか（見たくないけど）、夜になると校内で唸り声が聞こえるとか、そういう事件なら納得いくのよね」

「い、言われてみれば、それもそうですね」

清人もこれには頷けた。確かにキメラの噂は流行っているもの、それ自体が今回の事件に特別な結びつき方をしているとは思えない。成実が言った「わけの判らないもの」繋がりだけでその名前を使っているとも限らないし、何もわざわざそんな怪物でなくてもいい、とは思った。

「でしょう？ だから私は地味だって言ってるのよ。三件も連続で事件を起こしている人間だもの、もつと大きなことが出来ても不思議じゃないわよね。それが、なんだかさ、誰かの機嫌を伺ってるみたいに、控えめになってる感じ」

「控えめに、なってる……！」

なぜだか分からないが、清人にはそれがこの事件の核心を突いているような、そんな感じがした。

「どう？ そう思わない？」

「でも……だとしたら、どうしてですか？」

「うん？」

「どうして、犯人はそんなことを？」

「……」

「……」

「……妻沢君」

「はい？」

すると、彼女はすつと息を吸い込んで、

「それが分かれば苦勞はしない」

「ごもつとも。」

キメラ

待っている。

彼は待っている。

自分が待ち望んだ時を。

そのために、もうどのくらい耐えてきただろう。

暗い土の中に閉じこもっていたのは、いったいどれくらいだったのだろう。

全てが上手くいけば、きっと報われる。

しかし、今は狩りを続けなければならない。

そう、自らを取り巻く闇の力をさらに強めるために。

それを打ち崩されてはならない。

だが、今、自らに迫ろうとしている、破滅を招く、足音が近づいてくる。

止めなくてはならない。

自らの目的の障害となるものならば、それを除かなければならない。

彼は闇の中で牙を向く。



## 第八章 キメラの急襲 <2>

成実が朝の部室に入ってくると、清人はすでに自分の机に座っていた。穏やかな朝の陽光差し込まない暗い部屋に、蛍光灯を灯らせ、新聞紙の切り抜きとにらみ合っている。

「おっは、妻沢君」

「ああ、おはようございます」

眼鏡の位置を直しながら、彼は顔を上げ、軽く頭を下げる。成実はそれを眺めてからふふんと鼻を鳴らし、

「感心ね。集合がかかって部長より早く部室に来ているとは」

深々と頷く。

「自分が絶対厳守で八時集合だって言いつけておきながら、平気で遅刻してくる人に上からの目線で言われたくありません」

彼が指差すと、時計の針は八時十分を指している。

「何を言ってるのよ、秒に換算すれば600秒よ、たったの。そんなもの二度寝をしていれば一瞬よ、一瞬。それに」

清人はそれを聞いて、なるほど、遅刻したのはそういうわけかと呆れた。その怒りを抑えながら、

「それに？」

先を促す。

「私は部長で重役出勤ありだから」

堂々と言つてのける成実。

「先輩……」

「何よ」

「勝手なルールを今作らないでください」

「いいえ、バスの中で考えました」

えへん、と成実は胸を張る。

「そういう問題じゃありません！」

清人はつい取り乱し、机を叩いた。

「まあまあ、ごめんごめんって。それで、何か思いついた？」

本当に謝る気があるのか、自分の椅子にどつかと腰を下ろし、机の上に突っ伏した。その態度に再びむっとする清人だったが、いつものように説教などするわけにもいかなかったので、仕方なく自分が考えていたことを話した。

「犯人の目的のことです」

「目的、と来たか」

ほほお、と成実はあごをさする。

「ええ、僕らはずっとそれが分からずに、この事件の謎に翻弄され

てきました」

「それが分かったとでも言うの？」

彼女の表情が明るくなり、むくりと起き上がる。

「いいえ、残念ですけどそうじゃありません」

「何よ、思わせぶりな言い方だったじゃない」

「でも、よく考えてみれば、僕らはそのヒントに気づいてなかったんです。なぜか見逃してました」

「見逃してた？」

「ええ、すつきりさっぱりと」

「いつそんなヒントがあったって言うのよ」

疑わしそくに片目を吊り上げる彼女に、清人は新聞の切り抜きを見せ、ここです、と指差した。

「例のカメラの噂ですよ。狐坂先輩が言ってました」

そして、文章には清人の赤のマーカ―が引かれている。

その部分の文字は、

「来るべき時？」

そう記されている。

「ええ、そうです。先輩言ってたじゃないですか。カメラの怒りは未だ収まらない。それ故、犠牲となる獲物は一つに非ず。次なる獲物が狙われるのは遠くない。全ては来るべき時に向けて。僕らこんなヒントがありながら、自ら暗中模索の道を選んでたんですよ」

「この文章……」

清人はその文字をなぞりながら説明する。

「ここにはこう書かれています。怒りはまだ収まらない。犯人はきつと何かに怒ってるんです。それが何かは分かりませんが」

「怒ってる。怒り？」

「それから、犯人が目的としているのは、この来るべき時で、そのためには犠牲となる獲物がいるんです。それで、文脈から推理するに、その来るべきときにきつと犯人の怒りは消える」

「なに、それは八つ当たり？」

何気なくそう言った彼女に清人は真剣な語調で返す。安易な発言をしている場合ではないと思ったのだ。

「冗談ですよ。やっていることはその程度のことではありません。人をどこかに誘拐しているんだとすれば、立派な犯罪です」

成実は腕を組み、考えごとをしているのか無言になった。

「まあ、これだけの情報で何が分かったというわけではないですけど、少しは何かの指標になったかと」

「……むしろこんがらがったわ。回りくどいというか、なんとか」

「え、そうですか？」

「考えてもみなさいよ。むしろくしゃして人をたった一日誘拐して身代金を要求するならまだしも何もしてないわよ。ただの徒労よ、そんなの」

と成実は清人の情報を一蹴する。

「……じゃあ、彼女を呼びましょう」

しばらくして清人が提案した。それは明らかに苦し紛れであり、切羽詰った彼がたどり着いた最終地点だった。彼はマーカーを指で回しながら、顔を上げる。

自分の話で、逆にわけが分からなくなったと言われては、引き下がるわけにはいかないのだ。

「え？」

「もつとヒントが欲しいですよね」

「そりゃあ、そうだけど。彼女って、誰を？」

「決まってるじゃないですか。狐坂先輩ですよ、ほかに新しい話を聞いてないか、聞けばいいんです」

それを聞いて成実はあるさまに渋面を作る。

「麻子お？ でも妻沢君、以前は麻子の事を胡散臭いって言ってなかった？ 信用できないってとも言ってたわね。そんな人間の話を知るか？」

すると、彼女の表情が意地の悪い笑みに変わり、清人の肩を突っついた。おそらく、今まで散々自分の新聞作りに関して否定的だった彼がその新聞作りに加担していた麻子に頼ることは、自分に頭を垂れたも同じと思っているのだ。ここぞという攻撃のタイミングを逃さないのが成実だった。

「でも、今は他に頼れる人もいないじゃないですか。呼んできてくださいよ」

清人は彼女が何組なのか知らないので成実と呼んできてもらうしかない。

「ええと、どうしようかな」

明らかに優位に立った彼女は、ふんぞり返り、いままでにないほどに高圧的な態度で椅子に座った。

清人はこれは、嫌なムードになった、と溜息を吐く。

「あのう、そう言わずに。どうか」

「どうか？ 何？ きつちり頭下げて、ほら。お願いしますでしょ。お、ね、が、い、し、ま、す」

土下座、とまではいかないものの、成実は自分に対し、頭を下げる要求をしてきた。

清人はうつろな目をして彼女を見つめる。

おそらく、今頭を下げるのは一時の恥じでも、成実のことだ、きつと卒業するまで、何度も蒸し返されるネタに昇華しょうかされるに違いない。そうなるとやつかいだ。

しかし、後には引けない清人。恐る恐る、体勢を前に倒す。

「えっと、お、おねがい……」

そう言い掛けて、

「それには及ばず！」

どこからともなく、芝居がかった女性の声が響く。

突然のことにきよとんとした二人の顔が背後の入り口に向く。そして、そこに現れた人物をその眼に捉えた。

「え？」

「狐坂麻子、ただいま推参！」

さながらヒーローの登場シーンのように、腕組みをし、光を背にしてたっている彼女は、にやりと不敵な笑みを浮かべていた。

「あの、本当に行くんですか？」

「行くに決まってるじゃない。妻沢君ね、あなたが先に言い出したことなのよ。麻子に話を聞こうって」

「……それはそうですが」

「弱気ね。そんなことでどうするのよ。ジャーナリストならこれくらいことなんということもなく出来なくちゃ」

「いえ、今度ばかりはさすがに、偽の情報を掴まされたんじゃないかと」

「あら、どの口がそんなことを言ってるのかしら？ 意思がぐらついてるわね。麻子の事を信じるなら信じる、信じないなら信じないと最初から決めてもらわないと。意見が二転三転するようじゃ、誰にも信用されないわよ」

清人、そう言われては返す言葉がない。

居心地の悪さをごまかすように、こぼり、と一つ咳をして、窓から外の町を見る。

もうすっかり陽は暮れていた。

交差点を通り過ぎていく車達の頭上では三色の信号が鮮やかに光を灯している。

青から黄色、今、赤に変わった。

腕時計の針はすでに九時を指している。

校舎にはもう生徒は誰も残っていないはずの時間だった。教師だって、特別仕事が残っていない人間は帰宅している。もうしばらくすれば、事務室の鍵も閉まってしまうだろう。

そうなれば、後に残されるのは、昼間の活気を失った闇に沈む校



舎である。

そんな場所で部室に隠れ、清人と成実は動き出す時を見計らっている。

どうしてこうなってしまったのか。

それは遡ること数時間前、麻子の話した話に起因する。

部室の前に突然現れた彼女の言葉によって。

「あたしに、また話を聞きたいらしい人間がいるらしいようじゃの」

部屋に入っていた彼女は嬉々とした様子で、スキップをしながら、清人と成実の周りをくると一周すると、机の上に座った。

「きよぼんがそうやって頭を下げるなら話してもいいぜ」

「え、何かまた新しい情報があるんですか？」

「ああ、そうさ。そうでなければ、あたしはここにはこないもん。」

麻子は風の子、渡り鳥。この町の空を飛んでるんさ。風の家に住んでりゃ、向こうの方から噂は飛び込んでくる。何をせずとも、話の尻尾を掴むのには慣れてんさい」

何を言っているのかよく分からないが、情報屋として自分が優れている、ということ表現したいのだろうか。

「先輩、それなら話してくれますか。とても重要なことなんです」

「おうおう、ついに、あたしの前で情報欲しさに手をあわせる人間が出現したぜ。これは何かの吉瑞きちういか？」

「いや、参考として聞くだけよ」

成実は冷めた表情でしれっと言う。

「なるみん、つれねえなあ。もっと空気読んでさ、土下座とかしてよ。『麻子様、お願い』とか」

「馬鹿げたこと言ってるんで、さっさと話しなさい」

そう突き放されて麻子はしゅんと落ち込む。

まずい。清人にとって彼女に機嫌を損ねて欲しくなかった。

思いつきで机からパック詰めされたあめ玉を取り出すと、それを麻子に差し出す。

「こ、これをお納めください」

「はあ？ それ私のおめじゃない」

「ほう、気が利くな。きよほん、ぬしにはテレパシーの才能がある。あたしが保証する」

「そ、それはどうも」

清人はぎこちない愛想笑いをしてみせる。あんたに保証されても、という言葉は飲み込んだ。

麻子はためらいなくあめ玉を口に放り込み、うれしそうにころころと転がし始めている。それを見ている成実是不愉快この上ない様子だ。

「妻沢君、あなたのやったことは責任重大よ。あとからそれと同じものを買ってきなさい」

「いいじゃないですか。たかが一つですよ」

「一つでも、メロン味だろうがあー！」

ばたばたと足を踏み鳴らし、成実は子供のように埃を立てた。よほど、メロン味のキャンディが好きなのだろう。

心底やつかいな先輩だ。

「分かりました、分かりましたから。コンビニで買ってきますよ。それで、狐坂先輩、話を」

「おおほのこおか、ほれわな、ふあいいふはんひ……」

「……あめ、飲み込んでからでいいです」

「冗談だつてきよぼん、普通にしゃべれるよ」

ああ、こつちの先輩も面倒だ。

泣けてきそうだ。

「……それで？」

「話では、体育館に、いる」

「は？」

「キメラが、体育館に戻るんだつて。夜に」

「夜に体育館に？」

「キメラの本拠地なのかな。きつとね、これはあたしの推測だがね。

キメラはきつとこの学校を乗っ取るつもりなのかもしれないねえぜ」

「乗っ取る？」

「そうさ、ここはあたいのもんだつて、縄張りを張るみたいなもんなさ。そう主張してる。ここをね、キメラの巢にするつもりなのかも」

目配せをしながら麻子は、がりり、とあめ玉を砕いた。

成実は先ほどコンビニで購入してきたライトにまるで弾をこめるように乾電池を入れながら、深呼吸している。

さながら、敵地に潜入するスパイのように精神統一でもしているのだろうか。

彼女が喋ったのを最後に、二人は黙ってしまったている。

その二人の代わりにというか、机の上では、最近の流行歌が流れていた。ウィークリーのヒットチャートをランキング方式で紹介していく番組で清人も時々聞くことがあった。

曲と曲の合間に陽気なDJの声が入る。まるで、こんな部屋に隠れ、外に出るチャンスを探っている二人をおちよくっているように、神経を逆なでする甲高い声だった。

いつもそんなことを思うわけも無いのに、なんだかそう思った。

自宅には、携帯電話で連絡を入れ、今日は友達の家勉強するために泊まると嘘を言っておいた。それは成実からの念のための指示で、それで明日の朝まで帰らなくても親が心配することはない。

だが、これから向かうであろう体育館に何かいるのだろうか？

清人はうつむ、と首を捻る。

麻子の話はやはり情報量が少なく信憑性に欠けるものだったが、先の二件の噂が的中しているところを見ると、もしかすると、という緊張感の高まりは否めなかった。

「行くわ」

時計の針を見て、成実が言った。

「ああ、はい」

清人はラジオを切り、その彼女を追う。すると、成実は入り口のところで顔だけ清人に向け、意外そうな顔をした。

「なに？ 来るの？」

「え、そりゃもちろん」

まさかそんなことを言われるとは思ってもみなかったので、清人も目を丸くした。

「さっきまで行きたくないって言ってたじゃない」

「それは語弊があつたようですね。行く意味があるのかなあ、と疑問を抱いてはいましたが」

「あら、そうなの。まあでも、無理してついて来なくていいわよ」「僕が行かなかつたら一人で行くつもりだったんですか？」

「そうよ。だからその時には、妻沢君にはここで留守番でもしてもらおうと思つてた」

「一人で行くなんて怖くないんですか？」

まあ、彼女がそんなことでしり込みするような度胸のない人間とは思えなかつたが、清人は一応聞いてみる。

「それよりも知りたいっていう好奇心の方が勝つてるわよ。キメラがいるのか、いないのか。はっきりするじゃない」

「知りたい、ですか」

「そう、知りたいの」

そう彼女は強く繰り返した。

まるで、それが自分が一生貫き通す必要がある信念であるかのよう  
うに、表情には力が籠もっていた。

そして、さらにこう付け加える。

「だって、ジャーナリストだから。真相を究明して、そして、何が起こっていたのかを皆に伝えるのよ」

ジャーナリスト、だから。

その言葉が清人の中で跳ね返るように反響した。  
事あるごとに彼女が言う、その言葉。

そこにいったいどれくらいの意味があるのだろうか。  
少なくとも清人には分からない。

平穩無事で、かなりの割合で同じことを繰り返すのみの、管理されたような日常を選ばず、自ら身体を張って、不可解、混沌の中に首を突っ込むようなことだ。

「……」

どちらかと言えば、自分は日常に平穩を求めるタイプの人間だ。何事もなく、平和に、凹凸の少ない道を歩きたい、そんな人間だ。だから、自分から厄介な物事に関わりあうのは、好きではない。でも、彼女は違う。

知りたいから、自分がどんな道を歩もうと気にしない、気にならない。  
そんな生き方を選ぶ。

ジャーナリズムとはそういう考え方をするという意味もあるのだろうか。

ともかくそういう点で、清人と成実とは、いろんな意味で、そもそもががみ合わない人間同士なのだ。

たまたま今は同じ部員として一緒にいるが、本来であれば、関わりあうこともないだろう。

もしそうだったら、清人にとって成実は、ただ全校で知れているちょっと綺麗で無茶をする先輩で、成実にとっては、清人など名前すら知らない、後輩の中の一生徒に過ぎないのだろう。

そうだ。

そう考えれば、自分は無理して彼女に付き合う必要はないのかもしれない。

清人はそう自問する。

でも。

現実はそのじゃない。

清人は成実と同じ新聞部に所属している。

こうして、一つの事件の解決に向けて、目的を同じにしている。

本来なら、交わらない平行線を辿ると思われる自分たちの線路は今、交差しているのだ。

そこに何かしらの意味があるとすれば、自分は彼女に協力すべきではないだろうか。

彼女が自らの信念を貫くのを手伝う、そういうのも悪くないかもしれない。

考えてみれば、別に自分は彼女のことを嫌いなわけじゃないんだから。

「もし、もしもですけど。何かいたらどうするんです?」

ポケットに手をつ込み、清人はそう訊いた。

「何かって?」

「この事件の犯人です。こう考えられませんか。カメラというのは犯人、自分のことをそう呼んでいるのだと」

「つまり体育館には犯人がいると? そう主張するのね」

「ええ、ありうるとすればその可能性が高いと思います。話を聞いて面白がって来た人間をどうにかするつもりかもしれません」

「どうにかする、抽象的ね」  
「最悪、殺されるかもしれませんが」

冗談ではなく大真面目に清人はそう言った。

「可能性はあるかも。まあごく僅かだけど」  
「一人で対抗できるんですか？　そういう危険性があることを考えていたんですか？」

そう言つと、返答に窮する成実。

ほづら、やつぱり。

成実はこういうところで抜けていることがある。勢いはあるが、そのせいで大事な部分を見落すのである。

「だから、僕もついて行きますよ」

そう言つて一歩前に出た清人は、無意識に自分に背を向けている彼女の右手首を握っていた。

「……………」  
「先輩一人なんかじゃ、行かせられません。もしものことがあったら……………」

そう言つてから、ずいぶん自分は齒の浮くような台詞を吐いてしまったと気づく。しかも、しっかりと手まで握っていた。

呆けたように自分を見る成実から視線を逸らし、こみ上げてくる恥ずかしさに目を瞑って堪えた。

何を言ってるんだ。僕は。



もしかすると、妙な誤解を生む発言だったかもしれない。

「……妻沢君」

背後から名前を呼ばれ、びっくりと反応する。

「はい！」

「拳銃」

成実がぼつり、と言う。

「はい？」

「犯人が拳銃持ってたらさ、二人いてもさすがに死ぬよねえ」

「……そうですね。きっと死んじゃいます」

妙に間延びした彼女の声に空振りしたように気抜けして清人は答えた。

## 第八章 キメラの急襲 < 4 >

部室の明かりを消し、鍵を閉めると、西棟の渡り廊下に向かった。体育館は学校の東側にある。西棟からだど、東棟の右から回り込み、グラウンドの前を通過して正面玄関に向かうのが普通なのだが、さすがに夜だけあって、正面の扉は当然鍵で閉まっている。

「どうやって入るんですか？」

事務室も閉まっているので、鍵は入手不能だ。清人が心配して聞くと、正面玄関の前に立ち止まって、彼女は笑う。

「大丈夫よ。あれを使うの」

彼女が指差したのは、体育館と繋がっている古い非常階段だった。どうやらその階段を上り、二階の窓から細いキャットウォークに入ろうという魂胆らしい。

清人は彼女に続いて非常階段を上り、緑の明りが灯された非常口。もちろん鍵がかかっているので外からは入れない。

「よいしょ、と」

すると、彼女はためらいもなく転落防止ようのすりの上に足をかけ、その上で方向転換をすると、手すりの向こう側、片方の足を非常階段の踊り場、もう片方を体育館の壁に沿って作られた細い溝にかけた。

「お、落ちないでくださいよ」

思わずその声をかけた。見るからにバランスが悪そうなのである。

「大丈夫だって、落ちないから」

余裕綽々にそう言って、彼女は見えている二階の窓にそっと手をかけた。

「開いてますか？」

「ううん、鍵、かかっている」

「ですよねえ」

普通、そうだ。

しかし、彼女は考えがあるのかにやりと笑う。

「でも、大丈夫。開けるから」

「へ？」

「これ、コツがあるの」

成実は窓のサッシを手で持ち、ぐつと斜め上に突き上げるように二、三度揺すった。すると、何が起こったのか、たったそれだけなのにがらりと窓がスライドする。

「お、開いた」

「え？ そんな簡単に？」

「この窓ね、鍵が昔っから緩いんだ。だから、窓の端からちょっと衝撃を与えると振動で鍵がはずれちゃうんだよ」

そう言って、彼女はそこからよじ登り中に入って行った。すぐにかちりと音がして、ライトの明りがこちらを照らす。

「ほら、早く。こんな場所にいるところ見られたらまずいから」

「あのう、今さら遅いかもしれませんが、一応警察を呼ぶってのは？」

「何言ってるの？ここに誰かいる証拠はないし、呼んだところでこんな場所で何してるんだって怒られるだけよ」

「ですよ。分かりました」

了承して、清人は手すりをまたぎ、彼女がいる窓から体育館内部に入りこんだ。

「……」

内部はやはり予想した通りの闇だった。隣にいる成実がやっと分かるほどの暗さである。清人は思わず、唾を飲み込んだ。

意味がないと思いつつも辺りを見渡す。

本当にここに麻子の言うとおり、キメラがいるのだろうか。

この事件を起こしたという張本人のキメラという怪物が。

そう思っただけで神経が張り詰めるのを感じる清人を成実は知らん振りですそのまま歩き出す。

「ちょっと、稲葉先輩」

清人は小声で彼女を止めた。

「何？」

「もし、何かあって危険だったら、すぐに逃げますよ。いいですか」「分かったわよ。勝手に逃げればいいじゃない。どうぞどうぞ」

清人は彼女からまるで腰抜けといわれたようで、かちんとくる。

「そうじゃなくて、先輩もです。僕が危険だと判断したら、強引にでも先輩も連れて逃げますから。分かりましたか？」

「妻沢君の判断で？」

「ええ、僕の独断で。危険の察知能力は僕の方が鋭敏だと思いますし」

「ふん、いいわ。私だって死にたくないし、逃げるときは逃げるわよ」

成実は成実で馬鹿にされたと思ったようで、彼女は機嫌を損ねたようだった。清人を置いて、一人でそそくさと歩いていつてしまう。

「先輩、一人で行動しないでください」

慌てて追いつくが彼女は無言で足を止めることはない。

「どこを調べるつもりですか？」

清人は腕を捕まえてそう訊いた。すると、彼女は振り返りもしないで答える。

「……一階の体育倉庫よ。何かいるとしたら、その辺りが妥当じゃない？」

「そんな、肝試しじゃないんだから。勝手に目星をつけないで、もっと慎重に進み……」

「ああもう、いちいちうるさいわね」

すると、成実はそれまで蓄積していた不快感を露わにして、こちらを振り向いたかと思うと、清人の右腕に手を回してきた。そして、それを自分の体へぐつと引き寄せる。

「え、な、何を」

突然のことに動揺する清人。

「これでいいでしょ？ 一緒に進めるし。逃げるときも二人で逃げられる。だからほら、早くついてくる」

「う、腕を持つなんて」

「文句ある？」

「ない、かな」

「なら、いいわね」

以下、清人少年の脳内の葛藤。

でも、でも、と清人は引き下がりたい気持ちで一杯だ。

腕を組むなんて、異性同士でそんな軽がるしくしていいことなのか？ 恋人くらい親密な関係においてなら分かる。

だが、自分たちはなんでもない、ただ同じクラブに所属する部長と副部長だ。

それなのに、成実は何の抵抗もなく、こうして腕を組んできた。

どういっつもりだ。

いや、成実のことだ。どういっつもりもないだろう。

先ほどの自分の言動にも行動にも、なんら反応を示さなかったのだし。

嫌なら、やめてもらえばいい。

だが、一度了承してしまったものを、いまさらやめて欲しいと言  
い出すのも変だ。

まず、断わり辛い。

もついい。目を瞑れ。

ただ、十数年の自分の歴史の中で、女子と腕を組むなんてはじめ  
ての体験だから、こうして動揺しているのだ。

そうだ。それだけのこと。

だから考えるな、それが一番だ。

変に意識することなんてない。

「……」  
「……」

でも。

でも。

清人の目の前に、成実がいる。

こんなに、至近距離で、彼女を見たことがない気がした。耳を澄  
ませば、微かな呼吸さえ聞こえてくるし、組んでいる腕からはその  
ぬくもりも伝わってくる。

光源がライトしかない薄明かりの中で見る彼女の横顔は、確かに  
周りが噂するように、綺麗に見えた。

正面を見据えたままの光を受け、きらめくガラス玉のような瞳に、  
降り積もる雪のような暗闇に映える白い肌。

もしかすると、この特別な状況がさらにその美しさを強調してい

るのだろうか。

なんだか、清人には彼女がいつもの彼女に見えなかった。どこか楚々とした雰囲気である。

清人はそんな彼女に、思わず見惚れてしまった。

「そこから降りるよ」

狭い通路を二人で歩きながら成実が階下に降りる梯子を指差した。

「ああ、はい」

その声で清人は現実に取り戻され、首を振る。

「どしたの？」

不思議そうな彼女に、清人はなんでもありません、と首を振った。

前方の梯子に目を向ける。

ちょうどそこは舞台裏の真上に当たり、普段生徒が入ることのないスペースである。

成実が先に降り、続いて清人が鉄製の梯子に手をかける。明りが乏しいので足を踏み外さないように注意しなければいけない。

「落ちてこないですよ。私、潰されるから」

「分かっていますって」

囁きあいながら、梯子を無事に降りた。

狭い空間は隅々この方に掃除用具を収納するロッカーと演劇部が使用するのだという小道具が隅に整頓してあった。



清人はそれを見てふと思い出したのだが、演劇部の部長は、とても恐ろしいらしい、という噂を聞いたことがある。

なんでも、自分で一度決めたことには一直線の人で、以前、演劇をする際に人員が足りなくなった際、なんとしても劇をやり通すため、物語のヒロインの姫役に男子を無理やり抜擢し、劇を行ったという話を聞いた。

果たして本当なのだろうか（確か、麻子から聞いたので、信憑性に欠ける気がする）。その真偽の程は分からないが、恐ろしい、というよりもとんでもなく行動力のある人なのかもしれない。

そういう点は成実に似ているだろうか。

そうぼんやり考え、立ち止まっていると、

「ほら、行くわよ」

再び彼女が腕を持って、ぐいっつと後ろ向きに引っ張られた。

二人が目指す体育倉庫は、ちょうど舞台の反対側、体育館の正面入り口の脇にある。ちょうど二人から見えて、右手だ。まっすぐ行くためには、体育館を舞台から斜めに横断する形になる。

舞台からそろりと降りると、暗闇を一筋のライトを頼りに、二人で寄り添ったまま進んだ。

「だ、誰もいないわよね」

「誰もいないことを望みますよ」

「ねえ、どうする？ 生物以外のものが出てきたら」

急に耳元でそんなことを囁かれ、清人は首筋に冷たいものを感じる。

「今、そんなこと言わないでくださいよ。いやでも意識しちゃうじゃないですか」

「キメラさん、居ます？ お休み中、失礼します」

「ちよつと、ふざけないください」

「ふざけてないわ。せめてもの礼儀よ。部屋に入るときにノックするでしょ、それと同じことよ」

「まあ、いいですけど……うん？ 先輩、なんだかさつきから僕の後ろに下がり気味じゃないですか？」

「そんなわけないわよ、別に何かが出てきたら妻沢君を楯にして逃げようなんてしてないって」

「それ、心の中の思いがそのまま口から出てるでしょ」

「違うって、私はそんな薄情者じゃない、と後輩の手前、虚勢を張ってみる」

「……虚勢張ってどうするんですか」

物音がしたのは、そんな意味のない会話をしているときだった。どこかから落ちてきた物が、体育館の床の上で弾んだような、ボールが転がるような音である。

「え！」

清人たちはその場で硬直した。

弾んで、弾んで、次第に音の間隔が短くなり、やがて、止まる。

「な、なんででしょうか」

成実が清人の腕を強く掴んだまま恐る恐る光を向ける。

ライトが照らし出したのは、転がっているバレーボールだった。ころころと転がり、成実の数歩手前で止まる。

「いったい、どこから落ちてきたんでしょっか？」

「さあ？ 上の方から落ちてきたみたいだけど」

そう言っつて、成実はボールを拾おうとしたのか、掴んでいた手を離した。それは一瞬のことで、清人の脇をすり抜けた彼女は道しるべとなるべきライトを持ったまま、小走り気味で歩いて行ってしまふ。

「あ、ちよつと先輩……え？」

注意をしようと言いつけた時だった。

突然、右のわき腹に衝撃が走った。

それは何かが追突してきたような、強い衝撃である。

何が起こったのか把握する前に、目の前から、成実が居なくなる。

あれ、どうして？

その瞬間理解した。

清人の体は斜めになって体の重心を失い、倒れかけていたのだ。成実が消えたのではなく、自分が傾いたである。

しまった。

隙を衝かれた。

誰かにタツクルされたのだ、と思ったときには体が床の上から浮いていた。

そのまま、

成すすべもなく、

横様に、

吹っ飛ばされる

「うわっ！」

「妻沢君！」

成実の金切り声が響いたのが分かる。

宙に浮いたまま、清人はこのままでは地面に叩きつけられる、と瞬時に悟った。

「ぐあっ！」

しかし、宙に浮いている間での確に判断し、何かしらの対処でき

るかというと、無駄な努力だ。

落ちる、そう思った。

だが、

なんだ？

特に痛みは無い。

意外にも体が不時着したのは、柔らかにマットの上だった。

どうしてこんなところに、と思ったが、とにかく清人はその上に転がるように着地する。

体の無事の確認もそこそこに、すぐさま成実を探そうと顔を上げる。しかし、どうしても周囲が暗いせいで、方向が分からなくなっていた。

前はどっちだ？

ライトはどこだ？

頭もパニックになっている。

いったい、何なんだ？

何が起こってる！

「先輩！」

彼女が持っていたライトの明りを見つけた。

しかし、なぜかそれが、まるでパトカーのランプのように、宙でくるくると回転しているのが分かった。

そして、理解する。  
成実も何者かに体当たりをくらわされたのだ。

「きゃあー！」

悲鳴が宙を裂き、一瞬の間の後、ばふん、と清人の目の前に彼女が転がり込む。

彼女も上手くマットの上に落ちたらしい。

清人は体勢を整えると、不安定なマットの上ですぐさま立ち上がる。

すぐに成実と共に逃げなくてはいけない。

いったい何者なのかは分からないが、状況から、自分たちにぶつかってきた生き物は、今、突然外から入ってきたわけではないだろう。

そうになると、最初からここにいた、待ち構えていた可能性が高い。

となると、この暗闇にも目が慣れている《……………》。

まだ目が慣れきっていない清人と成実が抵抗するには、圧倒的に不利な状況であるだ。

ましてや、こちらは相手が何人いるのかも、いや、人間であるのかも分からない。

清人はそれだけのことを頭の中で瞬時に考えると、

「じつちです」

闇の中で必死に成実の手を掴んだ。

自分の体重をかけて、引き起こしながら、前方に目を向けた。回転していたライトが床の上で動きを止め、体育館の一点を照らしている。

それは小部屋に続くドア。

ここから一番近い避難場所はそこしかない。

間に合うか？

駆け出すと同時に、聞いたことも無いような不気味な鳴き声が体育館に響き渡る。

この世のものとは思えない、ていせい 獰猛な獣の啼声。

清人は肌が粟立つのを感じる。

冗談じゃない。

後ろを振り返る余裕もなく、清人と成実は走った。

ドアの前にたどり着き、必死にドアノブをまわす。

鍵はかかっていない。

開いた。

何も考えず、ドアの向こうに滑り込む。

成実の体が通り抜けたのを確認して、勢いよく扉を閉めた。

大丈夫だ。他の生き物は入ってきていない。

すると、ドアの向こうから、再び、生き物の咆哮がこだまする。

さっきよりも、近い！

「冗談だろ、冗談だろ！」

清人はそう叫ぶように繰り返しながら、ガタガタと震える手で鍵をかけようとする。

だが、気が動転しているせいか、扉がきちんと閉まりきっていないので、うまくかからない。

「くそ！」

毒づいて、ようやく回った。

しかし、まだこれで安心できない。

もしかすると、相手はこのドアを突き破ってくるかもしれない。

そう不安に思った途端、成実の声が背後から飛んできた。

「妻沢君、どいてー！」

振り向くと、成実が壁際に寄りかかっていたロッカーの背後に回りこみ、それを押し倒そうとしていた。

「うわっ！」

清人が扉の前から、間髪飛ばさずのく。

それと同時に、大きな物音で見事、倒れてきたロッカーが斜めに寄りかかるようにして入り口を塞いだ。

ずしりと部屋全体が揺れる。

きつと、これで簡単にはドアを開けることは出来ない。

清人は膝に手を突いて、身体を揺らして呼吸をする。



「はあ、はあ、はあ」

とりあえず、これで大丈夫だろうか。

そう思うと、全身から力という力が抜け、その場に腰砕けに尻餅をついた。

成実も自分が倒したロッカーを背にして、ずるずると座り込んでいる。彼女も肩を大きく上下させて、荒い呼吸をしていた。

「はあ、はあ、い、いったい、何なのよ」

「わ、分かり、ません。暗闇で、と、突然のことで」

「き、キメラ？」

「何も、分かりませんでしたよ」

「さっきの、はあ、鳴き声は、何？」

「さ、さあ？ 少なくとも、僕は聞いたことがありません」

「ちよつと、耳を澄ませて」

成実がそう言うので、清人も黙った。

すると、部屋が再び揺れた。

何者かが部屋の扉に体当たりを食らわせている！

「だ、大丈夫よね」

「分かりません」

清人は恐怖のあまり震えだす両足を拳で殴る。

なんとか立ち上がり、成実の横から倒したロッカーを扉側に押し

た。  
扉に何かがぶつかってくる振動がロッカーを通して、びりびりと伝わってくる。

「入ってくる気だ」

「どこかに行つてよ！」

「くそ、しつこい！」

「もう、だめよ。降参、降参だから！」

怯えた成実がそう叫んだ。

それは、逃げ場の無い窮地に立たされた極限状態における、人間の本能の懇願だった。

すると、なぜか、まるで成実の言葉を理解したかのように、扉への体当たりが終わった。

唐突に、何の前触れも無く。

体育館は再び、元の静けさを取り戻した。

「もう、来ない？」

「わかんないです。僕らが、出てくるのを、待ってるのかも」

「とりあえず、ここには入つて来れないみたいね」

「は、はい」

そう消えるような返事をしてから、清人と成実は押し黙った。

心臓が信じられない速度で、バクバクと耳元で鳴っている。

安心できない、そんな恐怖を抱えながら、呼吸を整えた。

どのくらい経つたのかは、判断できない。

だが、きつと体育館に入ってからそれほど、経っていないだろう。しかし、清人にはそれが二、三時間ほど過ぎてしまったように感じている。

「……」

辺りを見回して、そこがずいぶん狭い部室だと分かる。なんだか、今まで自分がどこに居るのかもわかっていない気がした。

ここは、バスケットボール部の部室。

この汗臭さは男子の部室だな。

でも、そんなことはどうでもいい。そう、どうでもいい。自分の生存を確かめるように、ぐっと胸元の服を掴む。

心臓よ、おさまれ。

脅威はこの場から立ち去った。

「もう、大丈夫。かな」

隣で息を潜め、ロッカーにもたれかかっていた成実が頭を起こし、聞いた。

「分かりません。外に、まだ何かいるかも」

「助け、呼ぼう」

「携帯電話持ってますか？」

ふるふると彼女が首を振ったのが分かる。

清人も持っていなかった。不覚にも、荷物は部室に置いてある。

「駄目ですね。僕も持ってないです」

「ライトも向こうに落としてきちゃったし」

「他にここから逃げ出す方法は？」

「あれは？」

成実が指差す先を見ると、正面の壁の右上に、換気用の小さな押し出し窓が見えた。しかし、それは人が通るのにはあまりに細すぎる。

「無理ですね」

「じゃあ、どうすのよ」

「ここで、夜を明かして、助けを待つしか」

「夜を明かして？」

「ええ、明日は休みですけど、運動部は練習に来るでしょうし。となると、さつき自分たちを襲ってきたものがずっとここに留まっているというのは考えにくいです」

「なんでそんなことが分かるのよ。ほんとにキメラだったら、体育館に入ってきた生徒を片っ端から食い殺しちゃうかもよ」

「そんな馬鹿な。そんなもの、この世にいません。きつとさっきのも、人間の仕業ですよ」

「そう言ってる割に、声が震えているわよ」

「先輩こそ、震えてます」

「……」

「……」

二人でそのまま言葉を無くした。

忍び寄ってくる恐怖から意識を逸らしたかったのかもしれない。

清人はたまたま腕にしていた暗闇で光る夜光処理がされた腕時計の針を見た。

ここに来てから、まだ、十五分しか過ぎていなかった。長い夜になりそうだな。

溜息を吐く。

## 第九章 閉ざされて、二人 <1>

成実は手探りで入り口の付近の壁を探っていた。

彼女の考えが正しければ、大抵、部屋の明りのスイッチはその辺りにあることが多い。

すると、案の定、目線の高さあたりで、指先に違うプラスチックの感触がした。よくある片切スイッチである。

押してみた。かちり。

すると、小さな部屋に蛍光灯の明りが灯る。少々寿命が近いのか、幾分光が鈍く明滅しているように見えた。

だが、そのおかげで部屋の細部まで見える。

「明かりを点けるくらい、構わないわよね」

成実は腰を下ろしながら、額の汗を拭う。

「ええ、たぶん。外からは分からないでしょうし」

清人は、部屋の中央に置かれた横長のベンチに腰を下ろしていた。その周囲を見ると、部員の誰かが使っていたものなのか、丸められたタオルが床に無造作に落ちていたり、ボールやバスケットシューズも転がっている。他にもスプレー缶だの、くしゃくしゃのテスト用紙がちらほら見え、全体的に小汚い。もとい、かなり汚い。

右側の壁にはさらにロッカーがいくつも並んでおり、もれなく殴られているのか、ぼこぼこ月面クレーターよろしくへこんでいる。典型的な男子の部室だ。

「ねえ、本当に逃げられない？」

先ほどから、ようやく落ち着きを取り戻した声で、清人に話しかける。そろそろ、本気でこの状況を打開するための案を練らなくてはならない。

「まず、ロッカーをどけて、その扉から出るといふのは危険です」

清人の冷静な声が、作戦を一つ潰した。

「何がいるのか分からないし」

これには、成実も頷く。

「となると、脱出するには他の出口が必要ですが」

しかし、それは先ほどの検証で判明していることだった。部屋には窓があるが、他には何もなく、完全な密室だった。

「それは、ない。ということ……」

「ということとは？」

「やはり、ここで朝が来るのを待つしか」

清人はそこで諦め、成実は思い付きを言う。

「反対の壁に穴を開けるっていうのは？　そこからなら外に面しているから出られるわ」

「どうやってあけるんですか？」

「ほら、スプーンなんかで掘ってさ。よくあるじゃない」

成実の頭には昔聞いた話や映画が反芻されていた。映画では確か、小さなハンマーを使っていただろうか。囚人がそれで穴を掘り、脱獄するという話だった。

「気の長い話ですね。ここに何年いるつもりですか？」

「ぐ、ぐう」

「やはり、ここで待ちましょう」

「ああ、無性にダイナマイトが欲しくなることってあるのね」

成実は天井を仰ぎ見て、そんな物騒なことを言う。  
しかし、

「そんなものがあつたとしても、こんな逃げ場のない場所で使えば、脱出経路の確保と同時に僕らは絶命です」

清人の容赦のない指摘に、彼女は肩を落とした。がっくりと言葉を吐く。

「結局、待つよね」

「それが一番安全で、確実な方法だと思います」

「それしかない？」

「……そうですね。試しに何か武器を持って外にでてみますか？  
向こうに何がいるか分からない状況では、リスクが高いと思われ  
ますが」

そう言うと、成実は急に力を失ったように、顔を伏せた。長い髪が、さらりとこぼれて、彼女の表情を影で隠す。

清人ははっと気づく。

もしかすると、彼女が求めているのは、清人の論理的な判断に基づいた確な返答ではなく、自身の取るに足らない駄案を笑い飛ばすことだったのかもしれないと思ったのだ。

それによって、彼女が内に抱える不安を遠ざけて欲しかったのかもしれない、と。

「あの、先輩。心配ないですって。とりあえず、ここにいれば安全ですから」

「……ごめんね」

彼女から出た思わぬ謝罪に清人は耳を疑う。

「え？」

「まさかこんなことになるなんて、少しも考えてなかった」

清人からはそう言っている彼女の表情が見えない。

「それは、僕もです。本当に何かがここにいるなんて、甘く考えました」

「ううん、私の責任よ。だって部長だもの。私の判断で、部員を、妻沢君を危険な目に合わせた」

それはいつも勢いのある彼女らしくない、弱弱しく儂げな少女の声だった。本気で反省しているようで、俯いたまま膝を抱き、身を縮ませている。

そして、

「ジャーナリストだ、真実を見つけるんだ、なんて言って、馬鹿みたいだ、私」



自己嫌悪だ。

「そ、そんなこと」

清人は彼女にどんな慰めの言葉をかければいいのか、言葉を探していた。普段、こんな状況に直面することがないので、いったいどう言えばいいのか分からない。

こんなとき、女性はどんなことを言われると励まされるのだろうか。

まったくそう思うと自分の人生経験は薄っぺらい。

「あ、そう言えば」

あることを思い出す。

「何？」

成実が顔を上げる。

「いえ、そういえば、先輩の前に聞こうと思ってたんですけど。先輩の、お父さんのことです」

「父さん？」

「確か、ジャーナリスト、なんですよね」

訊くと、彼女は静かにこくりと頷く。

「先輩がジャーナリストに憧れているのも、その影響があるからなんですよね」

「まあ、そうね」

「もしよかったら、そのことを聞かせてくれませんか？」

すると、彼女は面喰らったように、瞬きをして清人を見た。

「今、この状況で？」

「こんなときだからこそ、普段聞けないことを聞きたいんです」

清人は圧力のない穏やかな声でそう頼んだ。

「変な人。私から話を聞いて、誰にも言えない秘密とか聞き出して、それをネタに揺る気ですよ。サイテー」

「先輩は汚職疑惑のある政治家か何かですか？ そんなことしませんって。へんなことに疑り深いですね」

「ふふ、冗談だってば。いいよ。聞かせたげる」

成実は立ち上がり、制服のスカートをはたくと、ベンチまで歩いてきて、清人の隣に座った。僅かに、ベンチが軋む。

ふわり、と揺れた髪から成実の香りが清人に届いた。

## 第九章 閉ざされて、二人 <2>

「私のお父さんはね、昔から、家にいたことがあまり無いんだ」

「ジャーナリストだから、ですか？」

「そ、お父さんの場合、ジャーナリストの中でも、戦争とか紛争地帯に出かけていって、その状況をレポートや記事を書く仕事してるんだ。いわゆる、戦争ジャーナリストっていう区分になるのかな」

「せ、戦争地帯に行ってるんですか？」

清人は驚いて素っ頓狂な声を出す。

「そうよ、嘘偽りの無い、生きるか死ぬかの本物の人と人との戦い、そんな場所で活動しているの」

「それは……すごいですね」

清人は感想を言おうとして、言葉が迷子になり、そんなことを言っってしまった。誰にでも言える、小学生レベルの感想である。

「すごい？」

成実も顔をしかめる。

「いえ、すごいと言っていいのか、とにかく、日本にいる僕には、想像もつかないことで、とても、立派なことだと思います」

彼女はそれを聞いて、納得したように頷く。

「立派、か。確かに誰でも出来ることじゃないわよね。安全地帯にいるのではなく、自分から望んでそんな場所に行くのだから」

「当然、危険な目にも会うわけですよね」

「そりやもう。小さい頃だったから私はよく覚えてないけど、母に聞かされたことには、銃を突きつけられたりしたこと何度もあったらしいわよ。撃ち殺されそうになったって。ミサイルが頭をかすめて飛んで行ったこともあるって言ってたかな」

そこで清人は成実の言葉のニュアンスに引っかかりを覚える。

小さい頃。

母から聞かされた。

まるで、今は父親が存在していないかのような。

「あの、先輩。も、もしかして」

すると、彼女は清人の反応を見越していたように、こつ喋りだした。

「お父さんはね、もう十年以上も家に戻ってきてないの」

それを聞いて、二の句を継げなくなる。自分は質問で、聞くべきではない彼女の暗い記憶を掘り起こさせてしまったのか、と後悔した。

「私もどういった原因か知らないけどね。ある紛争地帯で、仕事の中に、武装集団の衝突に巻き込まれたんだって。街の中だったらしくて、かなり激しかったらしいの。爆弾なんかも至るところで爆発して、銃声が響いて、建物もばらっぱらの瓦礫になってらしくさ、人たくさん死んで、それで、そこでお父さんは行方不明になった」

「……」

「遺体は見つかってないから、今でも死んでるのか、生きてるのか分からない。でも、もう十年以上も連絡がないんだし、私も分かっ

てる。そういう希望はないって」

「先輩」

「お父さんの記憶なんてね、大してないんだ。だって、あんまり会わなかったんだもの。私、いつもそれが悔しくて、今思うとね、どちらかと言えば、お父さんのこと嫌いだったかもしれない」

成実はまるでそのことを嫌悪するように、膝に置いた手でスカートの端を強く掴んだ。言葉を続ける。

「でも、だから、だからこそ私決めたの。お父さんがどんな生き方をしたのか、知りたいって」

「え？」

「どんな信念でもって、戦場に赴いてジャーナリストとなったのか、どんなものを見て、どんなことを思って生きていたのか。知らないことが多すぎるから、知りたい。それを知るためにもジャーナリストを目指すって」

「そう、だったんですか」

清人はそのときになって自分があまりにも彼女のことには無知だったかということを感じ知らせた。彼女が目指しているものの背後に、そんな碇のような、父の記憶があることなど、知る由も無かった。

清人が彼女に抱いていたイメージとは違う答えである。

単純に、子が親に抱いている憧れとは違う。親がパイロットだからと、短絡的にパイロットを夢見る少年とは向かう方向を異にしている、と思った。

それは彼女と父親という希薄な人間関係の上に生まれた、無知の上に存在する一種の使命感に基づき、成実は自らの道を選択しているのだ。

戦争ジャーナリストの父のことを知りたい。その先に、必ずしも喜びが待ち受けているとは限らないだろう。きっと辛い現実が待っていたり、挫折しそうな壁にぶち当たることもあるに違いない。

彼女だつてそのことを承知しているだろう。

それでも、それを選ぼうと、いや選んでいる。

自分から進んで、父親のことを知りたい、と。

果たして、自分が彼女の立場なら、必ずしもそうするだろうか。分からない。

そんな事実など知らなくていい、そう言って逃げるかもしれない。

「全然知らなかった、です」

「そりゃ、全然話してなかったからね」

「先輩も、立派ですね」

それは清人から出た素直な気持ちだった。

「ありゃ、これはどういう風の吹き回し？ 妻沢君が私のことを褒めるなんて」

成実は気味が悪そうに目を細めて清人を見る。こころなしか、座る距離を離れたようだ。

「本当にそう思って言ってるんですよ。他意はありません」

それだけ言って、清人は眉間の辺りを人差し指で掻き、少々恥ずかしそうに、

「先輩にも尊敬できるところがあるんですね」

と言った。

「妻沢君にそう言ってもらえる日が来るなんて、光栄至極だわ」

ふさけているのか、成実は感情の籠もらない棒読み口調だ。

「茶化さないでください。ほんとに思ってるんです」

清人はむつと口を突き出す。

「ハハハ、だってそんなことを大真面目に言われたってさ……」

すると、成実の言葉が不自然に途中で終わり、直後、「ぐうっ」という得体の知れない第三者の唸りが聞こえた。身の危険を感じ、慌てて清人は辺りを見回す。

しかし、誰かが部屋に入ってきた様子はない。加えて、その音は自分のすぐ近くから聞こえてきたようだった。

「あれ、先輩、今聞きました？」

「き、聞いたわよ」

彼女を見ると、なぜか恥ずかしそうに赤面し、前かがみになってお腹を押さえている。

その様子から、清人、然さもありなんと理解する。

「……稲葉、先輩」

「何よ。失礼なことを言ったら、ピンタだからね」

彼女は眉間に皺を寄せ、近づいたらひっかくと言わんばかりに握った拳で猫のように爪を立ててみせる。

「お腹、空いてるんですか？」

「悪い？ だって、晩御飯食べてないし、そりやお腹だって減るわよ」

「そうですね。言われてみれば確かに僕もお腹減ってます」

「食べられるもの、持ってない？」

腹の虫の音を聞かれたのがショックなのか、視線を泳がせたまま、彼女は訊いてきた。

「残念ながら、こんな場所に籠城するだなんて計算してなかったの  
で」

清人はそう言いながらも、一応ポケットをまさぐってみる。すると、思いがけないことに指先に何かが触れる。

取り出してみる。

「こんなものがあります」

「何？」

「板ガムです、クールミント味」

「……飢えを満たすにはこの上なく不向きな食べ物ね。飲み込むためのものではないもの」

「まあ、そうですが、ないよりはマシかと」

清人は九枚入りのガムを公平に二人で四枚と半分に分ける。成実  
はしばし、手渡されたガムを佻しそうに見て、

「涙ぐましいわね。親が見たら泣くわよ」



とすすり泣く振りをした。

「そうですね。僕も晩御飯に板ガムなんて食べるのは初めてです」  
「きつと今度から板ガムを食べるたびに今日のことを思い出したりするのかなあ。あのときはひもじかったなあって」

成実はガムを一気に二枚口に入れながらしみじみと言う。

「極力回想したくない思い出ですね」

「大丈夫、時がくれば笑い話になるわ。時間は、薬だから」

「それはまた含蓄のある言葉です」

清人はガムの包み紙を開ける。

## 第九章 閉ざされて、二人 <3>

そんな満腹感とは程遠い食事が終わると、二人はそそくさと寢床の確保を始めた。

どうせ安全な朝を待つには眠ってしまうのが、一番有効な時間の潰し方だと考えたのである。

しかし、地べたにそのまま眠るというのはあまりに寢心地が悪い。ベッドの感触とは程遠い部室の床は、ひんやりと冷たく、硬い上に、埃っぽい。当然、部室の中央にあるベンチが取り合いになるだろうと成実は察しをつけていた。

「どちらがベンチの上で寝るか、じゃんけんで勝負をつけるわよ」

成実としてはどうしても負けたくはなかったので、やる気まんまんに腕を振り回しながら、清人に拳を突き出す。

しかし、清人はというと、予想に反して敵意をむき出しにすることもなく、

「稲葉先輩が寝たらいいんじゃないですか」

とあっけらかんとした顔で提案した。

これにはさすがに助走をしていてつんのめった気分になる。

「え、いいの？」

「床で眠るのは嫌なんですよね？」

「そりゃあ、ね。汚いし」

清人は床にたまったゴミを一瞥してから頷いた。

「だったら、どうぞ。ベンチを使ってください。女性をそんな汚い場所に寝かせるわけにはいきませんから」

その言葉に成実は目を丸くする。普段、成実に対して敵対するよ  
うな態度をよくとっている彼が、そんなことを言い出すとは思えな  
かったのだ。

「や、やけに優しいわね」

「そうですか？ 僕は常識的に考えてそう判断したんですが」  
「本当に？」

成実は半信半疑だ。

「本当ですよ。別にこんなことで先輩に貸しを作るうだなんてこと  
思ってませんから、ご心配なく」

「むう、解釈の仕方によっては嫌味な言い方ね」

「そう捉えられていたとしたら、遺憾なことです」

「本当にいいのね？」

「何度も確認しなくてもいいですって。僕は床で寝ますから」

そう言っつて、清人はロッカーの方へ背を向ける。中に使えそうな  
タオルでもないか探しているのだらう。硬い地面のクッション性を  
少しでも高めるために床に敷こうとしているのだ。

そんな彼の背中を見ながら、成実は目を細め柔らかな表情になる。

稀なことではあるが、成実にはこうして清人が時折見せてくれる  
優しさがうれしかったのだ。それは、いつも言い合いなどで、お互  
いギスギスしていることも多いが、ふとしたときに垣間見える、彼  
という人間の魅力とでも言えばいいだろうか。

まだ出会ってから一ヶ月ほどの関係ではあるものの、成実は、彼

を部員として選んだ自分の目に狂いはなかったと満足していた。

彼がいてよかったと、思えるのである。

身を屈めてロッカーの中を探る彼を見ながら、成実はそっと、

「ありがとう」

と感謝をつぶやいた。

「じゃあ、明りを消しますよ」

清人がそう訊いて、成実は掛け布団代わりのバスタオルをずり落ちないように身体に引き寄せる。

「うん。オッケー」

了承すると、すぐさま部屋の心細い蛍光灯の明りが消えた。清人が歩いて床に寝転がる音が聞こえ、それから、すぐに静寂が辺りを占領した。

成実たちは部のマネージャーが洗濯したのであろう、清潔なタオルを枕にしている。ベンチは鉄製であるが、意外にも、寝心地は悪くない。

これならすぐに眠れるかと成実は思ったが、やはり、先ほどの闇から襲撃を思い出し、すぐには寝付けなかった。幾度か寝返りを打ちながら体勢を変える。

隣からは清人が規則的な呼吸音が聞こえていた。

まさか、もう眠ってしまったのだろうか。

よほど疲れているのか、それでも、単に眠った振りなのか。

ベンチの上から届く距離なので、試しに足で蹴ってみようかとも思ったが、寢床を譲ってもらっている身分であるので、本当に眠っていたら起こすのは申し訳ない。

そう言えば、あれ以来、扉の向こうからは何者かが押ししたり叩いたりする音は一切止んでいる。もしかすると、もう向こう側には誰もいなくて、安全なのかもしれない。

しかし、いったいあれは何だったのだろうか。

暗闇の中で成実や清人を突き飛ばした生き物である。あまりに突然のことで、正体は全く掴めなかった。

闇に響いたあの咆哮を思い出す。

本当にキメラだったのだろうか。

そう思うと、今も無事である自分たちが信じられない。

清人の言うとおりあれが人間の仕業だったと仮定してみる。

だが、どちらにしても、たった壁一枚を隔てた先に自分たちを襲った人間がいるかと思うと、冷静な気持ちではいられなかった。

その人物が、今回の事件全てを起こしたのだろうか。

そんな人間がいるとすれば、やはり普通の人間ではないと、成実は思う。

自分たちを、殺すつもりだったのかもしれない。

怖い。

そう思うと、

怖い。

無意識にベンチの上で足を折り曲げて小さくなる。自分はいつたい何と向かい合っているのか。

もしかすると、想像以上に巨大な敵を相手にしているのかもしれない。

その敵の前では自分はまだあまりに無力で、片手でいともたやすく捻り潰される。

そうだとしたら。

お父さん。

お父さんは、こんな時、どうする？

母から手渡されて、私は受話器を握る。  
待ちきれない思いで、先ほどから飛び跳ねていたのだ。

「お父さん！ お父さん！」

「おう、成実か。聞くまでもなく元気そうだな」

父の声は久しぶりに聞く娘の声に喜ぶと同時に少々驚いているようだった。

「クマ、クマのぬいぐるみ、家に来たよ」

私は受話器を持っている手とは反対の手で父から送られてきたぬいぐるみを抱き寄せていた。ふさふさとした毛並みが頬をくすぐっている。

「あのなあ、手紙に書いてあっただろ。それはただのクマのぬいぐるみじゃないって。テディベアって名前があるんだ。テ、ディ、ベ、ア。ほら、言ってみな」

「て、てでい、べあ」

私が拙つたなくもそう発音すると父は満足そうに快活な声で笑った。

「そうだ。物の本当の名前を知っておくことは重要だぞ。でないとな大人になって、下手に知ったかぶりして、恥をかくことになるからな。なにより、物事の本質を理解するには、まず正しい名前を理解しておく必要がある」

「うっ、むずかしい話はいや」

「ハハハ、まあいい。テディベアは気に入ってくれたようだしな」

「うん、毎日遊んでるの。あのね、昨日ね、凜ちゃんが来てね。それでね、家に来てね、それでね、遊んでね、それから、えーと、遊んだ」

「我が娘よ。よく分かったぞ。友達と遊んだのか、楽しかったのか？」

「うっん、そんなに」

私は子供ならではの正直な感想を言う。

「ハッハ、そんなに、だったか。素直でよろしい」

こうして、いつも私と父は、会えない時間を埋め合わせるための長い時間を話した。

母はその様子を椅子に座って見守りながら、終始微笑んでいる。そんな温かな言葉のやり取りが受話器を通して延々と続く。それが、私がいつも体験していた家族が一つになる瞬間だった。

「それでね……それでね、あのね、凜ちゃんだからね……」

時計の針が十時を回ると、話しながら私は大抵、まぶたが落ちそうになるのを感じ始める。知らず知らずの内に、うつらうつらと舟をこぎ始める。

いつもそうになると、母が背中を叩いてくれた。

「ほら、もうお父さんにお休みなさいを言いなさい」

幼い私にはもう、眠る時間なのだ。

「うん。お父さん、お休みなさい」

「ああ、お休み。また明日電話するよ」

「あ、待って！」

私は大事なことを思い出し、電話を切ろうとした父を呼び止める。

「どうした？」



「あのね、今度は、いつ帰ってくれる？」

父が、困ったようにうんとうんとうと唸る声。

「今度か？ ああ、そうだなあ。年明け、くらいかな」

「本当？」

「ああ、本当だよ。そのくらいにはそっちにも帰れる」

それを聞いた私は安心する。きっと今度こそは本当なのだろう。

「うん。それじゃあね。お休み」

「ああ、お休み」

最後の挨拶が終わり、母が二、三話話し、受話器を戻す。

「お父さん、今度帰ってくるって」

「そう、良かったわね」

「うん」

しかし、父はそう言っていていつも遅れて帰ってくるのが常だった。どんなに念を押して聞いても、おおよそ予告というものが無意味なほどに、帰ってくる時期がバラバラだった。

幼い私は嘘をつかれた、と思っていた。

また、嘘をつかれた。

お父さんは嘘つきな生き物なのだ。

私のことが嫌いなのもしれないと、つかの間ではあるが、思ったことさえある。

私は私なりに傷ついていたのだ。

そのせいで喧嘩をしたこともある。

あのころは、それが父の仕事上仕方ないことだとは理解できていなかったのだから。

しかし、真実を追い求める立場の人間にはあるまじき行為だよなあ。

今考えると、そう思う。

第九章 閉ざされて、二人 <3> (後書き)

この章で事件編が終わり、次章から真相解明編となります。

## 第十章 牙を持つ者 <1>

それは目覚める瞬間だった。

成実の脳内で、唐突にパズルがかみ合うような感覚があった。

まるで指先が冷たい川の水面に触れたように、びりりとした刹那の刺激が脳内を伝播し、駆け巡る。

それは不可解の蒼然とした森の先を貫き、光の中で彩り鮮やかな空で弾け、イコールを結ぶ。

事件解明の瞬間だった。

「分かった！」

そう叫んで、成実は飛び起きた。

「分かったわ」

朝の陽光が差し込む雑然とした部屋のベンチから肌にかかったバスタオルを跳ね飛ばすと、靴を履く前に隣で眠っている清人の寝顔を覗きこんだ。

やはり、硬い床の上では安眠できなかったのか、何度も寝返りを打ったようで、髪の毛には埃の塊がいくつも引っ付いている。

しかし、成実はそんな彼を見るやいなや情け容赦なく肩を揺さぶった。

「起きて、ほら、起きなさい！」

「……うん？」

「大変なことが分かったわ！ 眠ってる場合じゃない！」  
「な、何事ですか？」

彼はそう言いながら、成実の顔に焦点が合っていないのか、中途半端に目を開いて成実の後ろの虚空を眺めている。

「いいから、起きて話を聞く」

さらに強く揺すぶられ、半ば降参するように清人は上半身を起した。脇に置いてあった眼鏡をかけ、眠たそうに大あくびをした。

「のんきに欠伸なんて出来るのも今のうちによ。いい？ 聞いて驚きなさい」

「だから、何のことですか？」

「事件の被害者の記憶喪失の謎が解けたのよ」

再び欠伸をしようと大きく開けた清人の口が、そのまま状態で硬直した。

「は、はあ？」

「だから、どうして皆が記憶を無くしていたのか分かったの！」

「ほ、本当ですか？」

これには清人も欠伸が吹き飛んでしまうほど驚いた。

「ええ、おそらくこの考えで間違いないはずよ」

「と、いうと？」

「私達はね、根本的な部分で道を間違えていたのよ」

成実は顔を近づけると、人差し指を立て、自信満々にそう言った。

「根本的ですか……ということは、どういう意味です?」

「いい? 誰かの記憶を消す方法なんて、清人君の言うとおり、やっぱり存在しなかったのよ」

「そ、そうですか。ようやく理解してもらえてうれしいです」

「ということは、必然的に答えは見えてるわね」

「……?」

「本当は、誰一人として、記憶を失っていなかった《……》のよ」

「え、え? それ、失って、いなかったって」

あまりに突拍子も無い話に清人は上手く反応が出来なかった。成実はさらに自分の推理を続ける。

「そう、全員、嘘をついていたのよ。それならば、簡単に全ての説明がつく」

清人は目を覚まさせるように自分の両手で頬を叩いた。そして、ぶるぶると頭を振る。

「ちよ、ちよっと待ってください。もし、もし先輩の言っていることが本当なら、三件の被害者は、沢口さん、藤咲さん、篠田さんの三人は全員、共謀していったってことですか?」

「そうよ。全ては、全員で協力して、いくつもの狂言失踪事件を作り上げるために行っていたのよ」

「本当に、そんなことが?」

清人は半信半疑だった。

それは彼女の考えが、被害者を疑うという、今まで向かってきた方向とは全く別の逆だったからである。あまりにも極端に聞こえて、

すぐには思考の転換が出来なかった。

「だってそれ以外、この事件の全て説明できるものなんて無いわよ。とても複雑怪奇に思えて、ネタが判明すれば、これほど簡単なトリックはないわ。記憶を失った振りをして、一日姿を消し、私達を翻弄すればいいもの」

「……」

「私達がその話を信じ、疑われなければ、完璧なトリックよ。自分たちの都合の悪いことは全て忘れた、分からない、そう言えばいいんだし。ましてや、私達は彼女たちを謎の事件に巻き込まれた不幸な被害者として接しているわけだから、なおさら先入観に陥りやすい」

「本当にあの三人がですか？　いまいち、信じられません」

清人はこの数日間に接してきた彼らのことを思い浮かべる。とても、他人を騙すような狡猾な人間には見えなかった。

しかし、彼女は自身の主張を曲げる気はないようで、自信に満ちた顔で胸を張る。

「そう？　私にはこれ以外の答えなんてもう思いつかないけれど」

「それじゃ、彼女たちがキメラの噂も流していたってことですか？」

「ま、そのグループが、ね」

グループ、成実は微妙にニュアンスの違う、含みのある言い方をする。そのことが清人には気になったが、質問を続けた。

「昨日の夜、僕達を襲ったのもその人たち？」

「きつとそうよ。これも清人君の言うとおり、人間の仕業だと思っただけ。暗闇だったから何者か分からなかったけれど、あの奇妙な鳴き

声だつて、今時ちよつとパソコンが使えれば編集できてしまうものでしょう?」

「では、最初から僕達を襲うのが狙いだったんでしょか」

「おそらくね。きつと、麻子に情報を流したのもその人たちよ。私達は麻子からの情報を頼りに今まで事件を追ってきた経緯があるから、それをまんまと利用されたわけね」

してやられたわ、と彼女は悔しそうに唇を噛む。

「きつと、彼女たちは私達を驚かして、キメラの存在を信じ込ませたかつたのよ。そして、事件の調査から手を引かせる」

「……なるほど」

「あの人たちがそんなことをするとは思えないけど、もし邪魔になつて殺すつもりだったなら、わざわざ体育館に連れてくる必要はないし、キメラの鳴き声なんて準備して聞かせる必要もない」

「確かに、その推理を聞くと全て先輩の言つとおりかもしれせん」

清人の不服そうな言葉に成実は眉を動かす。

「うん? なにやら釈然としない言い方ね」

「僕が知りたいのは、なぜ、です。先輩の話が正しいとして、どうして彼女たちはこんなことをしたのか。ただの愉快犯にしては手が込みすぎている気がします」

「あら、奇遇ね。私もその決め手なる動機を探してたの」

「それが分からないと、僕は納得できません」

彼はそう宣言して断固とした意思を見せる。ただでさえ、目的の分からない事件なのだ。成実の言っていることが正しいとしてもその不可解さの解明には至っていない。つまり、まだ事件の核が見えていないに等しいというわけだ。



すると、彼女は座っていたベンチから立ち上がり、悠長にあくびをする。

「まあ、私には少しは心当たりがあるんだけど」

「は？ 何ですか？」

「これも、私の推理だけだね。三つの事件の被害者である、沢口君、藤咲さん、篠田さんの三人には、特にそれほど強いつながりがあるわけじゃない。性別も、年齢も、クラスも、所属している部活も違う。これは前に聞いたことで間違いないと思うわ。その上で、彼女たち三人を共犯とするにはどうしても不自然な考えだと思うの」

「先輩が言おうとしていること、なんとなく分かりました」

「あら、察しのいいこと」

「つまり、この事件には三人とつながりがあり、彼らを束ねている黒幕がいるって言いたいんですね」

ヒュー、成実は口笛を吹いて、手を叩く。

「その通り！ 妻沢君、冴えてる！」

それがあまりにも子供っぽくて、清人はむっとする。

「なんだか馬鹿にされている気がして否めません」

「まあ、そんなことはどうでもいいわ。ともかくこんな場所はさっさと出ましよう。さすがにもう誰もいないと思うから」

「あ、はい。で、それから？」

「そうね、まずは腹ごしらえをして、残りの謎解きにかかりましよう。腹が減っては戦は出来なし、ね」

## 第十章 牙を持つ者 <2>

成実の言うとおりに、扉に倒していたロッカーを持ち上げ、ゆっくりと扉を開けると、ものの見事体育館には誰も居なかった。

人の気配は無く、がらんとしている。

昨日の騒動の跡を表すものと言えば、足元に転がっているライトぐらいで、その他には何も無い。

例えば、壁に得体の知れない獣の爪あとが残っていることもなければ、獰猛な歯によって噛み砕かれた哀れな獲物の亡骸が横たわっていることも無い。

いつもどおりの体育館の風景がそこにはあった。

「考えてみれば、変だったわよね」

部室のドアを振り返りながら成実は言う。

「何がです?」

「この部屋の鍵が開いていたこと。普通、練習が終われば、鍵は閉まってるはずでしょ」

「あ、ああ、言われてみれば」

「おそらく、最初から私達が逃げ込むように、開けてあったのかもしれないわね。ここだけでなく、全ての部屋が」

「なるほど……ああ! そういえば」

すると、清人はあることを思い出し、後ろを振り返る。そして、昨夜体当たりされ、転がった場所まで歩いていった。二、三度片足で床を踏み、その辺りを示す。

「ここ、確かマットがおいてありました。僕らがその上に倒れこんだんです。どうして、こんな場所にマットが、って変に思った記憶があります」

「そうよねえ、授業以外でほとんど使うこともないし。まさか、私達が倒れて怪我をしないように考えてたのかしら」

「そうだとしたら、気味が悪いくらい配慮が行き届いてますね」

「まあ、最初から私達を傷つけるつもりはなかった、ってわけね。とにかくここを出るわよ。もうお腹が空いて倒れそうだもん」

成実は心底不快そうに、腹部をさする。それはもう空腹を通り越して、気持ちが悪いくらい領域まで達していた。

腹の虫も限界なのか、もはや鳴く元気すらないようだ。

さらに慣れないところで眠ったせいか成実の体はだるく、歩くのにもかなりの体力を消耗している気がした。

そんな彼女とは対照的に清人は正面玄関まで歩き、内側の鍵を開け、外の澄んだ空気を吸う。雲は無く、いい天気である。

今日は六月を目前に控えた土曜日だ。

「稲葉先輩。行きますよ」

振り返り、彼女に声をかけると、なぜか彼女は玄関の辺りで立ち止まり、体育館の内部に目を向けている。

「先輩、どうしたんですか？」

「……うつん、なんだか変な感じがしたの。前にもこれと同じ感覚を味わったような」

「変な感じ？」

すると、彼女は急に何か気づいたのか、はっと呼吸を止め、すぐに考えごとをするように目を細めた。

「行きましょう」

すると、何を決断したのか、彼女は振り返るのを止めると、迷いの無く先に歩き出す。

「え？ は、はい」

訳がわからないまま、腕をつかまれ、清人は言われるがままに体育館から離れた。

それから一度部室に帰り、荷物を持つと、まだ開けられたばかりの校門から、変だと思われないよう、目立たないように外へ出た。

どこで朝食を摂るか話し合った結果、一番学校から近距離である24時間経営の牛丼屋に向かうことにした。

通勤途中のサラリーマンばかりがいる店内で、高校生の制服を着た二人はかなり浮いていたが、とにかく店内に入り、注文を済ませ、席についた。

その間に清人は一度トイレに行っていたのだが、席に戻ってみると、成実が携帯電話を覗き込み、なにやら熱心にメールを打っている。

「誰にメールしてるんですか？」

彼女の様子が気になって訊いた。

すると、意外な名前が彼女の口から出る。

「ああ、檜山さんよ」

「え、どうしてです？」

「彼女にも、私が考えた事件の真相を話しておきたくってね。ほら、彼女かなりこの事件のこと気にしてるみたいだったじゃない」

「そう言われてみればそうでしたかね？」

確かに、三件目の事件が起きたとき、話を聞いている彼女の目は真剣だったようだった。やはり、親友が巻き込まれた事件ということ、三人目も他人事ではないと思っていたのだろう。

「連絡したら、来るってさ。話を聞かせて欲しいって」

「はあ、分かりました」

「さあ、それじゃ腹ごしらえね。妻沢君、その紅シヨウガ取ってくれる？」

彼女は清人の側にあつた小さくパック詰めされた紅シヨウガが入っている容器を指差した。牛井に入れるつもりらしい。

「はい、どうぞ」

「なんで一つなのよ」

てつきり一つで充分だと思っていた清人は思わぬ抗議の言葉にきよとんとする。

「もう一つ必要ですか？」

「少なくとも十個は寄越しなさい」

「十個も、ですか？」

いったいどうするつもりなのやら、と疑問に思いながらも、手渡

すと、彼女はためらいなく全てを万遍なく牛井の上に振りかけていった。

呆れている清人の前で成実は満足そうに薄紅色に染まったどんぶりを眺めて陶然としている。

「おいしそうね」

「僕から見れば、もはやそれは牛井ではありません」

「あらそう？ 私にはこれくらいが普通だけど」

「なんだか、猛烈に不健康に見えます。そんなにかけて食べれるんですか？ まあ人それぞれ好みはあると思いますが、僕は見ているだけで食欲が減退します」

「失礼ね、私の好みに文句つけるわけ？ これがおいしいのよ」

そう言って、彼女は割り箸を割り、至福の表情で口に運び始めた。しばらくの間、清人はそんな彼女に目が釘付けだったが、本来の目的を思い出し、自らの胃を満たすことだけに集中することにした。身体にエネルギーを供給しなければ、思考すらストップしてしまいかねない。

牛井を食べ終わると、二人は今度はお茶を飲み干した。清人も成実も昨晩から水分を摂っていなかったので、喉を鳴らして、三杯も飲んだ。

そして、紅シヨウガ井（清人が勝手に命名）を平らげた成実は背もたれに体重をかけ、大きく背伸びをしている。

「それで、これからどうします？」

そろそろ行動を起こさなくてはならない。

「決まってるわ、謎が全て解決したわけではないの。調査を続行よ」  
「続行ですか……分かりました、付き合いますよ。それで、今度は

「何をするつもりです？」

正直、清人は一度自宅に帰りたいかったのだが、せつかくここまで謎が解けかけているのに、変な仕切りなおしになるのも嫌だった。逡巡して、成実に従う。

「図書館に行くわ。調べたいことがあるの」

「調べたいことですか？」

「いったい、今になって何を知りたいというのだろう。清人は首を捻った。」

## 第十章 牙を持つ者 <3> (前書き)

作者のヒロユキです。

この作品は現在連載途中ですが、すでに最後まで内容を書き終えていますので、これから微調整をしながら、一日一回ではなく、間隔を早めて二回ずつ更新していきたいと思えます。



## 第十章 牙を持つ者 <3>

そして、朝食を済ませた二人は再び学校の校門をくぐった。校舎の大時計は九時を回ったところで、校内には部活の練習に来た生徒たちがちらほら見受けられる。

成実が清人を先導し、事務室に向かうと、図書室の鍵を貸してもらえるように頼んだ。

「一応今日は、管理者の先生が来られないから、休みの日なんだからね。たぶん、君ぐらいしか使わないだろうから、鍵の管理はしっかり頼むよ」

「はい、分かっています」

事務員の説明に元気よくお辞儀をして、彼女は鍵を受け取って微笑んだ。

階段を上がり、休日のがらんとした校舎の廊下を通って、二人は図書室の前まで来る。

成実が鍵を開け、先に室内に入る。何の説明もないまま、自分ひとりで本棚の方まで歩いていき、一冊の本を持ってきた。

「あれ、それは……」

彼女が持ってきたのは、清人が以前、カメラに関して資料を探していたときに、成実に見せたものだった。

「これよ、これを探していたの」

成実は誰も居ない、図書室のカウンター横の閲覧席で、ぱらぱらと捲り、問題のキメラのページに行き着いた。

そして、そのページの文章を読むのかと思いきや、怪物に関する挿絵をなにやら必死の形相で見つめている。

すると、突然、

「ああ、これよ。これ」

となにやらページの一部分を指差した。

「なんですか？」

目を向けると、そこに描かれていたのは、白いたてがみのペガサスに乗った一人の戦士の絵だった。その勇猛果敢な様は、一種の神々しさすら感じさせる鮮やかな絵で描かれていた。

「英雄、ベレロフォン……」

成実がそれよ、と指を鳴らす。

「実は、昨日から気になってたのよ。キメラを倒したっていう英雄のこと」

「なぜそれが引つかかっているのか、僕には分かりません」

「言っただじやない、清人君。キメラって物語の最後でこの人に倒されるんですよ。それが普通だろうとかなんとか、偉そうに話してたわよね」

「偉そうか、は別として、確かに言いましたが」

清人はしばし以前の記憶を探って頷いた。しかし、それが今回のことにどう結びついているのか、よく分からない。

「そこで出てくるのが、犯人が流してたキメラの噂よ」

「今度は噂ですか」

「これも昨日あなたが言ってたことよ。犯人の目的は『来るべき時』だっつて」

「ええ、はい。つてまさか」

清人はそこでようやくその事柄が結ぶ意外な結論に気がついた。

つまり、もし、この事件がキメラの物語に乗っ取って行われているとしたら。結末を犯人がそう考えているとしたら、という不気味な仮定である。

だが、もしそうだとしたら、

「そうよ。犯人は待っていたのよ」

重々しく、成実の言葉が響く。

「キメラを倒してくれる英雄が現れる《……》ことを」

「ど、どういうことですか？ 犯人はキメラを倒してくれることを望んでいたんですか？」

清人にはまるで意味が理解できない。

「さあ、それはよく分からないけど、英雄の出現を望んでいたんじゃないのかしら。そして、それこそが犯人の真の目的」

「でも、その英雄って誰です？」

そうだ、まだ清人には分からないことがある。犯人がこんな事件まで起こして待ち望んだ英雄とは誰なのか。

「実はね、つい二日前、私はこのベレロフォンの絵をあるお宅で拝見したの。アルバムの最後のページでね」

「え？」

「それに、そこへ向かう車の中で、妻沢君だっけってたじゃない。英雄がどうのこうのって、ずいぶん熱っぽく」

成実にそう言われ、清人は血の気が引くのを感じる。

そして、脳内で、二日前リムジンの中で話したことを瞬時に思い出した。そして、それが導くことがどういう意味なのか、理解する。

成実の言うことが本当なら。

彼女が言う、事件の黒幕って。

「まあ、それはあくまで推測。後は本人から聞かせてもらいましょうか。そこで聞いてるんでしょ、入ってきたらどう？」

「先輩、本人って」

清人がそういいかけて、背後の入り口のドアが開いた。静かに靴音を響かせて、一人の人物が入ってくる。

振り返りながら、清人はその少年の姿を眼に捉えた。つい、二日前に会ったばかりのその少年の姿を。

茶に染めた髪を片手で払いながら、もう片方の手をポケットに突っ込んで、仙崎透が立っていた。

「すごいな、分かったのか」

透は言葉の割りに、少しも冷静さを失っていない、むしろ余裕さ

え感じさせる口調で言った。

「あなたって、尾行が下手ね。体育館のところから気づいてたわ」

観念したように透が肩をすくめる。

「最初からか、これは参ったぜ。上手く隠れていたつもりだったんだがな」

「何か見られてるって、視線に気がついたの。いつだったか、ここで妻沢君と調べ物をしていたときに感じた視線もあなただったですよ？」

清人は成実が体育館を離れるとき、不審げに周囲を振り返っていたのを思い出した。彼には察知することが出来なかったが、おそらくあの時、彼女は自分たちとは違う第三者の気配を察知してたのだ。

しかも、透の口ぶりから、どうやら今までずっと後をつけられていたらしい。

しかし、全く気がつかなかった。

「ご明察。あれにも気がつかれていたとは、正直驚きだ。一瞬目があつた気がしたのは覚えていますが、まさかそれだけで、とはね」

「女をなめない方がいいわよ。勘が鋭いんだから」

「あの、ちょっと」

清人は自分が話に置いていかれている気がして、そこで口を挟む。

「仙崎さんだったんですか？」

「だからそう言ってるだろ。尾行してたって……」

「そうじゃなくて、この事件を起こした人間ことかかってことです」

「ああ、そつちのことか。そつだ、俺がやった」

あまりにもあっさりとは彼は肯定する。その軽々しさは、「食器？それなら俺が洗っておいたよ」という日常程度の会話と同列にも聞こえるほどだ。

それに対し度肝を抜かれ、椅子から飛び上がりそつになる清人だったが、成実がさらに追い討ちをかける。

「そつよ。彼こそが今回の事件の首謀者。キメラの正体よ」

「しゅ、首謀者？ 本当に？」

「そつだぜ。俺がこの事件を全て計画し、実行に移した張本人だ」

これまた、ためらいもなく首肯する透。

「あの三人を使って記憶喪失になった振りをさせ、狂言の失踪事件を起こしたのね？」

「おいおい、そんなことまで分かってたのか」

そこで初めて彼は本当に驚いた表情を見せる。てつきり、その推理を知っていたのだと思っていた成実は目を見張る。

「当たり前じゃない。そこまで考えて、あなたが事件を起こした人間であるところまで行き着いたのだもの」

「ああ、なるほどね。全部バレバレか」

彼は手のひらをひらひらとさせて、力が抜けたように二人の手前の椅子に座った。

至近距離に彼が来たことで清人はいつでも立ち上がれるように身構える。事件の犯人だと分かった以上、油断できないと思ったのだ。そつという人間というものは、いつ隠し持ったナイフで胸元を一突

きされるか分かったものではない。

しかし、彼はそんな清人を見て笑いながら、大丈夫だ、と首を振る。

「別に危害を加えるつもりはないって。俺は話しあいに来ただから」

「本当ですね？」

清人は念を押す。すると透の表情が少し強張る。

「お前、妻沢って言ったか？ あのな、俺はそんなことで嘘はつかない。信用しろ」

「これだけの大騒ぎを起こしておいて、そんな人間を信用しろと？ 無茶言わないでください」

成実は強い警戒を込めた睨みで透を牽制する清人の肩を持った。

「大丈夫よ。彼から敵意は感じないわ。落ち着きなさい」

「でも……」

「いいから、腰を下ろしなさい」

そう言われて、彼は渋々ながら警戒のレベルを下げたようだった。ちらちらと透に視線を送りながらも、椅子に座る。

「ご理解、感謝する」

丁寧な透は礼をした。

「それはどうも。話し会いをしにきたのよね。それはどういふこと

「？」

「まあ、分かっているんだと思うが、昨日の夜、あんたらを襲ったのは俺たちだ。正確に言つと、俺と叶野さんだが」

「叶野つて、あの運転手の？」

成実はタバコを吸い、くたびれたシャツでリムジンを運転していた中年の男を思い出す。およそ、お金持ちとは無縁そうならしなさがにじみ出ている男だった。

「そう、この件にはあの人にも協力してもらっていた。手伝ってくれる人は俺の家にはいないからな」

「そう、あの人も共犯。それで？　続きを話して」

「……実は、あんたら新聞部が事件のことを調べていると知った時点で、俺は警戒していた。自分の計画が邪魔されるんじゃないかと、冷や冷やしていたというわけだ」

彼はそう言つて、ユーモアのつもりか、掻いてもいない、額の汗を拭う振りをする。

「この前、篠田が行方不明になった事件であんたらを呼んだのは、どのくらい事件について、積極的に調査をしているか気になったからだ」

「なるほど、その度合いによつては、自分の計画に支障が出ると思つたわけね」

「そうだ。それでその結果、言葉は悪いが『目障り』だという結論に達した。あんたら二人はそれなりに頭が切れそうだったからな。余計な影響が出る前にすぐさま、迅速に手を打った方がいい、そう考えた」

「お褒めに預かり光荣ね」



成実は薄い微笑で透に返答する。だがそれが、上辺だけの言葉で感情のないジョークだとはすぐに分かった。

「いやいや、光荣だなんてとんでもない。話を戻すが、そういった理由で、昨日の騒動を起こした。あれであんたらが懲りてもう事件の調査をしなくなってくればよかつたんだが、朝になるまで待つて尾行してみると、こうして、図書館に来てまだ調査をしている」

徹は作戦が失敗したと考え、それで全てを諦めると、成実たちに直接対話を申し入れると同時に、交換条件を提示することにしたのだと言う。

「交換条件？」

「事件の全てを話すから、黙って欲しいってことだ」

「それはまた虫がいい話ですね。知りたい情報を教えるから、新聞部に黙秘しろと？ 相談する相手が違うんじゃないですか？」

清人がここぞとばかり身を乗り出し、透の提案に敵意をむき出しにする。

「ちょっと、妻沢君、待ちなさい」

「で、ですが」

「仙崎君、とにかくこの事件のあらましを話してもらえるかしら。私達がそれを黙っておくかどうかはそれから判断させてもらうわ。それでもいい？」

「ああ、もはやこつちがどうこう言える立場ではないと思ってる。もしここで交渉が決裂すれば俺はあんたらを止めることは出来ないと思うし」

それじゃあ、と彼は椅子の上に深く座り、体勢を整えなおすと、

事件の全てをとつとつと語り始めた。

## 第十章 牙を持つ者 <4> (前書き)

この部分を投稿するに当たり、「第三章 新たな爪痕 <4>」の最後の数行を修正しました。些細なことではありますが、内容が少々不自然であると考えしたためです。

大した違いではありませんので、気にせず読んでいただいで大丈夫だと思います。

## 第十章 牙を持つ者 <4>

透が話すには、この計画を考え付いたのは、今からおよそ一月前だったらしい。

「とにかく俺は、出来るだけ大きな事件を起こす必要があった」

そう彼は語る。

「出来るだけ、大きな事件？」

「そうだ。新聞やテレビで取り上げられるくらいなの。複雑で、謎が多く、さらに誰も聞いたことがない。誰もが興味を持つような、そんな事件だ。新聞部なら分かるよな。人間がどんな事件に興味を持つのか」

「ええ、そうね。分かるわ」

確かに今回の事件は人々の関心を引き、好奇心をかきたてるものだったと言っていていいだろう。

現に成実はそうなった人間の一人である。

「我ながらタネが分からなければ、なかなか面白い事件だと思う。生徒が次々に失踪し、しかも、全員が記憶喪失。さらに、学校ではカメラの噂が流行っている。不可解この上ないだろう？」

「確かに、あなたの目論見は上手くいったようね、テレビや新聞でも取り上げられている。おめでとう」

成実は彼の計画を賞賛して軽く茶化した拍手をしながら言った。

「……拍手されるようなことをしているわけじゃないが、ともかく

俺の目的はそうやって皆に大騒ぎしてもらうことであつた。しかし、そうはいつても、行方不明になつた生徒の家族は、それはそれは居ても立つてもいられないくらい心配するだろう。それは俺の目的と反している」

「それで、行方不明の期間を出来るだけ短くしたのね」

成実が言うと、急に透の表情が曇る。まるで、急に我を失い、遠い記憶を遡っているように、視線を宙に向けこう言った。

「ああ、俺は家族が居なくなる不安を知っている。だからこそ、そんな苦痛を感じさせるのには抵抗があつたんだ」

「そうか、そういうことだつたんですね。先輩が控えめだつたつていう意味が分かりました」

清人がぼんと手を叩く。

「控えめ？」

「その時はまだ仙崎君の目的が分からなかつたから、そう思つたのよ。この事件が犯人の手によつて行われているとしたら、やつてることが地味だつてね」

予想外の反応だつたのか、透は思わず相好を崩し苦笑する。

「まさか、そんなことを言われるとはな」

「これで事件の不自然な点は分かつたわ。でも、よく被害者役の三人とも引き受けてくれたわね」

「それなんだが、まあ、かなり申し訳ないと思つてる。俺がどうにか引き受けてくれないか、と頼んだんだ。当然、むずかしかった。

なにしろ彼らには何も得るものはない。自分の目的のために、こんな大芝居をやるんだからな」

「……」  
「藤咲と篠田は塾で知り合った仲、沢口は中学でよくつるんだ仲だった。沢口は下校中に声をかけたんだが、まあ、三人の中では上手く説得できた。問題は後の二人だったな、何度も頭を下げて、了承してもらった」  
「あの二人、人が良さそうだったから、先輩に頭を下げられたら断われなかったのね」

成実は気の毒に、と同情した。

「申し訳ないと思ってる。特に藤咲の場合は別の問題も発生したしな」

「別の問題？」

「檜山だよ。あいつは藤咲が居なくなっただことを聞いて、ずいぶんショックを受けているって聞いた」

確かに、彼の言うとおり、千穂は親友の失踪にかなり心的なダメージを受けているようだった。

あのととき彼女は、成実が言った些細な言葉にまで反応し、倒れてしまうほどだったのだ。もし、あのまま由貴が見つからなければと思うと、彼女は今頃どうなっていただろう、と清人は不安にも思えるほどだった。

「実の家族以上に、ショックを受けているようだった。本当に申し訳なく思ってる。謝りたいよ」

「本当にそう思ってるの？」

急に成実がそんなことを訊く。一瞬動揺した透だったが、すぐに何度も頷いた。

「あ、ああ。心の底から謝りたい」

そう言った彼の表情は凜とした決意が宿っていて、嘘偽りのない本心であると成実には分かった。  
よろしい、と人差し指を立てる。

「なら、今から謝りなさい」

「へ？」

透は間の抜けた顔をした。

「先ほど連絡しておいた彼女が着いたようよ」

すると、それと同時に再び図書室の入り口のドアが開く。  
清人は誰だか知らないが、真面目な生徒が勉強でもしに来たのか  
と思っただが、違う。

「あの、失礼します」

「……檜山さん」

制服姿の彼女は、いつものようにおどおどした様子で、目が合った清人の礼をして、小走りでこちらに向かってきた。

「あれ、どうして仙崎先輩も？」

驚いている彼女に対し、成実は静かに願い出る。

「ともかく、椅子に座ってもらえるかしら。全ては仙崎君から聞いてくれる？」

きよろきよろと場に流れているどこか殺伐とした空気に戸惑いながら彼女は向かい合った椅子に座る。

そこで意を決したように、透は口を開き、

「檜山に、謝らなければならぬ」

と頭を下げた。

困惑する彼女の前で、透は成実たちに説明したことと同じ話を繰り返す。千穂はその事実には驚きながらも終始、彼の話に頷き、必死に聞いていた。

俯いたままの透が、覇気のない弱弱しい声で謝罪している。

「俺が全部悪いんだ。罵倒してくれても構わない。けれど、藤咲だけは恨まないで欲しい。あいつは俺のためを思って協力してくれた。いや、強引に俺が協力させたんだ。周りの皆に心配をかけると分かっている」

すると、それを聞いた千穂は怒るわけでもなく、小さく首を振った。

「仙崎先輩。頭を上げてください。実は私、薄々、今回の事件に先輩が関係しているんじゃないかとは思ってたんです」

「え？ 知ってたのか？」

驚いている彼女の前で彼女は制服のポケットから携帯電話を取り出すと、なにやらボタンを押し始めた。メールの着信の履歴を見ているらしい。

「あの日、由貴ちゃんが居なくなっただ日に、先輩から送られてきたメールです。私、これを見て、心配している私を励ましてくれてる



んだと思っていました」

千穂が机に携帯電話を置き、その文面を全員に見せる。

「でも、読んでもらえれば分かるように、なんだか、変な箇所があるんです。私はあのとき由貴ちゃんが交通事故に巻き込まれたんだとか、誘拐されたとか、いろんな可能性をかんがえていたんですが、この『藤咲が失踪したのはお前のせいじゃない』ってところ、妙なニュアンスを感じませんか」

「確かに今思うと変な文章だな」

自嘲気味に透は笑う。

「私もその時は気が動転していたので気がつきませんでした。励ましているようにみえて、まるで、由貴ちゃんがどうしていなくなったか、理由を知ってるみたいにも読めませんか。それで、先輩のこと変だなって」

「それで、仙崎君の家に来たとき、わざと紅茶をこぼしたのね」

「え？」

今度は千穂が驚く番だった。確かに、彼女は仙崎邸で全員に紅茶が配られた際、不注意でそれを机にこぼしていたのだ。

「どうして、それを？」

いや、この発言で故意ということが判明した。

「稲葉は何でもお見通しだな」

透は賞賛の溜息を漏らすと、御見それしました、と頭を垂れた。

「そんなことないわ。なんとなくそう感じたの。彼女の様子からね。おそらく、帰ってくるのが遅かったところからして、お手伝いさんから話を聞いたんじゃない？ 最近の仙崎君の様子を」

「すごい、全部当たってます。でも、その時には大して情報は集まりませんでしたけど」

「けれど、トイレに行くだけでも言えばよかったものを。わざわざ紅茶をこぼさなくても」

すると、千穂は恥ずかしそうに頬を赤くし、目を伏せる。

「ええとですね、それは誰かに一緒について来られると困ると思っただのが一つと、その、皆さんが真剣なムードで、なかなか切り出せそうになくて」

「……ああ、なるほど」

清人と透は彼女のおどとした挙動を見ながら、深々と納得する。

「でも、切り出せなかったのはともかくとして、誰かがついて来る可能性については気がつかなかったわ。よくいるしね、トイレに便乗する人。檜山さん、意外と頭いい？」

それには、清人が手刀を横に振る。

「お言葉ながら、先輩。それはとても失礼な発言ですよ」

「あ、ごめん。深い意味はないの」

過ちに気づき、慌てて謝る成実。しかし、先輩に謝られることに恐縮したのか、逆に千穂は頭を下げてしまう。この少女、誰かから

謝られることに、極端に不慣れらしい。どうしても対処に困り、おどおどとした態度になってしまうのだ。

そのぎこちないやり取りがひとしきり終わると、思わぬことを成実がつぶやく。

「でも、篠田さんもかなり控えめというか、自信がなさそうなひとだったわよね」

「あん？　なんでそこで篠田が出てくるんだ？」

透が怪訝そうに眉をひそめた。

「気がついてたのよ、私。彼女が事件の話をするとき、遠慮がちに横にいる仙崎君をちらちら見てたの。あれは、彼女が事件のことで自分が余計なことを言わないか、言ってもいいことかって、それを確認してたんでしょ？」

「……稲葉」

「何？」

「もう降参だぜ」

彼は両手で万歳をすると、そのまま椅子の背もたれに倒れこんだ。しかし、成実は立ち上がると、びしりと透の顔を指差し、こう言い放った。

「まだよ。まだ終わってないわ」

「何だ？　まだ俺をいじめるのか？」

「理由よ。この事件を起こした動機」

「動機、か」

「そつよ、全て話してもらうんだから！」

彼女の瞳は揺るがない光を湛え、追求の色を失っていなかった。

## 第十一章 来るべきその時 <1>

しつかり三回は深呼吸ができるほどの沈黙を置いて、透は前かがみに椅子に座った。嫌でも場の空気が張り詰め、次なる彼の第一声に注目が集まる。

清人は口の中がからからに渴いているのに気がついた。先ほど、あれほど水分を摂ったはずなのに、いったいいつの間に水分が抜けていったのだろうか。

汗ばんだ手のひらを握る。

「全ては、俺の親父から始まって」

そう語り始めた彼の言葉は、まるでこれから日本の数千年の歴史について話し出すような、そんな長い年月の蓄積を経た重みを感じさせた。

「あの男はな、俺と母さんを捨てたも同然だぜ」

「……」

「このことは前にも話したよな。親父はソフトウェア会社の社長だつて。なんでも、超ご多忙な身らしくてよ、ここ数年、まともに顔を合わせたこともないくらいなんだ」

ええ、知っているわ、と成実が頷いた。

「利益優先だか、なんだか知らねえけどよ。そうでないと弱肉強食のこの世界じゃ、やっていけないとか抜かしやがってさ。家庭を顧みずに会社に命をかけてる人間なんだ。俺が分析するにきつと自分が一番でないと安心できないタイプだな。そのためには何を犠牲に

したってやり遂げる」

彼はやはりそう語りながらも怒りを抑えられないのか、齒軋りをするように口をかみ締めているのが見えた。

そんな彼の様子から、成実は彼が長い間抱えていた破裂しそうな負の感情に身悶えていたのを知った。

父がいない、そんな生活を過ごしてきた彼。

「俺は、おれは、いつも母さんと二人の生活だった。でも、最初はそれでもよかった。母さんは優しくかったし、父親不在の家でも、充分家族のぬくもりを感じていられた」

透は自分の手の平を机の上に開いてみせると、何かを見えないものを掴み取るようにぐっと握り締めてみせる。

「でも、耐えられないことがあった。それが親父が居ないことで母さんが苦しんでいる姿だ。大事な結婚記念日にも、俺の誕生日にも、新年を迎えるときにだって、親父はいつだって居なかった。いたことなど、皆無だった。そんな状態の中で母さんは無理してた。俺の手前、気丈に振舞って明るい笑顔を見せていた。でも、俺は知ってた。親父が帰ってこないことに失望し、埋められない隔たりを感じ始めていたことに」

「仙崎、君……」

「母さんが望んでいたこんな家庭じゃなかった。もつと家族全員が笑って暮らせる、穏やかな家庭にしたかったんだ」

そこで、透はふつと息を漏らし、体から力を抜くように、肩を動かす。

「これは、母さんから聞いたことだけど、母さんの実家はもともと貧しかったんだってさ。ろくに働かない父親がギャンブルにはまっ  
ててさ、生活費は削られていくし、おまけに家にいれば暴力を奮う。  
そんな駄目な父親だったらしい。家族のぬくもりからは程遠い生活  
だったんだってさ。だからこそ、自分が結婚したら、そんな家庭は  
作りたくなかった。そう思っていた、誓っていたのに、結果はこの  
様子さま」

千穂はその話を聞きながら胸が潰されそうな思いだった。両親が  
普通に家にいる、それが常識だと思っ  
てこれまで生きてきた。

でもそれは違った。

自分が思っている当たり前も手に入れることができずに苦しんで  
いる人々がいることを冷徹な事実として、今、受け止めていた。

その間も透は言葉を続ける。

「それが原因で、親父と母さんは俺が小学校三年の時に離婚した。  
俺は親父に引き取られたが、まあ、引き取られただけだよな。実際、  
親父は俺にほとんど構うことなく、世話を自宅の手伝い人に一任し  
てるんだから」

「……」

「そのころからだな、俺が親父に対して、本気で怒りを感じ始めた  
のは。大好きな母さんを悲しませておいて、自分は未だに会社経営  
の中枢に居座ってる。それで、それで、ここ最近になって、また親  
父の会社は新たな商売を始めた」

その発言に、清人ははっと顔を上げる。

「あの、ゲーム業界への参入ですか？」

「ああ、それもあるが、もう一つある。知ってるか？ スペーストレジャーランドだ」

「確か、隣県に出来たっていう、あの大型レジャー施設ですか？」

これには成実が素っ頓狂な声を出す。

「あ、あなたのお父さん、経営に携わってたの？」

「経営というか。その施設を管理するシステム開発に携わってるらしい。よく知らねえが、なんでも顧客情報や、施設内の人の流れを分析したり、ともかくアトラクションの運営なんかを総括的に調べることが出来る最先端のシステム開発なんだそうだ」

「そうだったの」

「それで、俺はもう我慢できなかった。ふざけてると思った。自分の家庭がこんな状態で、まだ商売に傾いていくのか、とね。それでそんな馬鹿に一言言ってやりたいと思った。でも、それはむずかしい。俺が話しがあると行ってすぐに会えるようなら、こんなことにはなっていないからな」

「まさか、それで事件を起こしたの？」

成実の鋭い指摘が彼を貫く。しかし、それには全く動じず、彼は答えた。

「ああ、そのまさかだよ。自分の息子がこんな事件を起こしていると知ったら、どんなふざけた親だって無視は出来ねえだろ。向こうから俺の元にやってくると考えたわけだ。それで、キメラはメッセーだ」

「メッセー？」

「あんたらがさっき言ってただろ？ キメラを倒すのは英雄さんなんだろ。会社経営をどん底から立て直した英雄さんの親父なら、



気づくと思っただよ。父はギリシャ神話には詳しくあったからな」

成実は彼の自宅で見たアルバムの最後のページを思い出す。そこに描かれていたのは確かに英雄ベレロフォンの絵だった。もしかすると、彼の父親は自分のことをその英雄と重ね合わせていたのかもしれない。

「それでもって、のこのこやってきやがったら、一言言ってぶん殴ってやる計画なんだ。お前の過ちで、息子は狂言とはいえ、こんな事件を起こしたんだぞって、そう思い知らせてやりたかった」

「それで、こんなことを」

「奴と、決別したかった。決着をつけたかったんだ。一対一で話をして、もうお前は親父じゃねえんだぞ、って言い放ってやりたい。

でも、その前に事件を解かれるのは嫌だったんだ。親父自身が気がついて、過ちに気がつき、自分から学校に向いて来て欲しかった。だから、稲葉。新聞部に邪魔されなくなかった」

「なるほどね。それで、私達に黙っていて欲しいって言ったのか」

「……頼む」

彼は泣き出しそうな、弱弱しい声で懇願した。成実は立ち上がり、そんな彼を見下ろすと、優しくこう言った。

「あなたの気持ち、私も分かるわ」

「え？」

「私も、父親が家に居ないようなものだったもの」

そうだ。

清人は思った。

確かに、透と成実には確固たる共通点がある。二人とも、父親の

存在が希薄な家庭に生まれ育った。

確かに置かれた状況は違っただろうが、二人は同じものを根底に持っている。

あるべきものが存在しない、喪失感を。

そして、これまで生きてきた。

一方は、そんな父親に怒りを持ち、一方は、父親の背中に夢を追って生きている。

同じものを持っていながら、そんな対照的な生き方をしているのだ。

「そう、なのか」

「ええ。あなたが怒るのも当然だと思う」

しかし、そこで彼女は理解を示した柔和な表情から一変し、毅然とした態度でこう詰め寄った。

「でも、こんなことは間違っているわ。いくら虚構の失踪事件だと言っても、関係のない周りの人を巻き込んで、無意味に皆を不安な気持ちにさせた。それは罪よ。あなたにはその重みが分かってるの？」

そういわれて、透は成実の目を見つめ、そして、見つめ続けることが出来ず、俯いた。

「分かってる、もちろん、申し訳ないと思ってるさ。決して許され

ることじゃない。この責任は全て終わってとるつもりだよ。元からそのつもりさ」

「そう、分かっているのね」

「でも、親父が、このカメラの巢に来るまでは、俺は……」

彼がそういう掛けて、何かの騒音がその言葉に覆いかぶさってきた。それは窓の外から聞こえていて、四人は同時にその方向に顔を向ける。

その音は次第に近づいてきており、空から校庭に降りてくる影が見えた。

どうやら、ヘリコプターのようである。その機体の側面に見覚えのある、S Zという会社のロゴマークが見える。

「親父だ」

透が言った。

## 第十一章 来るべきその時 <2>

成実たちが走って校庭に出たときには、学校に飛来したそのヘリコプターは校庭のご真ん中に着陸し、大きく砂埃を上げながら、プロペラがゆっくり止まる瞬間だった。

クラブの練習に来ていた生徒達が何事かとその周囲を囲み、辺り一帯騒然としている。職員室から駆け出てきた教師達が、そんな野次馬化した生徒達を安全な場所へと避難させようと、必死に指示を始めている。

透は、そんな喧騒の中を迷わず、白く光る機体に近寄った。

成実たちはそんな彼を止めなかった。いや、止める必要もないと思っていた。

これが彼が待ち望んでいた『来るべき時』だったのだ。

透はその両足でしっかりと地面を踏みしめ、そのヘリコプターまで歩く。砂埃が舞い、彼が歩いた足跡を攫っていく。

すると、側面のドアがスライドし、そこから一人の男性が颯爽と降り立った。

「あ、あの人です。会社の社長の……」

清人がそう説明するが、成実はそんなこと、聞いていなかった。そんなことよりも、これから、透と、その父親に何が起ころのか、その目に焼き付けておきたかったのである。

『真実を見届ける』

記憶の言葉が蘇る。

自分にはもはや、透のように向き合える父親は存在していなかったが、成実はその時、父親が傍に立っているような、そんな不思議な感覚だった。

まるで、肩に手を置かれているような、そんな感じ。

話しかけられたようでもある。

『これから、どうなると思う？ お父さん』

『さあな。でも、よく見ておけよ』

黒いすらりとしたスーツに身を包み、まるで岩石のような貫禄を漂わせた透の父親が立ち止まっている透に近寄る。

二人の間で静かに二、三言の言葉が交わされたようだ。びりびりとした緊張の余波がこちらまで伝わってきそうである。

父親が一步步み寄り、再び、少しの会話。

その瞬間だった。

透がすばやく反応し、ぱっと父親の懐に飛び込むと、

「あ、殴った！」

父親の左の頬を殴っていた。

かなり力が籠もっていたようで、見ていたこっちも痛そうに見える。そのまま父親はふらつき、地面に倒れこむかに見えたが、持ち直した。

頬の辺りを手のひらで拭って、彼と対峙した。そして、すっと腕を伸ばすと、透の肩を掴む。

「何、してんだよ！ 俺に触るな！」

透は本気の大声で、嫌悪感をあらわにした。数年ぶりにまともな顔を合わせた父親にこうして肩に手を置かれている。

嫌いな父親に。

拒絶して当たり前だった。

しかしなぜか、突然のことに体が硬直している。抵抗できなかった。

父親は落ち着いたもので、

「嫌なら、抵抗してもいいんだぞ。今みたいに思い切り殴ればいい」

そう言った。

動けない透は唯一動く口で躊躇なく罵った。

「この、馬鹿親父が！ お前のせいで……全部お前のせいだ！」

「もう何年も、こうしてお前の顔をまともに見ていなかったな。とても、大きくなった」

「うるさい！……それはお前が帰ってこなかったからだろ！」

「今さら、お前にどうやって謝罪をすればいいやら、本当に俺は情けない父親だ」

「そつだよ、遅すぎんだよ！ 今まで、どこほつつき歩いてんだ。

もう母さんもいねえんだぞ！ 取り返しもつかねえよ！ あんたの

責任、自覚あんのかよ!」

すると、父親は不治の病を宣告されたかのように目を開けたまま身体を硬直させた。

取り返しのつかない、ことをした。

その事実を改めて息子から突きつけられて、言葉を失ったのだ。

きつとそうなのだろう。

「それは、今自覚してる。お前には、背負う必要のないものをいろいろと背負ってもらっていたんだな」

そして、いつもの自信満々で会社を取り仕切っている父親はどこへやら、自らの過ちを苦々しげにかみ締めている一人の男がそこにいた。

一方は、透は自分が今まさに、涙を流そうとしているのが分かった。今まで押さえ込んでいたものが全て声や体の動きとしてあふれ出ていて、どうしようもないくらいに何も出来ていなかった。

暴発したような感情。

俺、泣くのかよ。高校生にもなって。

父を殴る気には、もう、なれなかった。

「最初は、俺も俺なりに家族のためを思って、全力で仕事に打ち込んでいたつもりだった。だが、いつから何を間違えたんだろうな。もう会社のことしか頭になかった。会社こそが自分になっていた。自分に家族がいることをすっかり失念していたんだな。今回のことで充分思い知らされたよ」

「それで、済まされるかよ……。そんなことで、俺の怒りが……」  
「そうだな。その通りだ。俺にはお前の父親だと名乗る資格すらない」

「あんななんか、嫌いだ。どっかに消えろよ」

「……」  
「許してくれ、なんていうつもりじゃないだろうな」

透の震えた声が彼を突き放す。

「もちろん、今さらそんな腑抜けたことを言うつもりはない。ただ、こんな駄目な親父にもチャンスをくれないか？」

「チャンス？」

「そうだ。俺と透、お互い一人の人間同士として、もう一度関係をやり直すチャンスだ」

「……」

思わず、透は言葉を失った。

「おこがましいとは思ってる。家族との関係を散々、ばらばらにしておいて、そんなことを言うだなんて」

透の体が知らず、震えていた。

だが、それは怒りからではないことに、彼は気がついた。

あれほど、自分に素っ気無かった父がこうして自分と対等に向き合っている。向き合ってくれていることに新鮮な感動を覚えていたのだ。

「……親父」

「俺が底抜けの馬鹿だった。頼む、俺にチャンスをくれ。透」



実の父親にこの状況でそんなことを言われて、どうするのか迷わない子供はいない。

でも、本当は、透の中での答えは決まっていた。  
ふっと息を吐き、くるりと背を向ける。

「……一週間とか、一年とかで、埋められるものだかと思うなよ」  
「透？」

「あなたが俺や母さんに与えた傷だよ。これはな、ちょっとやそつとじゃ埋まらねえからな」

そう言いながら、彼の中では遠い昔に忘れ去られ、自らの内、心の深層に埋没していた大切な宝物を掘り起こした気持ちだった。

そして、自問する。

取り戻せたのか？

俺は、何かを。

「透、それは……」

父の声が驚きに満ちている。

「久しぶりにあつて、いろいろ言つて、殴つて、それなりにすつきりした。まだまだ許してねえけど、これからどうなるかは……」

「どうなるかは？」

「まあ、親父の努力次第だな」

「そうか、くれるのか。俺にチャンスを」

「……」

「ありがとう」

「……」

何も言えなくなった透は涙がこぼれないように空を向いた。そうしていると、急に母のことを思い出した。声を、聞きたくなった。

今日が終わったら、会いに行くか。

そう思って五月の清涼な空気を胸いっぱい、吸い込んだ。

そんな親子の様子を遠く、校舎の前から見つめている成実たちの姿があった。

どうやら、透たちは一件落着きといったようだったので、花壇をかこっているレンガの端に腰を下ろして、溜息をついている。

千穂は遠くに由貴の姿を見つけたようで、そちらに行ってしまったようだ。

成実たちの周囲では未だ何事かと事態を飲み込めていない生徒たちと、事態を收拾しようと躍起になっている教師達がわたわたしている。

清人は頭を掻いて、横で座っている成実に話しかけた。

「で、先輩。どうするんです？ 今回の事件の真相。記事にするんですか？」

成実は再び父親と何かを話し始めた透を眺めながら言う。

「そうね。これだけいろいろと苦労して調査したから、記事にしたいのには山々なんだけどね」

「そうですね、いつもさぼっている分、一生懸命調べましたもん

ね

清人は眼鏡を押し上げながら、意味ありげに言葉を強調させる。

「本当に、嫌味な後輩ね」

「いえ、僕は事実を述べたままでですって稲葉先輩。それで、どうするんです？」

「そうね。ジャーナリストならば、本来、一般市民に真実を伝えるという仕事を怠ってはならないと思うわけ」

「ふむふむ」

聞きながらわざとつぼく彼は頷く。

「でも、今回は親子の感動の再会に水を差すような、不粋な真似はしたくないのよ。事実を知っている私達が黙っていれば、生徒が一日だけ行方不明になっただけの実害のない事件なんて生徒も、世間も、すぐに忘れちゃうだろうし」

世の中とはいつもそういうものだ、成実は思う。熱し易く冷め易い、鉄のようだ。

時代はいつも新しいものを求め、古いものは忘れられ、廃れていく。

それが自然の摂理でもある。

「はい、僕も同感です」

「これで、一応めでたしめでたしが一番いいんじゃないの？」

「そうですね。やっぱり物語の終わりっていうのは、こうというのが一番良いと思います。全てに片がついたわけではないでしょうけど。とりあえず、キメラは退治されたようです」

「はあ、これで今までどおりの平穏な日々が戻ってくるわけね」

首を回しながらストレッチをするようにのんびり言った彼女の一言に、清人は敏感に反応する。

「といつても、やるべきことはやらないといけませんけど」

「やるべきこと？ 何それ？」

そう言った彼女にはもはや、やる気のかけらも感じられない。

「取材ですよ。僕らは新聞部なんですから、新聞書かないと」

「それは、適当でいいでしょ。ほら麻子から根も葉もない噂でも聞いて、それ、丸写しで」

「いい加減にしてくださいよ。やっぱり先輩にはもっと自分に厳しくなってもらわないといけませんね」

清人は眉間に皺を寄せながら、どうしようもないやんちゃな子供の親のような白い目で彼女を見る。

「まあ、今はそんなこと考えなくてもいいでしょ。一仕事終えたんだから」

「……それもそうですね」

清人は肩の荷が下りたような、安堵の吐息を漏らす。そして、急にどこか関係のない遠くに視線を向けたと思うと、

「ああ、そつだ稲葉先輩。言い忘れてました」

そんなことを言った。

「何？」

「……お疲れ様です」

成実も自然と笑顔がこぼれる。

「ふふふ、妻沢君もお疲れ様」

エピソード (前書き)

## エピソード

小さな部室の北側の壁には窓がある。

普段、降り注ぐ暖かな陽光に縁のないその窓はその光を取り込むことなく、専ら換気用として使用されていた。

広国高校一年の清人は今日も勉強がてらに部室を訪れ、その窓のクレツセント錠に手をかけた。

鍵をはずし、スライドさせ、風の通り道を作る。

そうでもしないと、この部屋の積もり積もったほこりっぽい古めかしい匂いが籠もったままとなるのである。

以前、芳香剤を買ってきていたのだが、その効果も少し弱まってきたようだ。また新しいものを買ってこなければならぬだろうか。

雨粒が滴る六月。

清人がこの高校に入学してから早くも二ヶ月が経った。

全く、時の流れというものは恐ろしい。

学校中がああ奇妙な暗い噂に満ちたのも、いまや、嘘のことにように、話をしている生徒を見かけることすらない。

成実の言う、世間の興味が他の新しい話題に移った証拠だった。

今、学校中で持ちきりな話題とえば、突如休日の校庭に出現した大手会社のヘリコプターである。

皆、なぜその会社の社長がこの学校に登場したのか、当惑してい

る状態で、出所不明の微妙な情報が錯綜さくそうしていた。

この学校に近いうち、莫大な寄付が施されるんだとか、この学校に通っている息子に渡し忘れていたお小遣いを手渡しに来たとか、おおよそそんな具合だ。

張本人である仙崎が口をつむっているのです、おそらくこの取るに足らない噂も、そのうちに消えてなくなるに違いない。

そう言えば、彼が起こした例の事件は数日前、秘密の会合があり、関係している者たちが密かに集まって、全員秘密厳守ということになっていた（このとき集まった風馬は、なぜ自分にもっと早く真相を教えてくれなかったのかと、嘆いていた）。成実の言ったとおり、これが一番誰にとってもいいだろうということになったのである。

おそらくこれで、全て終わりなのだろう、と清人は思う。

誰かが漏らしたところで何か得をするわけでもないし、おそらくこのまま忘れ去られていくに違いない。

この事件で、なにやら面白半分に騒いでいたマスコミも静まり、警察もあれ以来事件が起こらず、ほとぼりが冷めたのを安心したように、数日前に一度だけ注意喚起のチラシを配っただけで、それからは何も無い。

皆、平穏な生活に戻っていた。

だが、しかし。

「うがー、ひーまーだー」



後ろから聞こえてくるのは、この鬱屈とした空模様の上に行く退屈そうな声だ。

この新聞部の部長、稲葉成実の嘆きである。

「全く、いつも言ってることですが、暇ならどこかに取材に行ってくださいよ」

毎度毎度のこの常套句にも最近、意味がないことに気がつき始めた。

なぜなら決まってこの後、

「しゅざいー？ 何それ？」

こうなると清人も学習したわけである。

「はあ、もういいですよ。それなら先輩の好きなだけ、そこでぐだぐだしてるといいです。そのままカタツムリにでもなってください。きっと殻の中の生活はお気楽でしょうね」

「ぐうっ、戦法を変えてきたわね」

「誰と誰が戦ってるんですか？」

「決まってるじゃない。私と、清人君よ」

やれやれ、この先輩ときたら相変わらずだ。

その時、部室のドアをノックする音が響いた。久しぶりの来客である。

「あれ？ どちらさん？」

麻子でないことは確かだった。

彼女はノックというものを知らない。

「新聞部の部屋ってここか？」

視線を向けた先にいたのは、あの仙崎透だった。どこか照れくさそうに頭を掻きながら、部屋の中を見渡している。

「あら、どうしたの？ 仙崎君」

今までぐだぐだしていたくせに彼女は彼の顔を見た途端、元氣よく立ち上がった。

「いや、いまさらなんだが、あんたらにお礼を言いに来たんだ。いろいろと世話になったし、怖がらせたりもしたしな」

彼は視線を成実に向けることが恥ずかしいのか、きよるきよると関係のない壁辺りを見つめている。

「もういいわよ。過ぎたことなんだし。皆であればもうなかったことにしましょうって話をしたじゃない。今さらその話をしにこられても気まずいだけよ」

「ああ、すまん。確かにそうだよな。でもさ、やっぱ、改めてお礼言いたくて」

清人はそんな律儀な彼の様子をみて、以前、彼に対して強い警戒心を持って接したことを馬鹿らしく思った。

彼は彼で、とても責任感のある、真面目な人間だということが分かったのである。

「それで、お父さんとはその後、どうなったわけ？」

成実が腕組みをしながら、訊く。

「親父、か。まあ、いきなり昔のように、ってわけにはいかないが、今までのこと、自分が悪かったって認めて、改善してくれてるよ。自分の仕事を他の重役に割り振って、家に帰る時間を作ってくれるみたいだし。母さんとも連絡したみたいだ」

そう語る彼の表情には笑みが見える。父親と話せたことが、とてもいい影響を与えているようだ。

成実も純粹にうれしい。

手を叩いて喜びを体現した。

「へえ、いい方向に前進してるってわけね。よかったじゃない」

「まあな。少なくともマイナスじゃないから、ひとまずオーケーだ。これからどうなるかはまだ見えねえけど、がんばってみるさ」

「そうね。そのお父さんにはよろしく言うておいて」

「ハハ、分かった。伝えとくよ」

そう言っただけで笑った彼はその場から立ち去るかに見えたが、なぜか、部室の入り口で立ち尽くしたまま、何か言いたそうにこちらを見ている。

「……………？ どうしたの？」

不審に思った成実が聞いた。

「いや、そのさ。世話になっただろ」

「……」  
「だから、俺に出来ることがあれば、言ってくれ。あんたらからの頼みなら、出来るだけ協力したいと思うからさ、それを言いたかったんだ」

「頼みごと？」

「ああ、常識の範囲内なら、なんでもいいぜ」

「頼みごとねえ」

成実は顎に手を当てて、考え込む。すると、途端に瞳を輝かせた嬉しそうな表情になり、

「あ、あのさ……」

「豪邸をプレゼントしてくれ、とかいうのは無しな。いくら金持ちの息子だからってそういうのは無理だ」

「あ、あう……」

どうやら本気でその手の事を頼もつとしていたらしい。いったい何を考えているんだ。

清人は呆れて物も言えない。

しかし、そこで成実は再び何かを考え付き、指を鳴らした。

「そつだ。これならいいわ」

彼女は嬉しそうに鼻歌を歌う。

「なんだよ？」

「多分、妻沢君も喜んでくれると思うし」

「僕が喜ぶ？」

いまいち信じる気になれないが、とりあえず聞いてみる。

「仙崎君、新聞部の部員になりなさい」

「はあ？」

「へえ？」

これには清人と透は二人揃って、驚嘆する。

「あれ、だめ？」

彼女はその二人のその反応にぼかんと口を開けた。

「いや、だめというか」

「妻沢君だって、部員を増やさないとって言ってたじゃない」

「そ、それはそうですけど。いいんですか？」

清人は恐る恐る透に訊いた。

「いや、こっちこそいいの？ 俺みたいなのが部員になって」

「馬鹿ね、戦力になればそれでいいのよ」

すると、成実は腰に手を当て、こう言い張る。

「細かいことは気にしないわ。過去に何か悪いことをしてても大丈夫」

「……ハハ、それはどうも」

透は引きつり笑いを浮かべる。

「え、それ、じゃあ」

「ああ、俺も新聞部に入れてもらうことにするよ。なんだか面白そうだな」

「そう、ならこれで決まりね」

すると成実はその場でステップを踏むと、ジャンプしながらくると身体を回転させ、綺麗に着地してみせた。黒く艶のある髪が綺麗に扇を描いて、さらりと揺れる。

そして、透に向かって高らかにこう言った。

「広国高校、新聞部へようこそ！ 歓迎するわ」

その瞬間、狭い部室に梅雨を通り越した、初夏の涼やかな風が通り抜けた気がした。

## エピローグ（後書き）

作者のヒロユキです。

最後までお読みいただきありがとうございます。ありがとうございました。

一ヶ月と少し、連載してきたこの小説もこのエピローグで完結となります。途中、悪戦苦闘することもありましたが、当初の予定通りの期間で終われました。まだまだ小説書きとして未熟者ではございますが、こんな作品に最後までお付き合いいただきました読者の方々に感謝申し上げます。

作品への感想、不明な点、改善すべき点などありましたら、お待ちしております。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2680h/>

---

キメラの巣

2010年10月8日21時08分発行